

緒方病院產婆養成所長醫學士 東條良太郎  
緒方病院產婆養成所講師 土肥 衛 合著

新撰 產婆學 後編

緒方病院產婆養成所藏

明治

39 7 25

内交

# 新撰産婆學後編目次

第九章 妊娠の異常及び其取扱法	一
第八十三節 妊婦の全身病	二
第八十四節 妊婦生殖器の異常	三五
第八十五節 妊卵の異常	四〇
第八十六節 妊娠中の出血、附急性貧血	六七
第八十七節 流産及び早産(妊娠の中絶)	七一
第八十八節 晩産	七九
第十章 分娩異常及び其取扱法	九〇
第八十九節 産道の異常	八〇
第九十節 産出力の異常	一〇七

第九十一節	胎兒の異常	二九
第九十二節	臍帶羊水卵膜胎盤の異常	二〇六
第九十三節	産婦の疾病	二一〇
第九十四節	分娩中胎兒の死亡及び死胎兒分娩	二一五
第九十五節	分娩開口期及び産出期に於ける出血	二二六
第九十六節	後産期の障害	二四二
第九十七節	分娩直後に於ける出血	二五七
<b>第十一章 異常産褥及び其取扱法</b>		
第九十八節	分娩に因て來れる生殖器及び骨盤の異常	二五九
第九十九節	産褥中の疾病	二六七
<b>第十二章 初生兒の異常及び疾病</b>		
第一百節	初生兒の假死	二六七

第一百一節	未熟兒の看護法	二九七
第一百二節	分娩に因する初生兒の異常	三〇一
第一百三節	初生兒の畸形	三〇六
第一百四節	其他の初生兒の疾病	三二〇
<b>第十三章 産婆に必要な看護法の大要</b>		
第一百五節	産婆に必要な數	三三七
第一百六節	患者の監視及び報告	三四三
第一百七節	體温測定法	三四九
第一百八節	脈搏の検査法	三五七
第一百九節	呼吸の検査	三五九
第一百十節	病室及び病床の選定	三六〇
第一百十一節	臥床に於て飲食物を與ふる注意	三六六

第一百十二節	川薬法	三六六
第一百十三節	内服薬	三六七
第一百十四節	外川薬	三七三
第一百十五節	治療介補	三六八
第一百十六節	産婆の川ゆる繃帯	四三三
第一百十七節	麻醉法を施す時の注意	四三六
第一百十八節	産科手術に川ゆる器械の名稱及び其取扱法	四三三
<b>附 録</b>		
	産婆たらんご欲するもの竝に産婆の心得べき諸規則	四三九
	産婆試験願	四四〇
	履歴書	四四一
	産婆試験規則	四四二

	産婆名簿登録規則	四四五
	産婆規則	四四七
	死産證書竝に死胎検案書	四五三
	死産證書	四五四
	墓地及埋葬取締規則施行方法細則標準	四五八
	戸籍法(法律)	四五八
	産婆の権利	四五九
	刑事訴訟法第三編第三章第六節 證人訊問	四六〇
	民事訴訟法第二編第一章第六節 證人	四六一
	産婆の刑罰	四六二
	日本刑法第二編第一章第八節 墮胎罪	四六二
	同上第三編第一章第十二節 誣告及び誹毀ノ罪	四六三

同上第四編 違警罪	四六四
產婆規則施行細則	四六五
產婆登錄願	四六六
登錄事項訂正願	四六七
產婆名簿取消願	四六八
登錄事項謄本下附願	四六八
產婆組合規約標準	四六九
產婆試驗規則施行細則	四七一
產婆試驗問題數竝採點法	四七二
產婆試驗場揭示	四七三
產婆試驗ハ次回へ延期ヲ許サル、ノ件	四七五
產婆規則中疑義伺	四七六

產婆ハ一旦廢業シタル後復業スルヲ得ルノ件	四七八
海外在留ノ本邦產婆ニシテ產婆名簿登録取扱方	四七九
死産兒埋火葬ハ分娩後二十四時間要セザル件	四八一
胎兒死體保存ノ件	四八二
四ヶ月未滿ノ胎兒保存ハ出願ニ及バザルノ件	四八三
死體解剖竝保存取締規則	四八三

新撰產婆學後編目次終

# 新撰産婆學 (後編)

緒方病院産婆養成所長醫學士 東條良太郎  
緒方病院産婆養成所講師 土肥 衛 合著

## 第九章 妊娠の異常及び其取扱法

妊娠の異常とは妊娠中諸種の原因により妊婦全身の異常或は一局所假令ば生殖器の異常を來し若くは妊卵の異常に由り母體或は胎兒に危害を及ぼし甚だしきに至りては妊娠の中絶を來すに至るを云ふ而して妊娠異常の取扱は専ら産科醫の職務にして産婆の自ら處置すべきものに非ずと雖も産婆は其異

常あるや或は然らざるやを鑑別し之を産科醫に報じ醫師の來着する迄自ら應急の處置をなすべき大切なる義務を有するものなるが故に異常に因りて起れる諸種の症狀及び處置の主要を知らざる可らず去りて各種の病に就て悉く其症狀處置を述べべき餘地なきを以て本章には唯だ其主なるものゝみに就て論述せん

### 第八十三節 妊婦の全身病

#### 甲 妊娠に關係して起るべき疾病

#### 悪阻

- 妊娠ニ發スベキ主ナル病名ヲ記セヨ
- 妊娠ノ疾病及ビ其名ヲ舉ゲヨ
- 妊娠ノ疾病及ビ其處置ノ大略ヲ記セヨ
- 妊娠疾病ノ主ナル名稱ヲ記セヨ
- 妊娠ノ嘔吐トハ如何ニ處置ヲ記セヨ
- 悪阻ノ原因及ビ症狀

妊娠の初期に於ては多くは消化器の異常を來し胃部の停滯不安を感じ或は月經閉止の月よりして悪心嘔吐を發す之を妊娠

- 悪阻トハ何ノ及ビ之レニ對スル注意
- 悪阻ノ原因症狀及ビ處置

悪阻は神經質胃病及び子宮卵膜等の異常あるものに發し上流の婦人は下等社會の婦人よりも多く本症にかゝる

- 妊娠ニ因ル消化器病トハ如何

嘔吐或は俗に「ツツリ」と云ふ此妊娠性嘔吐は一種特異のものにして多くは早朝空腹時に發し其多くは妊娠四ヶ月頃に至れば自然に治癒すも劇症のものに在ては悪阻と稱し原因不明にして毎食後攝取せる食物の一部分若くは悉くを吐出し甚しきに至りては膽汁或は血液をさへ吐出するに至り嘔吐頻頻一日數十回に至るこゝあり而て妊婦は口渴を訴へ胃部疼痛を感じ舌は乾燥して鮮紅色を呈し口内惡臭を放ち身體は乾燥し極めて迅速に羸瘦を來し脈は微細頻數となり腹部は陷没して舟狀をなし腹壁上より容易に膨大せる子宮を觸れ得るに至り極めて重症なるものに在りては視力障害眼球の震轉を來し精神の變狀を發して死に至る

處置 輕症にありては新鮮の空氣中に於て適當の運動を營ま

しめ兩便の排泄をよくし柔軟にして消化し易き食物を與へ胃部に芥子泥を貼付するか或は濕布若くは氷菴法を行ひ少量の赤酒を與へ一時に多量の食餌を攝らしめずして少量づゝ數回に與へ毎食後身體を安靜にするときは自然に治癒すべく早朝嘔吐あるものに對しては牛乳、スープ、鶏卵の如き流動物を床中に於て攝らしめ然る後凡そ一時間を経て起床せしむ其他身體を清潔にし衣服に注意し惡阻を患ふる妊婦には神經質のもの多きが故に出来る丈け慰安を與ふべし然るときは輕症のものは醫治を乞ふまでもなく治癒することあるべしといへども此疾病は屢々妊婦の生命を失ふに至る恐るべきものあるに由り初めより醫治を乞はしむること甚だ肝要なり

唾液分泌過多症 (流涎)

妊娠初期に於ては生理的に少しく唾液分泌の亢進を見ることあれども時としては分泌甚だ多量あることあり之れを唾液分泌過多症と云ふ此症は多くは妊娠の第三ヶ月乃至第四ヶ月に始まり妊婦が胎動を感じる頃に至りて止むを例とす然れども妊娠の極初期より始まり妊娠末期迄持續することあり産婆若し斯の如き症を發見するときは清水を以て度々含嗽せしめ醫治を乞はしむべし

齒齦炎

妊娠の第二ヶ月乃至四ヶ月に起り齒齦は一般に赤色を呈し殊に齒根の部に於て半月狀の著しき發赤部を呈し全齒齦は漸次



腫脹し咀嚼困難、齒痛を起すべし産婆は極初めより妊婦をして口内の清潔に勉めしむるは勿論若し斯の如き症を發見せば充分に含嗽せしめ尙癒ゆざれば醫治を乞はしむべし

### 便秘下痢及排尿障害

妊娠により増大せる子宮の爲めに膀胱及び直腸は壓迫を蒙り爲めに便秘を來し或は排尿頻回となり時としては尿意を催すも之れを自利すること能はず所謂尿閉を來し或は咳嗽、嘔吐等に由て不隨意に尿を漏し即ち尿失禁又は尿淋瀝を來すことあり是等の障害は殊に妊娠の初めと終りに於て甚だしく現はるゝものにして斯の如く増大せる子宮の爲め周圍器官が壓迫を蒙るときは血液は骨盤内に鬱滯するが故に痔核脱肛をも發

し便通時或は其以外の時と雖も肛門部に疼痛を感じ或は便秘の爲に腹部膨滿(鼓腸)し逆上、頭痛眩暈等を起すべし、下痢は妊娠中屢々食物の不攝生及び感冒等に由て來るものにして妊婦に取り甚だ危険なるものあり何となれば之れが爲めに子宮の收縮を促し屢々流産、早産を來せばあり  
處置、便秘に對しては妊婦の攝生法の條下に於て述べたるが如く適當の運動を營ましめ糞たる菓物或は能く熟したる菓物を與へ或は毎朝空腹時に一椀の微溫湯を飲ましめ尙頑固にして便通なきときは石鹼水の浣腸を行ひ或は醫師に請ふて緩和の下劑を與へ尿閉を來すときは嚴重に消毒したる「カテーテル」を以て排尿せしむべし若尿癰瀝するときは微溫の清水若くは冷水を以て屢々外陰部を洗ふを良とす又下痢に對しては

嚴正の安靜を守らしめ、粥汁スープレ牛乳等を與へて少しも固形物を攝取せしめず、冷却したる飲料を避けしむ可し、斯くするも下痢尙ほ止まず腹痛等を來さば直ちに醫師の診察を乞はしむべし

浮腫 (一名水腫)

○妊娠中に起ル陰部及  
ビ下肢ノ浮腫ノ原因  
並ニ處置ヲ記セヨ  
○妊娠中に發スル浮腫  
ノ種類並ニ處置  
○浮腫ニ就テ  
腎臟病脚氣貧血症  
等に在ては血液成  
分の變化により浮  
腫を來す

妊娠の末期に至れば増大せる子宮の爲めに、子宮周圍組織及血管は壓迫せられ、下肢の血行は爲めに障害を蒙り、往々鬱滯性浮腫を發することあり、殊に複胎妊娠、羊膜水腫等に於て然り、而て此浮腫下肢のみに止まることは多くは此の血行障害のみの爲めに來るものあるも、時として顔面上肢等にも來ることあり、然るときは腎臟病、心臟病、貧血症、或は脚氣等の爲めに發

浮腫を檢するには  
常に皮下の骨に向  
て指壓を試むべし

したるものなれば極めて注意を要す、但し下肢の血行障害に因する浮腫は多くは妊娠の末月に於て生じ、久敷起立するか或は坐するときは浮腫は下腿に止まらず、大腿及び生殖器等にも蔓延するに至れども、浮腫の度多くは烈しからず、而して一般に浮腫せる部分は膨大して皺襞を失ひ、白色にして光澤を放ち、手指を以て壓迫するときは恰も軟かき粘土中に挿入するの感ありて、壓せる部に凹窩を残し、該凹窩は暫時にして消失すべし、處置、凡て浮腫あるもの、尿は検査を行ふ事甚だ必要にして、二十四時間中の尿の全量と尿中蛋白質の検査とは必ず爲さる可らず、而して尿量は度目ある大なる硝子製尿器中に排尿せしめば之を知り得べし、雖も蛋白質の有無を檢せんには必ず醫師に托するを善し、こす即ち清潔なる硝子器陶器中に排尿

浮腫を輕視するは  
 獨り民間のみならず  
 從來の產婆に在  
 ても妊娠の末期に  
 至れば何人も浮腫  
 するものにして分  
 娩さへ終れば忽ち  
 消失すべしと考へ  
 是を妊婦に説明し  
 て反つて醫治を受  
 けるの時を失はし  
 めつゝあり盲目蛇  
 におぢすとは實に  
 是等を云ふならん  
 か

せしめたるものを更に清潔ある藥瓶様のものに移し醫師の許  
 に送り其の検査を受くべし古來我邦にては妊娠中の浮腫を輕  
 視するの弊ありて輕度の浮腫にては醫治を乞ふもの殆んど之  
 なく今日と雖ごも此の弊を免がれざるが故に産婆は少しにて  
 も浮腫を認めば必ず醫治を乞はしめ且つ以上の如き尿に對  
 する注意を怠る可らず而して下肢にのみ輕度の浮腫あるもの  
 は可成歩行を禁じ「メリヤス」の股引足袋等を穿たしめ尙消退  
 せざるごきは妊婦を仰臥せしめ足の末端を高く擧げ其趾尖よ  
 リフランネル繃帶を以て大腿に至るまで纏絡し或はメリヤス  
 の股引を着せしめ其趾尖より大腿に向て按摩を試むべし且つ  
 凡て下肢の浮腫せる患者は夜間臥床に就くや必ず足を伸ばし  
 其末端を高くして睡眠せしめ外陰部浮腫せるごきは溫濕布卷

法を行ひ顔面より始まる全身の浮腫にして尿量減少するごき  
 は腎臟病の疑あり又た下肢に浮腫を發し知覺鈍麻を來するごき  
 は脚氣の疑あるを以て速かに醫師の治療を乞はしめざるべか  
 らず尙詳細は各病の條下に於て詳論すべし

靜脈瘤

増大せる子宮の壓迫により下肢の血液鬱滞し下肢の靜脈管は  
 擴張し皮下に青色の索狀物を現はし或は單に隆起を呈し手壓  
 に由りて消退し手を放てば再び現はれ或は時として結節狀を  
 呈し少しく硬く腫瘍狀を呈するごきあり是等を靜脈瘤と云ひ  
 分娩後には再び縮少すごき雖ごも血管は大にして弛緩しあるを  
 以て更に妊娠するごきは以前よりも早く發生し且つ速かに増

靜脈瘤の好發部

大す而して靜脈瘤は好んで膝窩、腓腸部、陰脣、臍壁、等に現はれ身體の運動

下肢の靜脈瘤を示す

圖二十四百第



著しく膨隆して菲薄となり僅かの衝突摩擦に由て破裂し大出血を來すことあり又た其近傍部は時々炎症を呈し發赤腫起し甚だしき痛みを感じ或は慢性の潰瘍を生ず  
處置、浮腫に同じく素より血行障害の爲めに發するものおれ

炎症は發赤腫脹疼痛熱感あるものを云ふ

ば成べく起立歩行下肢の下垂等を禁じ或はメリヤスの股引を着せしめ結節状をなすものは綿花を貼じて壓抵繃帶を行ひ其増大破裂を防ぎ發赤疼痛あるものは身體を安靜にし濕布繃帶を施し醫師の診察を受けしむ若し俄かに破裂出血するときは直ちに消毒せる手指を以て壓迫し止血し直ちに醫師の來診を乞ひ醫師の來着前指壓に由て止血するときは局部に消毒薬に浸したる綿紗數枚を貼して繃帶をなし置くを良とす

妊婦のヒステリー症及び精神の異常

婦人妊娠するときは神經過敏となり往々ヒステリー症を發し甚だしき神經質となり喜怒哀樂ともに其度を越へ稀れには又た精神の異常を來し或は鬱憂し或は躁狂狀に陥り自殺を企て

ヒステリーは専ら婦人に發する神經病にして俗に血氣と稱す

○人事不省ト假死ノ儘  
 別ハ如何ニ失神又ハ  
 假死シタル者アリテ  
 招カレタルトキハ産  
 婆ハ如何ニ處置スベ  
 キヤ且ツ何ニ由テ起  
 リタルモノ多シト考  
 フルヤ  
 (妊婦は下に述ぶる原  
 因の外急劇の出血に  
 より卒倒人事不省に  
 陥るべし)  
 五官の作用を失ひ  
 人事を辨せざるを  
 人事不省と云ひ脈  
 搏手に應せず少か  
 り幽微なる心音を  
 聴くのみにして呼  
 吸をなさず僅かに  
 生活の徴候を存す  
 るものを假死と云  
 ふ

或は種々の舉動をなし分娩に際して病勢一層増悪することあり故に若し少しにても精神の異状を發見せば宜しく醫師の診察を乞はしむべし

### 妊婦の卒倒

窮屈ある衣服等に由て頸部、胸部、等を緊迫するか或は腹部を壓迫し或は多人群集の場所例之ば芝居寄席等に立ち入るか若くは精神感動によりて妊婦は突然顔面の蒼白を來し四肢厥冷して五官の作用を失ひ卒倒することあり然るときは一方にては直ちに醫師を迎へ一方にては之れを平臥せしめ頭部を低くし衣服を寛にし帯を解き窓戸を開き少量の赤酒或は冷水を飲用せしめ酢或は香水の如き香氣強き物を嗅がしめ或は手布

或は手を以て四肢を摩擦し心窩に芥子泥を貼布すべし

### 乙 妊娠中の合併症

#### 妊娠腎臓炎

妊娠中屢々起る處の疾病にして多くは妊娠後半期に發し上下肢顔面胸腹部の浮腫を來し尿量著しく減少し尿中多量の蛋白質を混じ其甚だしきものに至りては心悸亢進呼吸困難嘔吐頭痛口渴及視力障害を來し流早産を招くべし輕症のものは醫治により漸次恢復し殊に分娩を終らば通常十數日を経て浮腫の消散を來すべしと雖も重症のものに在ては僅かの時間に速かに浮腫の度を増し子癩と稱する恐るべき全身の痙攣を誘起し母兒共に死を招くこと屢々なり故に産婆は少しにても浮腫

腎臓病患者の尿は其量少なく濃厚にして比重おもく蛋白質を含む

を認めなば既に述べたる如く尿に對するの注意をなし一時も早く醫治を乞はしむべし而して妊婦身體の安靜と多量の牛乳（一日五合以上）飲用とは此症に對する唯一の注意點にして其他刺戟せざる飲食物を取らしめ餘り鹹きもの香高きもの餘り醋きもの又たは脂肪濃きものを禁じ口渴に對しては麥湯又たは極上等の茶を少量づゝ與ふべし

脚氣

脚氣の種類

妊娠産褥中屢々合併し來る病にして乾性と浮腫性の二種あり妊婦褥婦に來るものは多く浮腫性にして先づ下肢の倦怠を覺へ物に躓き易く下肢の浮腫及び知覺鈍麻（しびれ）を生じ腓腸部を把握するときは疼痛を訴へ食思不振胃部停滯の感あり

脚氣衝心の徴候

て全身貧血を呈し心悸亢進し脈頻數となり遂に下肢の運動麻痺を來し歩行し能はざるに至る而して漸次増悪するときは知覺麻痺は下肢のみに止まらずして腹部及び手指口唇舌尖等に及ぼし浮腫も亦た顔面上肢に擴がり排尿減少し突然呼吸促進胸内苦悶を生じ顔面口唇四肢は紫藍色（チアノーゼ）となり横隔膜及心臟麻痺を來して死に至るにあり之れを脚氣衝心と云ふ而して脚氣は治癒に至る迄日數を要し甚だしきに至りては下肢の筋肉は萎縮して一年以上歩行し能はざるものあり此患者の乳汁を小兒に與ふるときは脚氣毒は乳汁中に分泌せられて兒の體内に移り行き所謂乳兒脚氣症を發すべし

處置、治療は素より産婆の能くする處にあらざるを以て以上の症狀を發し脚氣の疑あちば身體を安靜に保ち直ちに醫師の

治療を受けしむべし。雖も常に高燥にして水空氣等の清潔ある土地に住居し滋養物を攝り適當の運動をなさしむるは唯一の豫防法にして既に發病するも上述の地方を選びて轉地せしむれば速かに治し常に便通をよくし麥飯小豆等を與へて腸の疏通を謀れば大に其治療を速かからしむ而して木症を患ふるもの、分娩に際しては始より産床に臥せしめ努責を禁じ初生兒に對しては必ず授乳を禁ぜざる可らず

微毒

○妊婦産婦微毒ノ微候原因及ビ其傳播  
○妊婦微毒ノ症狀及ビ其傳播ノ豫防法

微毒は一種の傳染病にして交接接吻等觸接に由て傳染し先づ傳染後二、三週の潜伏期を経て陰部或は觸接部に硬結を生じ潰瘍となり(硬性下疳)次で病毒は連續部の淋巴腺に蔓延し腫脹

○花柳病ハ妊婦ニ對シ如何ナル危險ヲ及ボスヤ  
(花柳病ニハ微毒及ビ淋病を云フ)

を來す此淋巴腺の多くは鼠蹊部に於て見るものにして之を横痃と云ひ以上の症候を微毒の第一期症狀と云ふ而して凡そ六週を経る時は皮膚粘膜炎の發疹糜爛潰瘍を生じ筋、骨膜、關節等に腫起疼痛を發す之を第二期症狀と云ひ次で一年以上數年を経るときは内臓、筋肉、骨、軟骨、五臓器、腦等に護膜腫と名くる腫瘍を生じ化膿を來し或は潰瘍を造る之を第三期症狀と云ふ而して男女一方に全身微毒を有し此際妊娠するときは病毒は胎兒に移行し妊娠六七ヶ月にして胎兒は多く死亡し流産するものも時としては正規の分娩を遂ぐることもあるも其小兒は全身に遺傳微毒症狀を有し生來虛弱あるか或は死に至るものなり故に産婆は妊婦に接し陰部の潰瘍を發見するか或は夫婦の間に微毒あるを聞知するか或は之れ迄數回流産せ

し等の事を知るごきは之を論して醫師の診察を乞はしむべし  
同一婦人の數回引續き流産することあるは多くは此全身微毒  
の爲めにして之を習慣性流産と云ふ

軟性下疳

本症も亦た微毒淋疾の如く花柳病の一種にして交接により其  
病毒を傳染するものごす軟性下疳は感染後二三日にして陰部  
に潰瘍を生じ其表面に汚穢黄色物を附着し膿を漏らし其膿汁  
の附着により漸次周圍に蔓延し外陰部肛門の近傍に數多の小  
潰瘍を生ずるに至る而して此潰瘍は微毒に於ける硬性下疳と  
異なり表面柔軟にして其部を壓するに疼痛を訴ふ本症は微毒  
の如く全身に害毒を流す事なしと雖も其病毒は周圍の淋巴

管に吸収せられ多く鼠蹊淋巴腺の腫起化膿を誘起す之れ即ち  
横痃にして(微毒による横痃は化膿せざるも軟性下疳による  
ものは多く化膿す)其治癒に至るまでは約二三週間を要し硬  
き癩痕を胎す

妊婦本症を患ふる時は分娩の際其膿汁胎兒の薄弱なる皮膚及  
び眼に移行し大害をなすにより常に醫治を乞はしめ分娩の際  
しては消毒液を以て嚴重なる洗滌を行はざるべからず

肺結核 (肺癆)

肺内に結核菌の傳染により起るものにして生來虛弱あるもの  
に多く其主なる徴候は咳嗽咯痰發熱(三十八九度を昇降す)盜  
汗にして貧血著しく病勢進むにつれ時々咯痰中に血液を交へ



患者は漸次衰弱し死亡するに至るものなり斯の如き肺結核患者が妊娠するときは病勢漸次進行し屢々妊娠の中絶を來し殊に分娩後に於ては俄かに増悪し死亡すること多し而して生れたる兒も虚弱にして結核に罹り易き性を傳へらるゝものこと産婆若し斯の如き患者に出遇はゞ妊娠中より常に醫治を乞はしめ滋養物の攝取に勉めしめ新鮮にして温暖ある空氣中に適當の運動をなさしめ乾燥したる痰は塵埃等と共に他人の呼吸器に入り結核の傳染をなすものあるが故に痰は常に痰壺に吐かじめ食器衣類等は全く別にせしむべし又た分娩後は授乳を廢すること必要あり

豫防

熱性病 (急性傳染病)

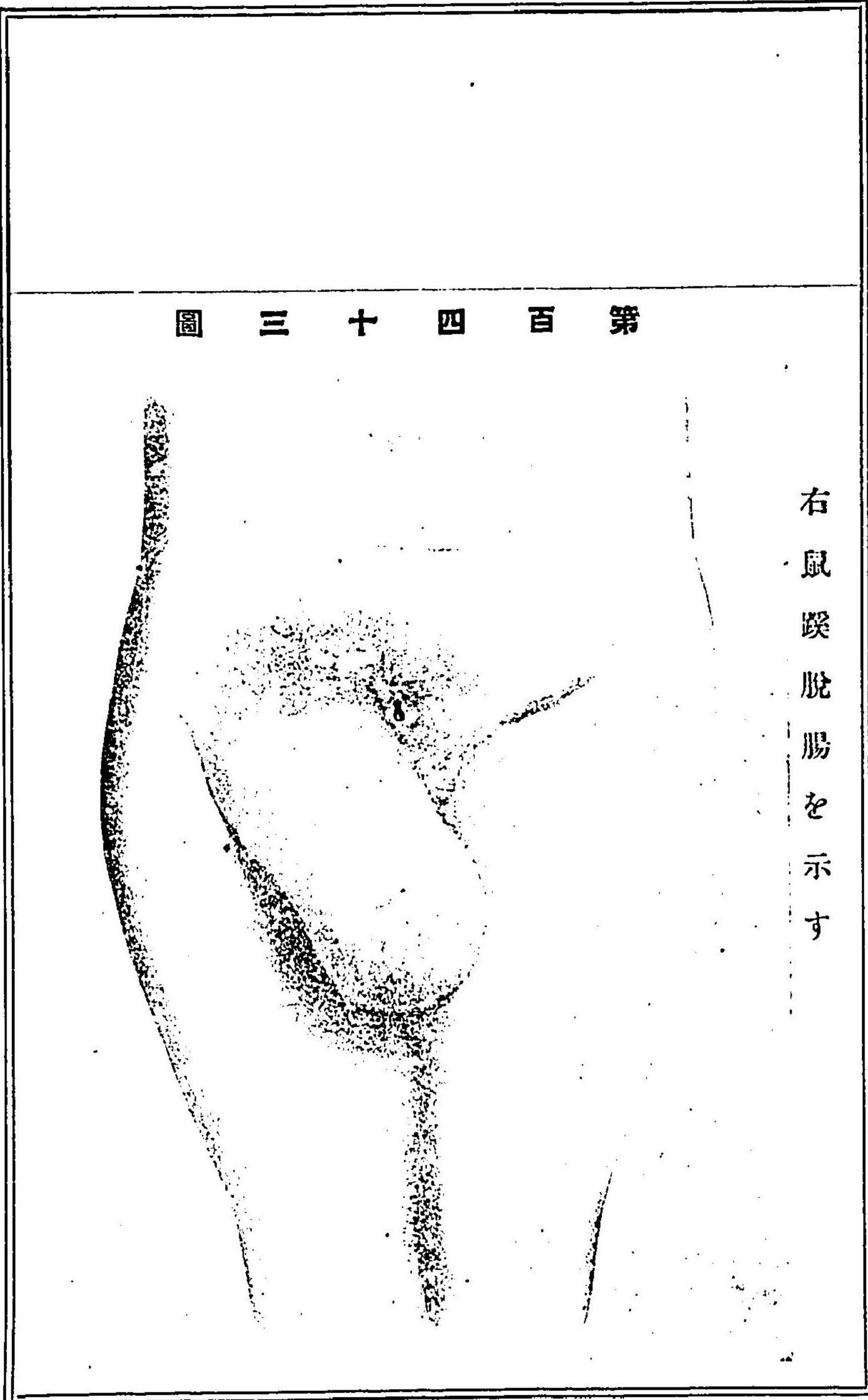
妊娠中高熱を發するときは胎兒は障害を被り危險に陥り遂に死亡し母體も之れが爲めに起りたる流早産の爲めに甚しく危險に陥るものあるが故に妊婦若し諸種の傳染病に罹るときは機を失せず醫治を乞はしむべし

脱腸 (ヘルニア)

脱腸とは腸管が腹壁の空隙に入り直接皮下に進出するに由て生ずるものにして多くは鼠蹊部内股臍部等に生ずり而して脱腸を發するときは皮下に膨隆せる柔軟なる腫瘍を生じ通常痛を發せず壓迫するも過敏ならず仰臥するか或は局部に壓迫を加ふるときは一種の雜音を發し消退し咳嗽嘔吐起立努責等によりて再び現出するものなり

第百四十三圖

右鼠蹊脱腸を示す



脱腸を有せる婦人妊娠するときは其妊娠央ば頃に至りて増大せる子宮の爲めに腸管は後方に壓排せらるゝが故に脱出せる腸管も多くは還納せらるゝものなり然れども腸管癒着せるか脱出甚しき場合等に於て還納すること能はざれば便秘、嘔吐、吐糞、腹部膨滿烈しき疼痛等所謂箱頓症<sup>フシバク</sup>を發して死を來すに至るべし故に妊娠の後半期に於て脱腸を有する婦人には醫士の診察及び治療を乞はしめ此危険を豫防し分娩に際しては開口期の始めより静臥せしめ分娩の全經過中腹壓を禁ぜざるべからず

第八十四節 妊婦生殖器の異常

妊娠子宮の前屈 (懸垂腹)

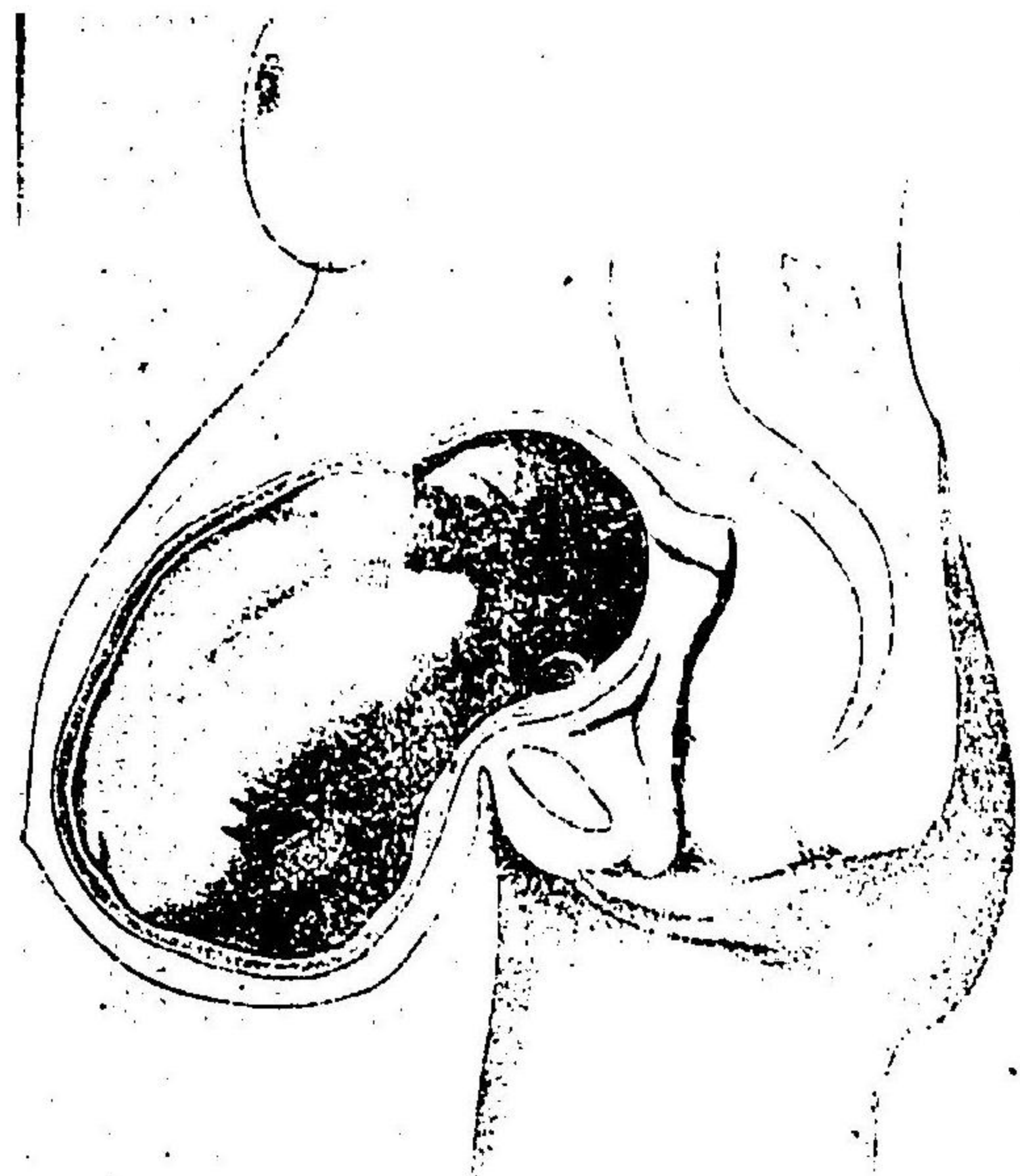
○子宮位置ノ異常ニ於ケル分娩ニ際シ助産婦ノ處置

妊娠子宮の前屈

子宮は通常前方に傾くものもあるも妊娠末期に至るに従ひ子宮重量増加の爲めに一層其度を増し腹壁の甚だしく弛緩せるもの殊に經産婦にありては腹部は恰も袋を垂したるが如き外觀をさへあす

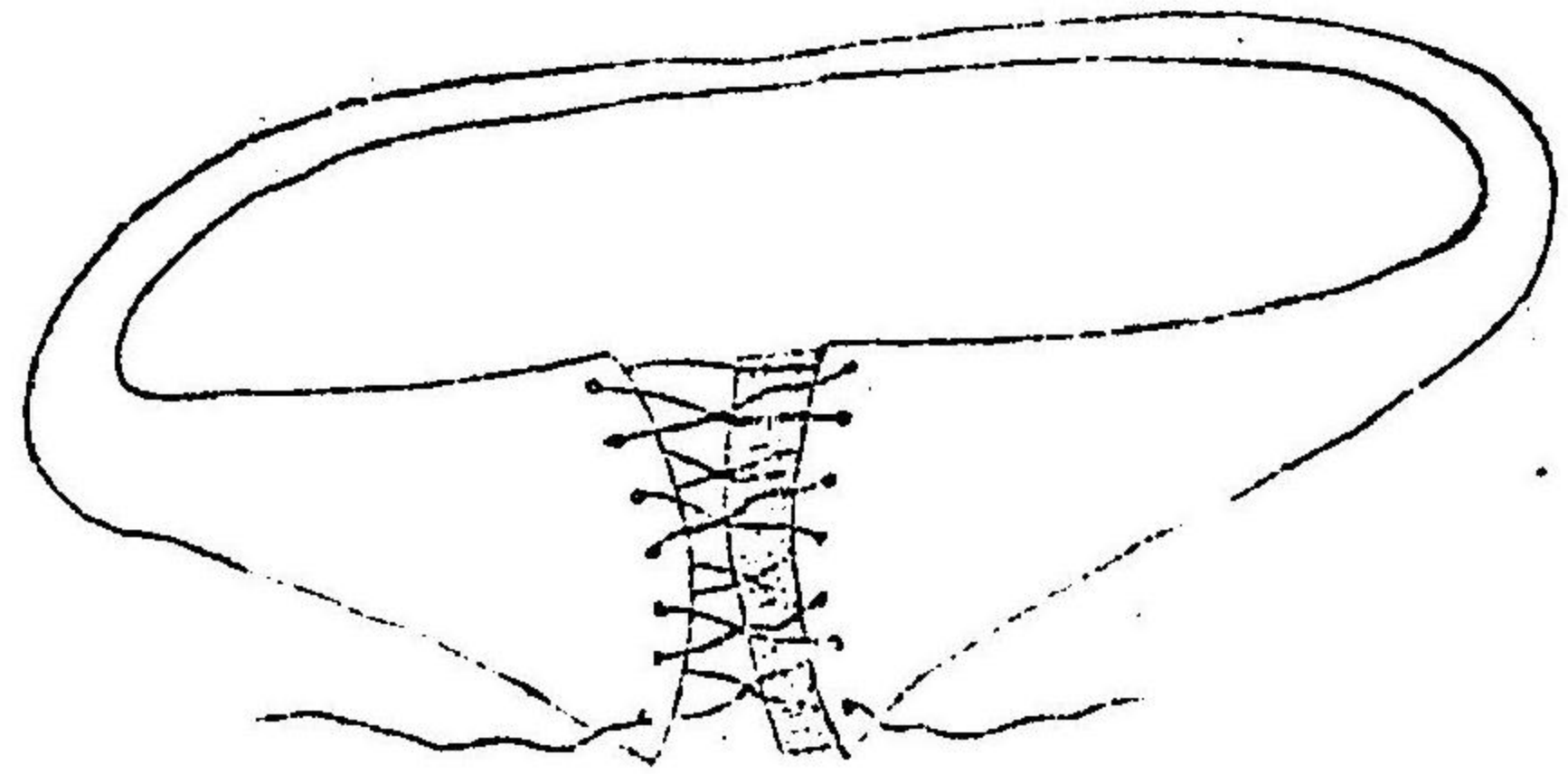
懸垂腹を示す

第四百四十四圖



ここあり然るこきは之れを懸垂腹と稱す或は妊娠の始めに於て前屈の甚だしきものに在りては子宮底は耻骨

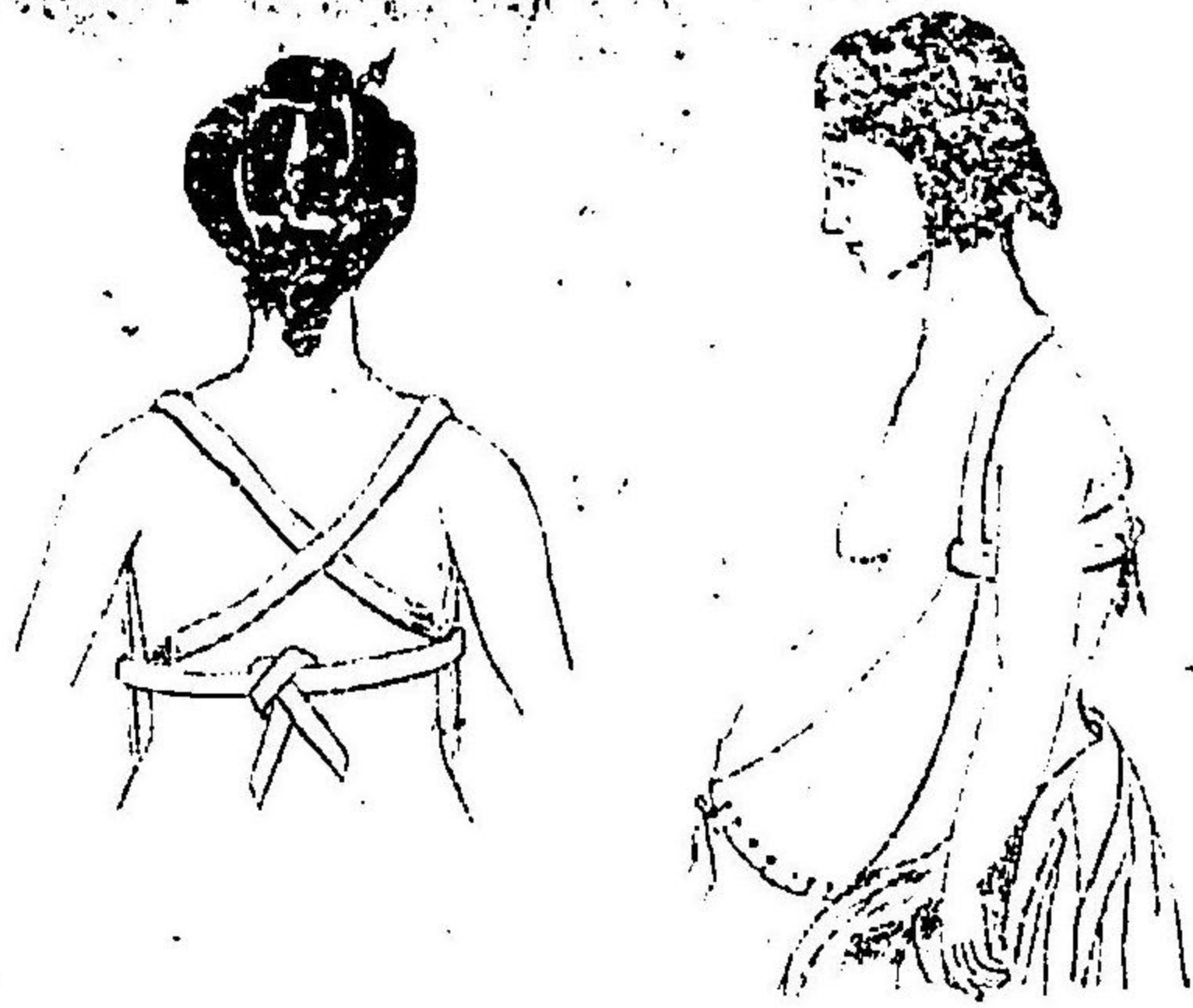
第四百四十五圖



懸垂腹の妊産婦に用ゆる腹帶を示す

第四百四十六圖

同



懸垂腹の妊産婦に腹帶を用ひたる状態を示す

(側面より見たるもの)

(後面より見たるもの)

縫際の下方に侵入して膀胱を壓し尿意頻數尿閉便秘等を來す  
 ことあり斯の如く子宮の位置に變化を來すときは胎兒位置の  
 變化を來し易く從て分娩困難なるものなり  
 處置、妊娠後半期に至れば適當の腹帶を施こし子宮の傾斜及  
 び腹部の懸垂を防ぎ分娩時に在ても腹帶を施こし仰臥の位置  
 を取らしむ然るときは子宮體は其重力に因り背部に近より從  
 て胎兒の位置異常を發することなし又た烈しき前屈の爲めに  
 疼痛を發し尿意頻數排尿困難を訴ふるときは醫治を乞はしむ  
 べし

### 妊娠子宮の後屈

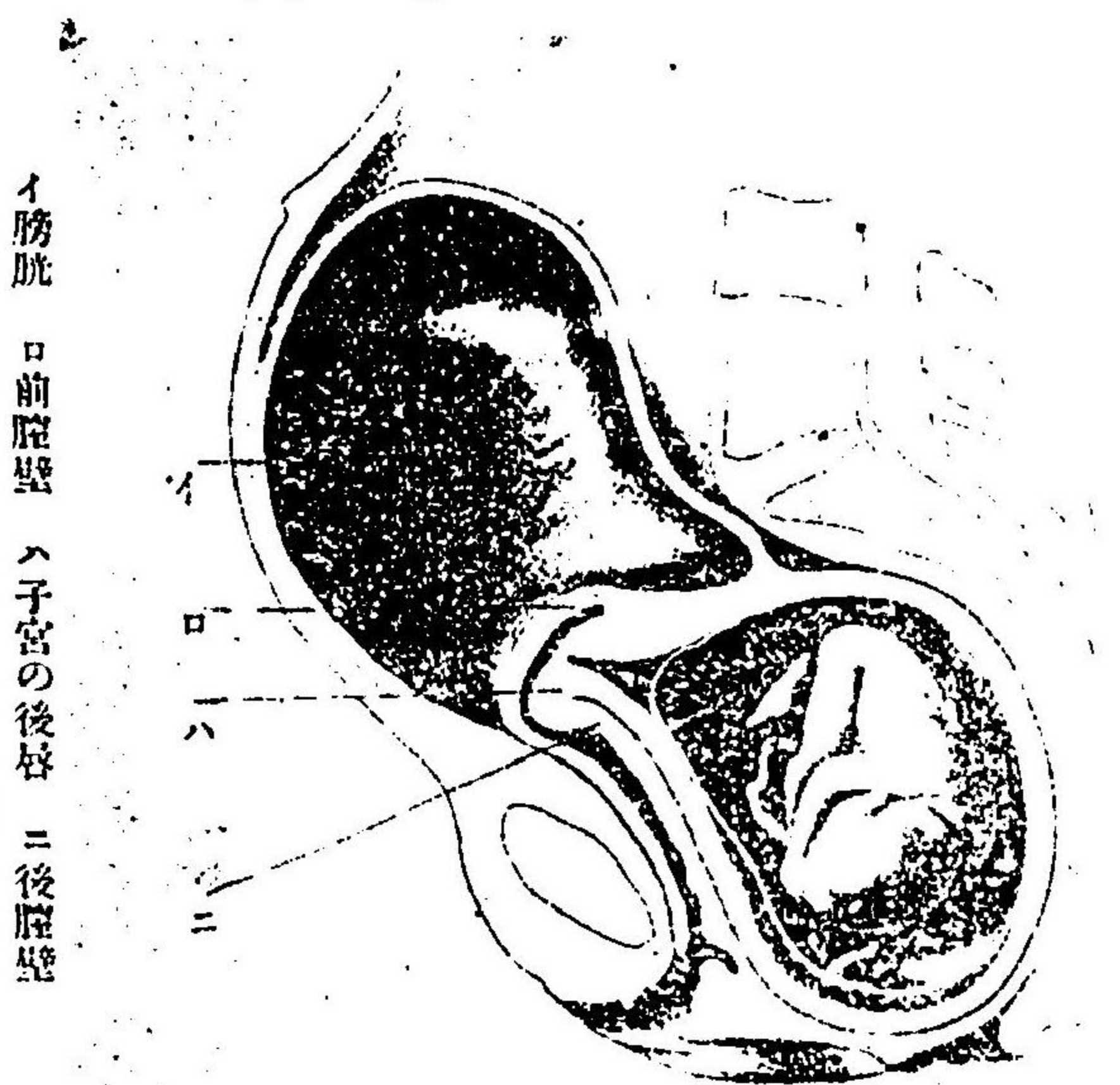
○妊娠子宮後屈ノ徵候  
 及ビ處置ヲ記セ

經産婦に於て屢々見る所の異常あり經産婦は常に屢々後屈す

○後屈妊娠子宮ハ如何  
 ナル障害ヲ來スヤ及  
 ビ診察ニ處置  
 ○妊娠子宮ノ前屈症及  
 ビ之ニ對スル處置

宮を有するが故に妊娠するときには子宮の頸部より上方は薦骨  
 部に向つて屈曲し子

第四百七十七圖



宮底は深く薦骨窩内  
 に沈降し子宮口は前  
 上方に向ひ甚だしき  
 に至りては耻骨縫際  
 上に在りて内診に由  
 り觸れ能はざること  
 あり而して軽度の後  
 屈症は子宮の増大に  
 伴ひ自然に整復し子  
 宮底は薦骨胛を越へ

て上昇し従て妊娠分娩經過に障害を來す事少なし。雖も其高度のもの又は輕度のものも炎症性癒着等の爲めに後屈せるまゝ自ら整復し能はざるときは遂に所謂妊娠後屈子宮後屈症を發す

**原因**、本症は多く妊娠中の不攝生殊に重き物を舉げ又は脊負ひ或は便通毎に努責するか或は咳嗽の如き腹壓を高むることに由りて生じ其他尿の蓄積等に由り妊娠三四月頃増大しつゝ子宮が薦骨脚に支へられて上昇すること能はざる場合に發するものあり而して此際多くは妊娠性嘔吐を誘起すべし

妊娠子宮後屈候頓症を發するときは之に由りて尿道膀胱直腸を壓迫し一方にては疼痛性尿意頻數を發し放尿するも僅かの尿を漏すに過ぎず時としては尿閉を發し一方にては頑固の便

子宮位置の異常は惡阻を伴ふこと多し

膀胱内尿充滿の徵候

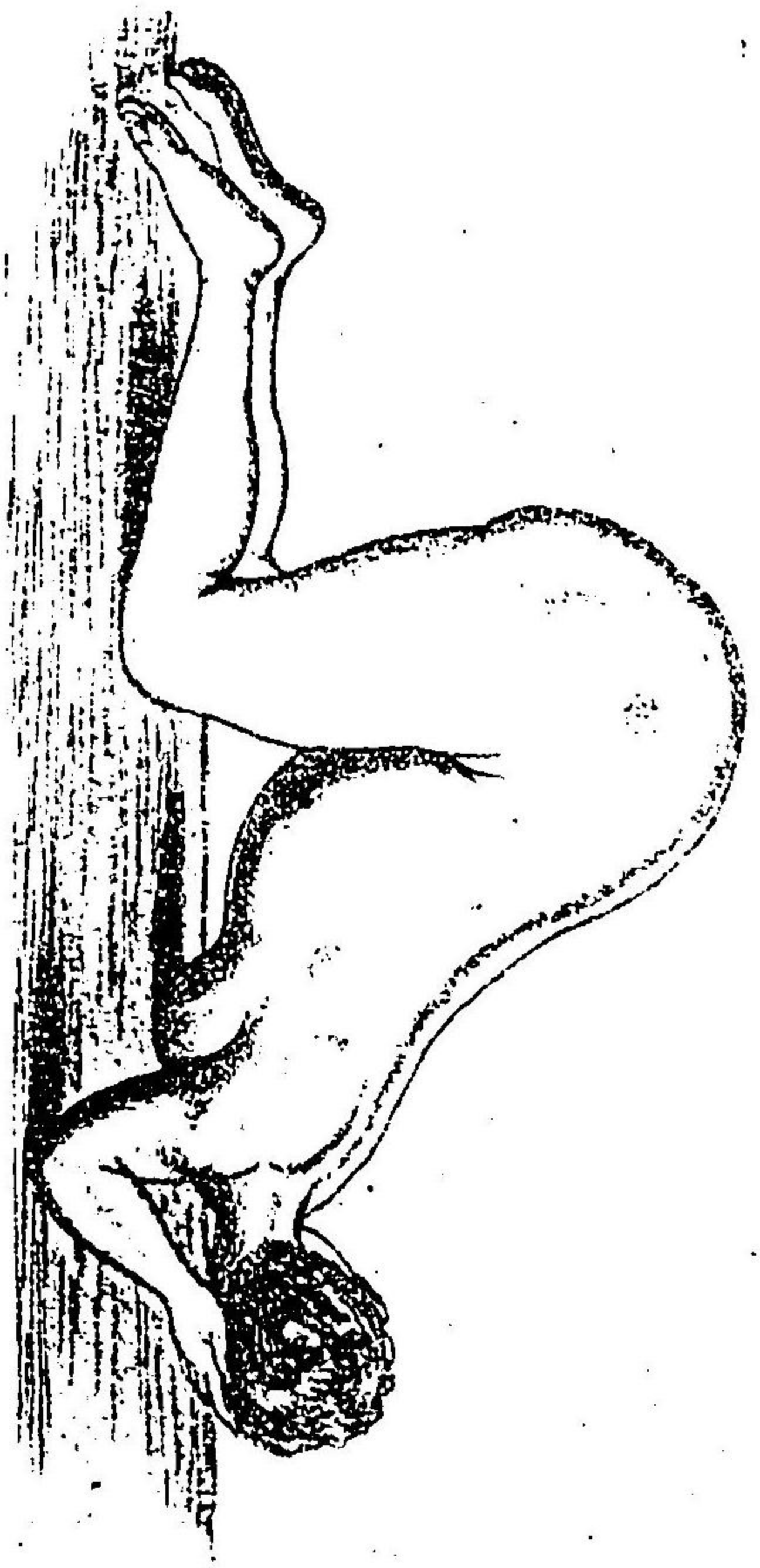
秘を來し爲めに腹部膨滿疼痛甚しきに至ては嘔吐若くは吐糞をあすに至る而して殊に薦骨部に烈しき疼痛を感じ劇烈なるものに至りては蓄尿の爲めに尿毒症を發し或は腹膜炎を起して死に至る

外検査をなすに妊娠せる子宮體を觸知する能はず蓄尿せる膀胱は腫瘍狀をかして耻骨縫際に現はるゝを見注意せざれば妊娠子宮を誤ることあり而して腹部は一般に膨滿し之を壓するに知覺過敏あり内検査を行ふに子宮腔部は全く上昇し時としては手指を達する能はず後腔穹窿部を隔て、後屈せる子宮體子宮底を觸知するを得べし

**處置**、妊娠せる子宮の後屈殊に其候頓せるを發見するときは直ちに醫師を迎へ醫師の來着前は妊婦を安靜にし尿閉を訴ふ

るときは消毒せる「チラトン氏カテーテル」を以て排尿を試み  
或は妊婦を膝肘位になし子宮頸を手指を以て後方に壓迫し以  
て排尿せしめ洗腸を施して便通を促し妊婦の身體を前屈せし

國 一 十 四 編



す米をるためしら執を位肘膝に婦妊

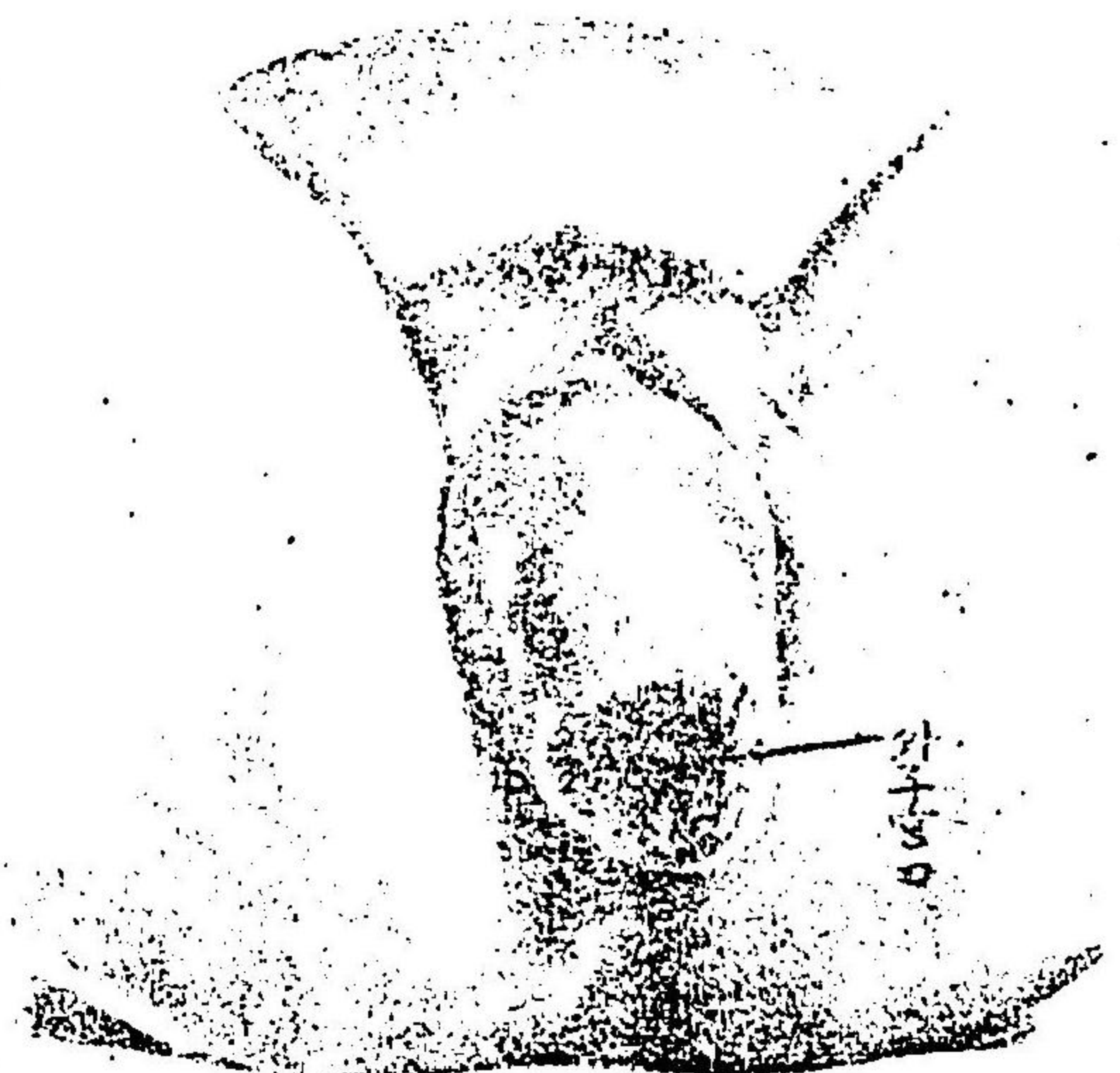
め仰臥せしむるか或は側臥せしめて醫師の來着を待つべし其  
他の處置に至りては産婆の能くする處にあらず然れども輕度  
のものにありては大小便を排泄し妊婦を仰臥せしめ臀部を舉  
上するか若くは屢々膝肘位を取らしむれば自ら整復するここ  
あり若し其效を奏せずとも妊婦は之れ等の處置に由りて大に  
輕快を覺ゆるものとす

### 子宮脱及膣脱

脱出の輕度なるもの  
を子宮下垂或は  
膣壁弛緩と云ふ

子宮脱とは子宮脱出して陰唇間に現はるゝものを云ひ膣脱とは  
膣壁弛緩繼轉して陰唇間に現はるゝものを云ふ是れ等の病  
は多くは經産婦殊に舊會陰破裂を有するものに来り前回の産  
褥中に於ける不攝生殊に早期の離床産褥中の努責等に由りて

子宮脱を示す



第四百九十九圖

生じ時としては初産婦に於ても烈しき努力に由て發することあり而して妊娠四ヶ月頃に至れば子宮は大骨盤内に上昇するが故に子宮脱の多くは自然に治癒し眞に脱出して箵頓するは稀なりと雖も屢々流産を來すの恐れあり若し箵頓するときは後屈子宮の箵頓症に於け

るが如く便秘、嘔吐、腹痛、排尿困難等の症狀を發すべし又た腔脱は多くは子宮脱と共に來り歩行困難、下腹緊滿等の症狀ありて攝生宜しからざれば屢々流早産を來すべし  
 處置、妊婦を靜臥せしめ臀部を高くし側臥位をこらしめ大小便の排泄を規則正しくし凡て努責若くは下腹を緊張せしむるが如きことを避け醫治を乞はしむ萬一箵頓することあらば醫師の治療を乞ふべし然れども止むを得ざれば消毒せる手指を以て徐々に還納を行ひ消毒綿花にて腔内を栓塞し再び脱出するを防ぎ努責を禁じ臀部を高くし側臥位を取らしめ直ちに醫治を乞はしむべし

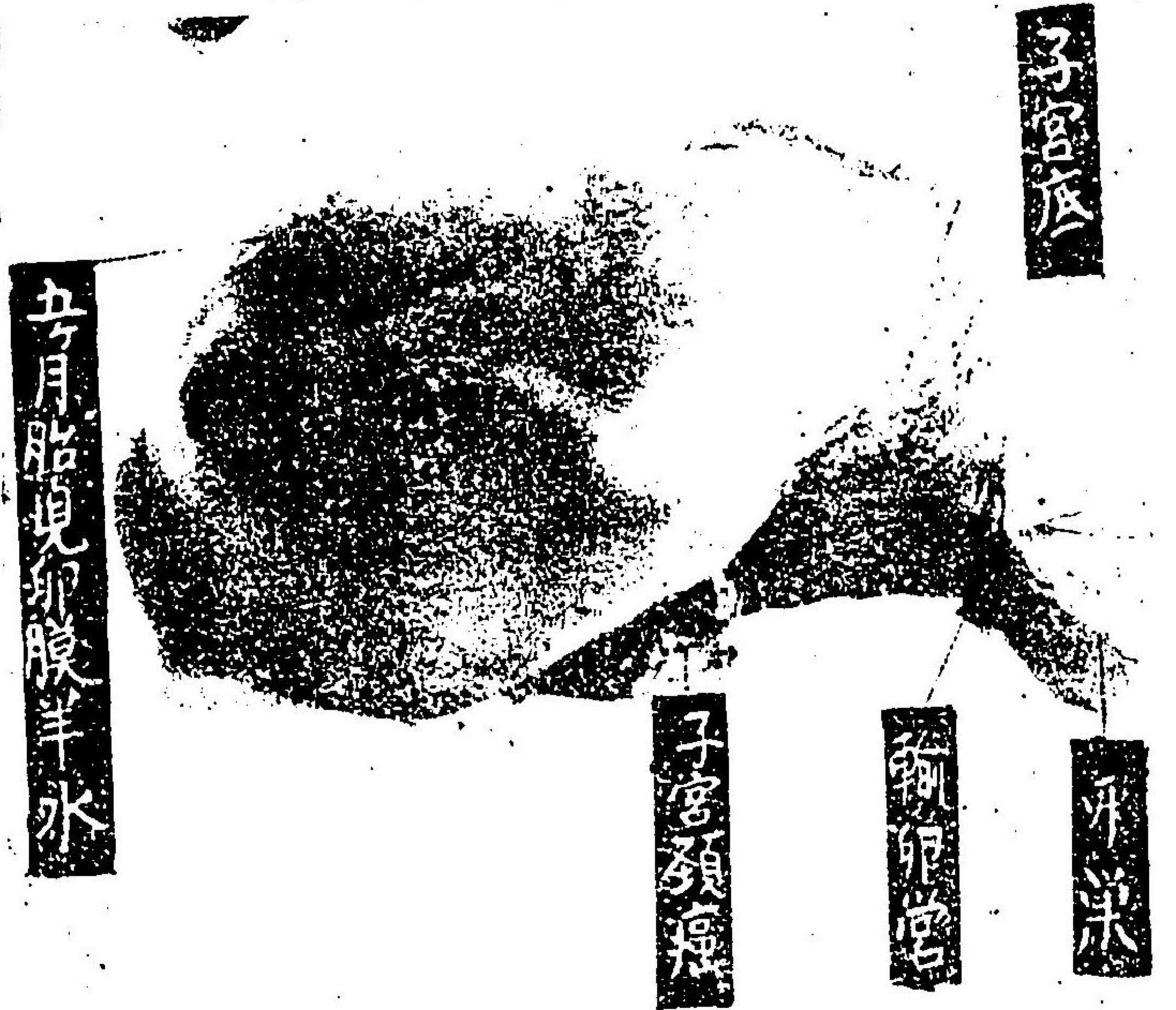
子宮痛

○子宮痛トハ如何ナル症狀ヲ呈スルモノナルヤ

子宮脱及腔脱

子宮癌は俗に白血  
長血と云ふ

第五百十五圖



子宮癌を發生せしめる五ヶ月の子宮の前後の壁を切開し、胎児、卵巣、輸卵管等を示す

癌腫は多く三十歳以後に於て發する處の最も悪性の腫瘍にして全身何れの部にも發生し數月或は一二年の後に於て必ず死に至るものなり子宮に於ては殊に子宮頸

子宮癌患者の帶下は非常の悪臭を放ち一回其臭を嗅ぎたるものは生涯忘るゝ事なし

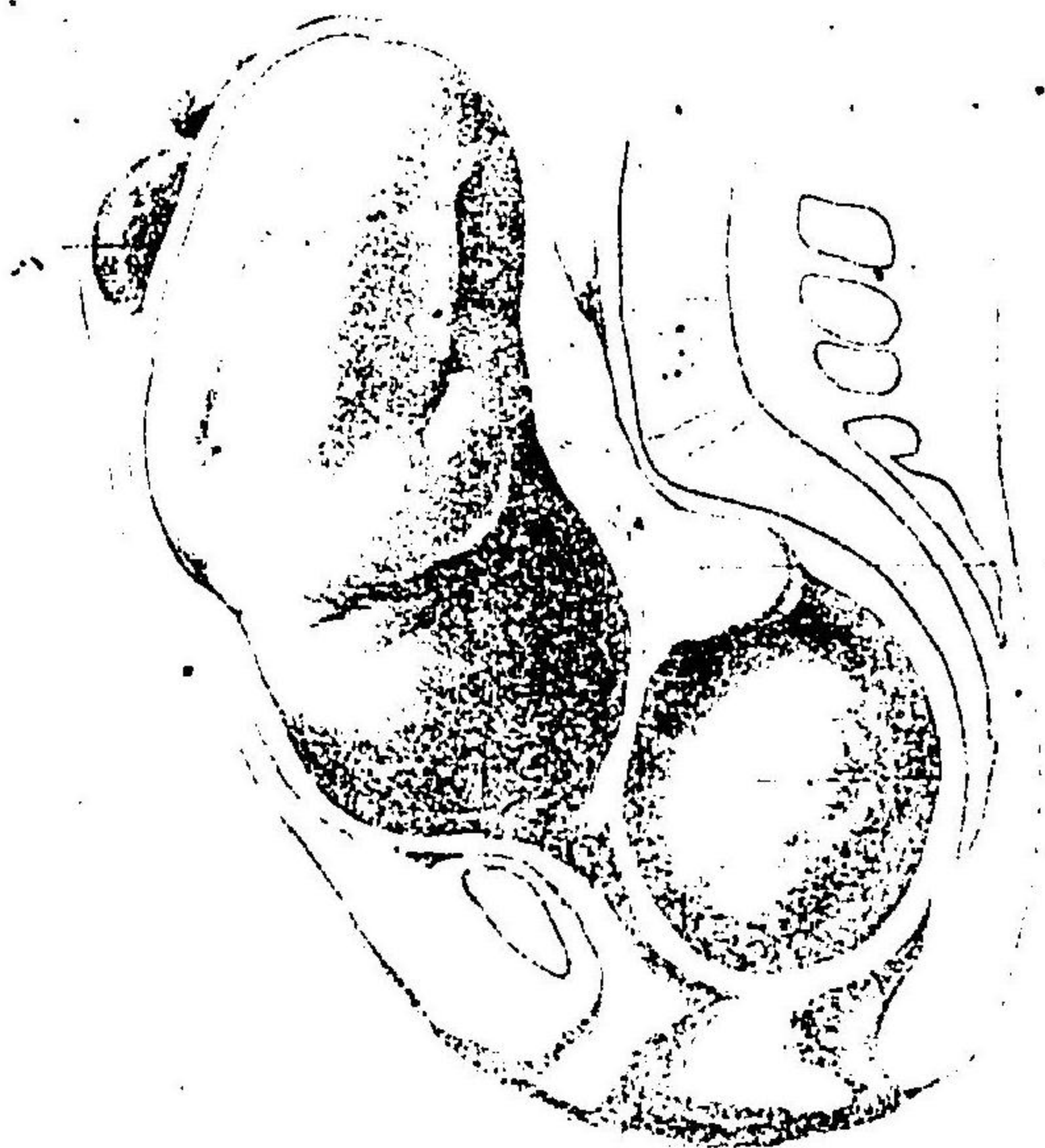
の部より發生し先づ子宮腔部に硬結を作り若くは潰瘍となり堅き凹凸不平の面をなし漸次周圍に蔓延するに至る而して初期にありては單に水様液を漏すものにして疼痛等を伴はざるが故に婦人は少しも意に介せざれども遂には必ず不規則の出血を來し出血なきも悪臭ある液を漏すに至り婦人は漸次貧血に陥り病勢尙ほ進むときは甚だしき疼痛を伴ひ衰弱して死に至るべし本症を患ふるもの妊娠するか或は妊娠中本症を發するときは甚だ速かに増悪し分娩時に際し子宮頸管は擴張するここ能はぬ爲めに子宮破裂の大危険を來すべし故に若し腔内より悪臭液を漏し或は子宮出血ある妊婦に接せば必ず内診を試み子宮腔部の硬結等を觸れ癌腫の疑ひあらば速かに醫治を乞はしむべし



月經困難とは月經血多量にして日數長く下腹痛腰痛を伴ない月經の都度苦痛するを云ふ

### 子宮筋腫

子宮筋腫に妊娠を合併せるものを示す



多くは子宮の實質中に發生する腫瘍にして本症を患ふる婦人は不正の子宮出血を來し月經困難月經過多等に苦み腫瘍は月經の度毎に増大して速かに

第五百一十一圖

腹腔内を満すに至り之れに觸るゝに甚だ硬く、少しも波動等を認めず、而して本病を患ふるものは妊娠すること少あし、雖も若し妊娠するときは多くは流産早産を來し腫瘍の小なるものにおいて稀れに妊娠末期に達するも分娩に際して陣痛微弱胎兒位置異常出血等の危険あり、又た子宮頸部に發したるものは兒の産出を妨げ頸管破裂の危険あり、故に平素前記の症狀あるものにして妊娠せる時は直ちに醫師の診察を乞はしむべし

### 子宮ポリープ (息肉)

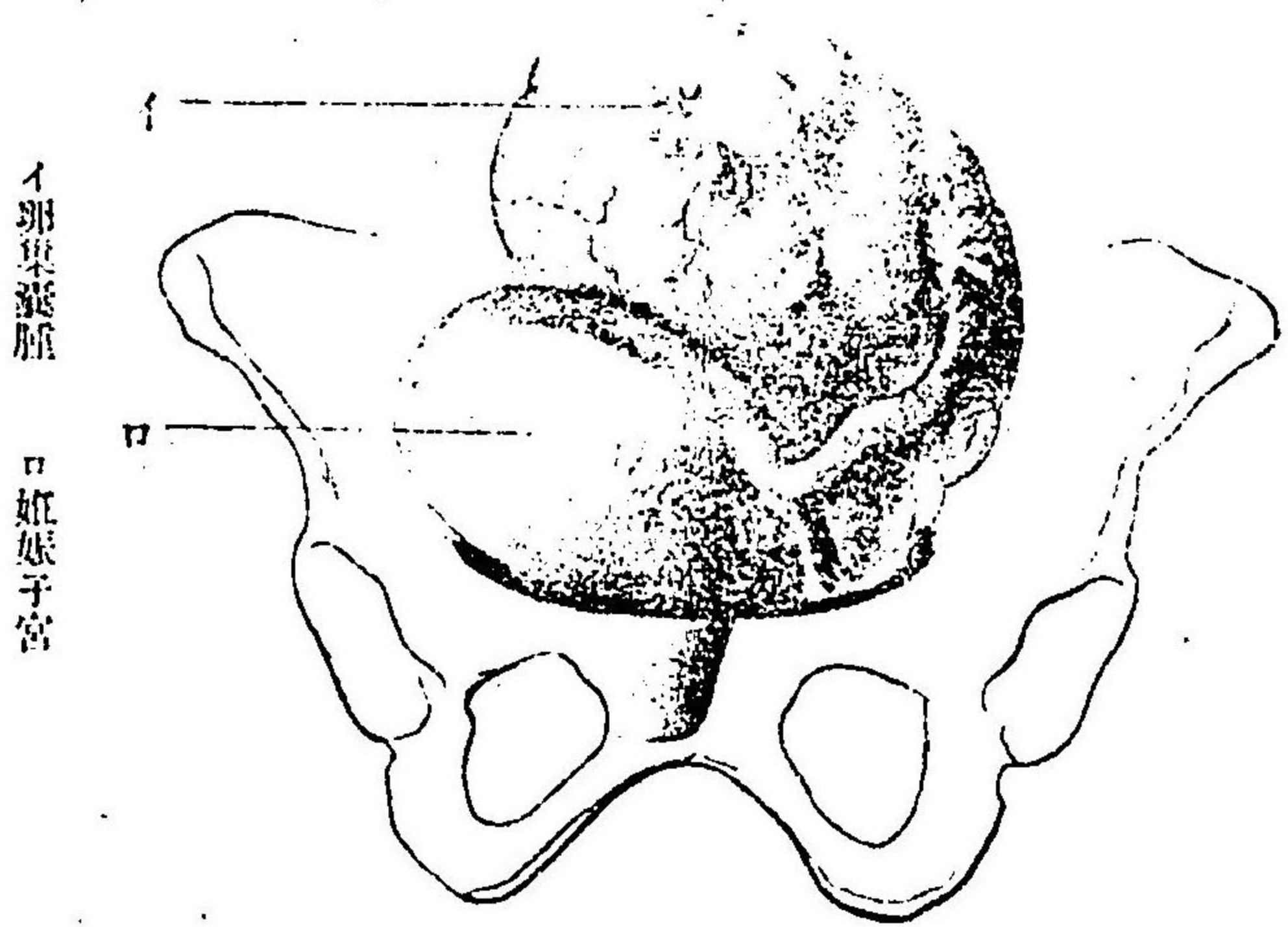
多くは子宮頸部に生ずる所の莖を有する瘤にして子宮口より腔内に垂下し之れに觸るれば表面滑澤にして硬く容易に出血

するものごす妊婦若し本症を患ふる時は不正の出血を來し終には流早産を來すべく分娩時に於ては胎兒の産出を妨げ甚だしき出血を來すが故に妊娠中より醫師の治療を乞はしむべし

### 卵巣囊腫

卵巣囊腫とは卵巢より發する一種の瘤にして中に液體を潑溜し之れに觸るれば妊娠子宮より少しく固く波動を呈し或は能く移動し或は腸管腹膜等と癒着して全く移動せず其大きさにも種々ありて小なるは手拳大より大あるは全腹腔を充たすに至る本症を患ふる婦人が妊娠するときはその瘤の壓迫の爲めに子宮の異常位置を來し或は子宮の増大は妨げられ従て胎兒は發育すること能はず流産するか或は著しき腹部膨滿を來し横隔

第五百二十五圖



卵巣囊腫に妊娠を合併せるものを示す

膜を舉上して呼吸困難を來し分娩に際しては陣痛微弱胎兒の位置異常を來すものなり若し瘤の小あるものになりては妊娠經過を妨害せざることもありと雖も産婆妊婦に接し前記症狀を發見するときは直ちに醫師の診療を乞はしむ可し醫師は妊娠中と雖も開腹術を行なひ之れを摘出すべし

### 子宮腔部の糜爛及び子宮頸管加答兒

兩者は多くは合併して來るものにして白色又は黄色粘稠の分泌多量なるか若しくは時々出血を來し外子宮口は擴張するが故に流産を來し易し故に妊婦若し之れに罹るときは直ちに醫治を受けしめ且つ身體を安靜ならしめにし殊に交接を禁ずべし

本症は多く流産の原因となる

### 子宮内膜炎

本症もまた最も屢々流産の原因となる婦人科的疾患の最も多くは子宮内膜炎なり

子宮内膜炎は子宮粘膜炎の糜爛を呈する疾病にして子宮口及腔内には異常を現はさず雖ごも不正の子宮出血を來し或は下肢の牽引痛下腹の膨滿を感じ子宮腔内よりは常に水様液を漏出す本病を患ふるものは妊娠するも流産し易く且つ妊娠中

雖ごも時々水様液を漏出し或は不正の出血を來すことあり故に以上の症狀を訴ふるものは醫師の診察を乞はしめざるべからず

### 妊婦の淋疾 (淋毒性陰加答兒)

婦人淋疾を患ふる男子と交接するときは直ちに傳染し尿道及腔内より多量の膿を分泌するに至るものにして殊に妊娠中は生殖器一般に充血するが故に一層感染し易く若し感染するときは腔内よりは多量の黄色液即ち膿を漏し外陰部殊に腔口は發赤腫脹し尿道よりも屢々多量の膿を漏し尿道も又た發赤腫脹し(尿道加答兒)遂に膀胱加答兒を發し尿意頻數となり尿中屢々血液を混じり排尿時甚だしき疼痛を覺へ(消渴)外陰部の粘

白帶下

膜及皮膚は膿の爲めに糜爛し(陰門炎)痒痛を感じ内診するに腔壁に無數の粟粒様の隆起を生じ恰も撒布せる砂粒にふるゝが如く感じ甚だ知覺過敏(腔加答兒)あり但し健全なる婦人にありても妊娠中は白色の粘液分泌増加するに雖も決して黄色を帯ぶることなく且つ外陰部の糜爛痒痛腺粘膜の粗糙等を現はすものに非ず而して本症並びに前述せる子宮癌、子宮腔部糜爛、子宮頸管加答兒及び後ちに述べる葡萄状鬼胎の如く腔内より白色黄色或は水様の分泌物の出づるを總稱して白帶下と云ふ

處置、内診の際又は外陰部の消毒に際して以上の症状を認むるときは直ちに醫師の治療を乞はしめ且つ其分泌物は傳染性を有するが故に之を手指又は顔面殊に眼に觸れしめざる様注

意するを要す然らざれば淋毒は眼に傳はり膿漏眼を發し失明せしむることあり分娩に際しては先づ微温の五十倍石炭酸水又は百倍のリゾール水を以て丁寧に腔及び外陰部を洗滌し其病毒を小兒に傳染せしめざる様注意せざる可からず而して娩出したる初生兒には必ず眼病の豫防法を行ふ事を忘る可からず尙ほ初生兒膿漏眼豫防法の條下を参照すべし

### 第八十五節 妊卵の異常

#### 葡萄状鬼胎 (一名胞状鬼胎)

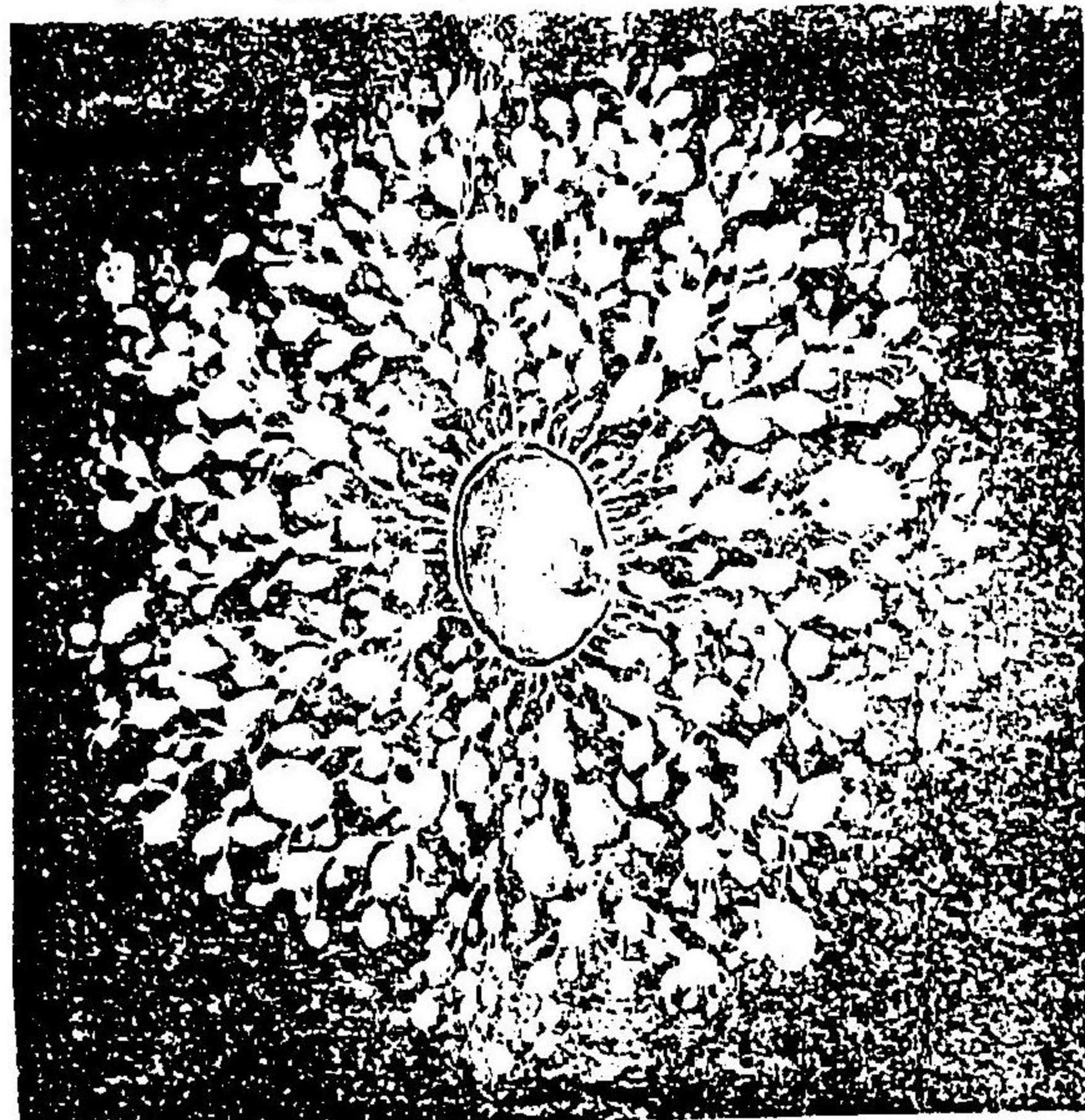
本症は多くは經産婦に發する卵の絨毛の疾病にして絨毛は變じて大小無數の水泡を生じ個々集族して恰も葡萄の房の如く漸次脱落膜子宮壁を侵蝕し胎兒は營養不給の爲め終に死亡し

○鬼胎妊娠ト如何  
○葡萄状鬼胎ノ徵候  
○葡萄状鬼胎ノ診斷及  
○處置  
○葡萄状鬼胎及ビ四ヶ月胎兒ニ就テ

葡萄状鬼胎

吸収せられ多くは其痕跡だも止めざるに至り子宮の全内容は水泡の一團塊となるに至る

葡萄状鬼胎に於ける水泡を示す



葡萄状鬼胎は發育甚だ速かあるを以て子宮は妊娠月に相當せずして大となり且不规则の出血及び水様帶下を伴ひ觸診上普通妊娠に比すれば幾分硬く弾力あり子宮底臍部以上に達するものにありても聽診

第三百五十五圖

第四百五十四圖



に由りて胎兒心音等を聴くことなく觸診するも胎兒部分を觸るゝことあり此症は初期に於ては多くは種々の全身症状を發して其内容を示す

葡萄状鬼胎を藏する子宮を切開

イロハニホは凡て鬼胎の水胞を示す

へは内子宮口

トは子宮頸管

の出血を來し  
出血は漸次強  
劇となり終に  
流産を來すも  
のこす  
處置、本症は  
通常の流産と  
異あり劇しき  
出血を來し危

險なるが故に本症の疑あるものは醫師を招き醫師の來着前強  
 度の出血に對しては攝氏五十度位の三%石炭酸水又は一%の  
 リゾール水を腔内に澆注し然る後消毒したる綿花を腔内に  
 堅く栓塞し下腹に氷嚢を貼し身體精神を安靜に保たしむべし  
 而して鬼胎の全部脱出するの觀あるも尙ほ其一部殘留して後  
 出血を來すの恐あるが故に極めて身體を安靜ならしめ決して  
 注意を怠るべからず又出血多からずして經過宜しき場合と雖  
 ども本症を患ひたる婦人は屢々悪性の子宮腫瘍を發するここ  
 あるが故に必ず醫師の診療を乞はしむべし

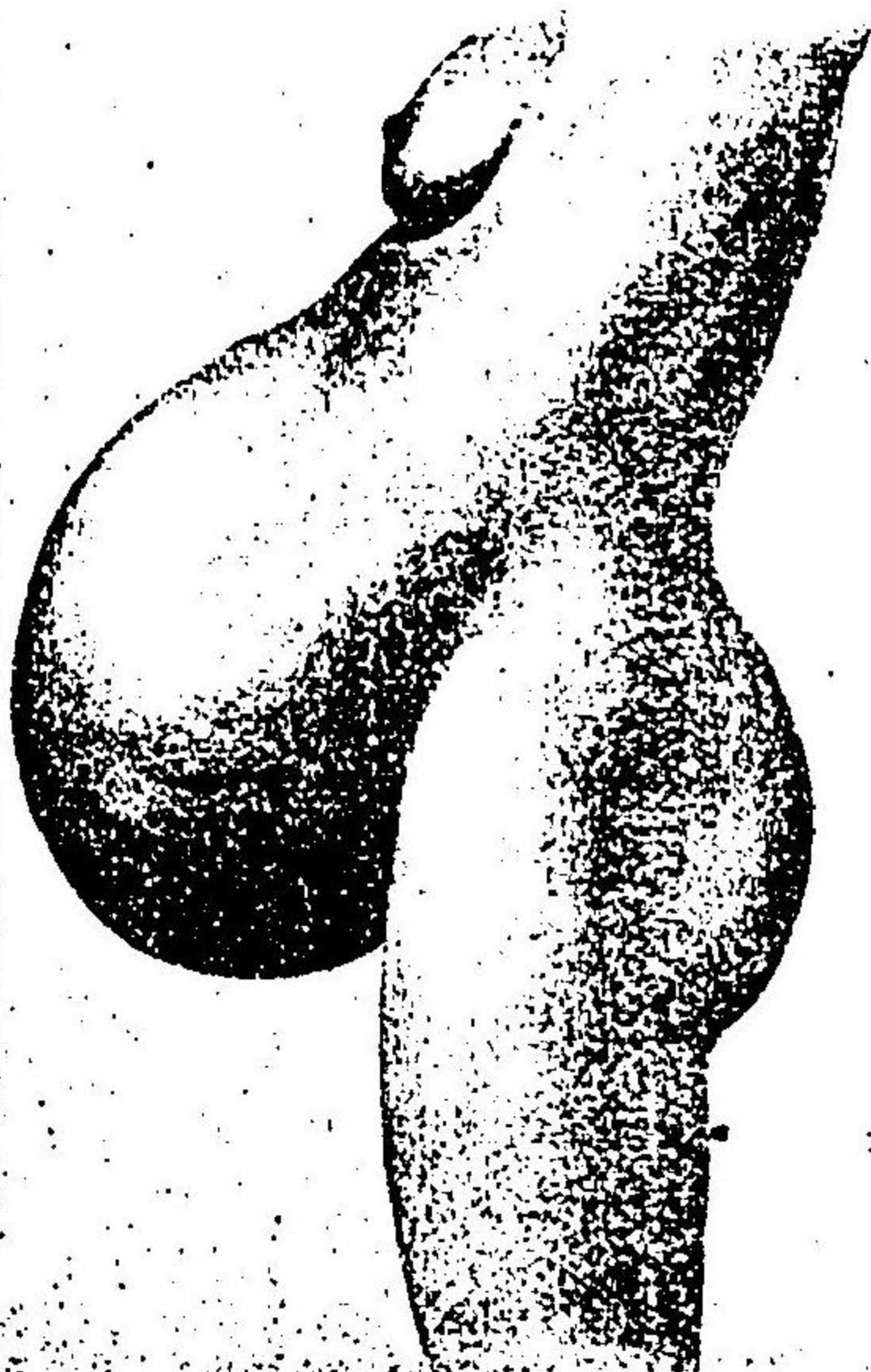
羊膜水腫一名羊水過多症

正規妊娠の末期に於ては通常羊水は千、五乃至千、五百、五、位ある

○羊膜液及ビ卵膜ノ異常  
 ○羊水過多症ノ徵候及  
 ビ處置

○羊膜水腫ノ徵候及ビ  
 分娩時ノ注意  
 ○羊水過多ニ就テ  
 ○羊水過多ニ因スル障  
 害

第五百五十五圖



も時としては之れより以上に達し甚だ多量なることあり然る  
 ときは之れを羊膜水腫と云ふ此の如く羊水の過多なるときは  
 子宮は膨大して妊娠月に相當せず從て腹部も亦た甚だしく膨  
 大し呼吸困難を感じ  
 下腹の疼痛下肢の神  
 經痛を訴へ血行障害  
 の爲めに下肢外陰部  
 の浮腫靜脈瘤を發し  
 子宮腔は大にして圓  
 形なるが故に胎兒は  
 甚だ移動し易く屢々

異常の位置體向體勢をこるこあり觸診上腹部は著しき波動

を現はし胎兒の體部を觸知すること難く胎兒心音を聽取すること難し而て妊婦は嘔吐嘔氣等の消化器症狀を發すること多く胎兒は流産或は早産を來し易し又た分娩に際しては陣痛微弱を發し開口期は甚だ遅延し羊水の漏出と共に四肢臍帶の脱出を來し易く或は胎盤の早期剝離を來し後産期に於ては無力性出血を來すこと多し

**處置**、身體を安靜ならしめ適當の腹帶を施し必ず醫師の治療を受けしむべし産婆は羊水過多なればこて是を漏して減量せしめんとするが如き考を起すべからず

羊水過少症

羊水過少症は甚だ稀なるものにして卵膜と胎兒との癒着を來

○羊水ノ過少及ビ過多ハ如何ナル皆アルヤ

第五百六十六圖



美水の過少に因する羊膜と胎兒との癒着を示す(美膜絲)

際しては破水遅延し胎盤の早期剝離を來し易し而して妊娠中には診斷確實ならざるを以て從て之に對する一定の處置なし

子宮外妊娠

し易く屢々胎兒の四肢及び軀幹より卵膜に走る索狀物を生ず之を羊膜絲と云ふ又た胎兒各部の癒着を來し種々の畸形を生じ易く子宮は妊娠月に比して小さく腹壁上より能く胎兒の各部をふれ分娩に

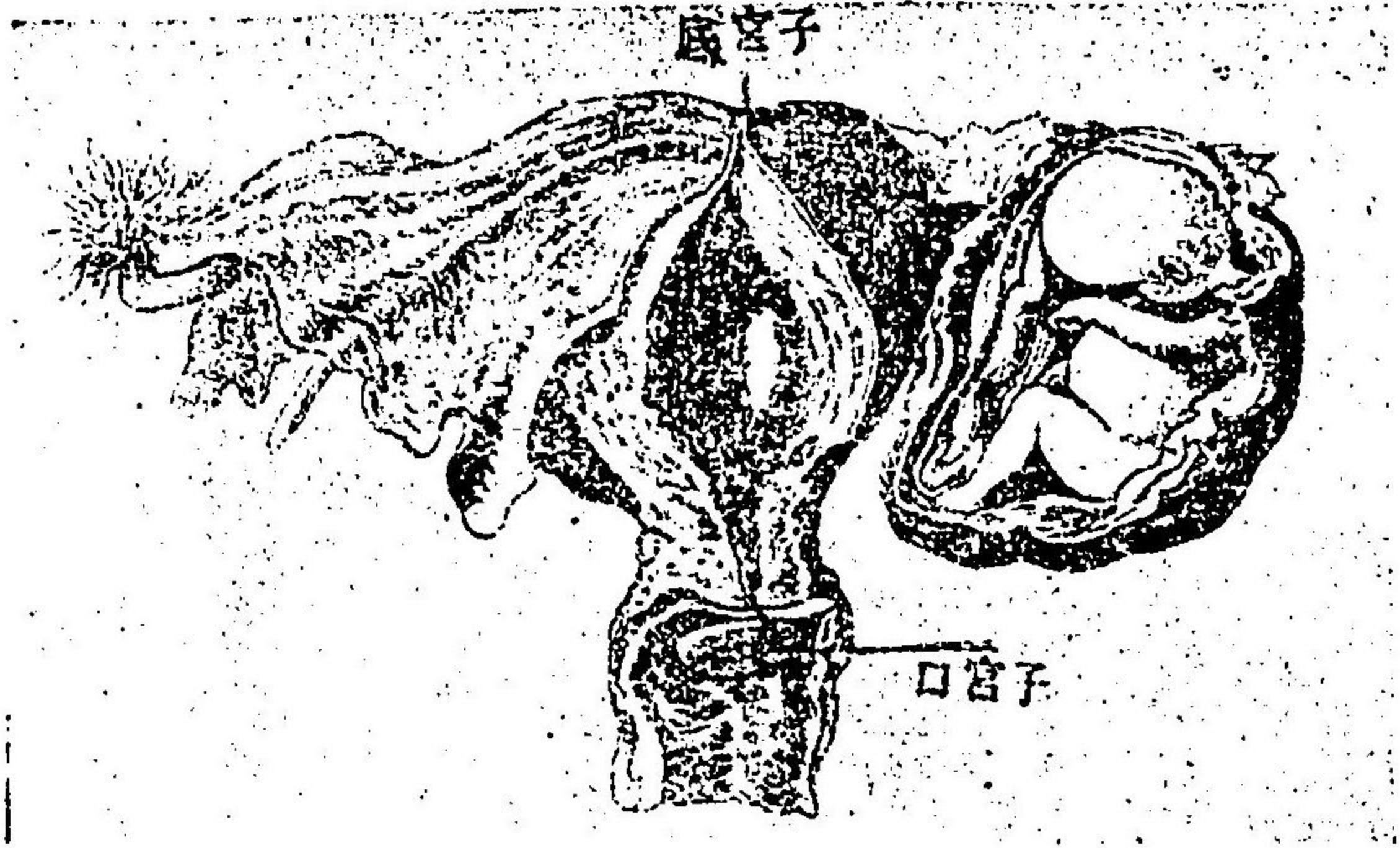
○子宮外妊娠トハ如何  
ニ位置  
ビ處置

子宮外妊娠とは受胎せる卵が輸卵管の屈折捻轉等により子宮内に來る事能はずして喇叭管、卵巢又は腹腔内に於て發育するものを云ふ故に其部位に因て喇叭管妊娠、卵巢妊娠、腹腔妊娠の名あり

何れの子宮外妊娠に於ても卵の占居する部の粘膜炎は肥厚し脱落膜を作り胎盤を形成し羊水を藏する事普通の妊娠と異ならず又た此際子宮も幾分増大し其粘膜炎も亦た肥厚して脱落膜を生ずるものごとす而して以上三種の子宮外妊娠中最も多きは喇叭管妊娠あり

喇叭管は其口径小なるのみならず其中に胎兒を充分に發育せしむる事能はざるを以て妊娠二三ヶ月にして胎兒を包める胎嚢は破裂するか或は卵が喇叭管の外端より腹腔内に脱出し所

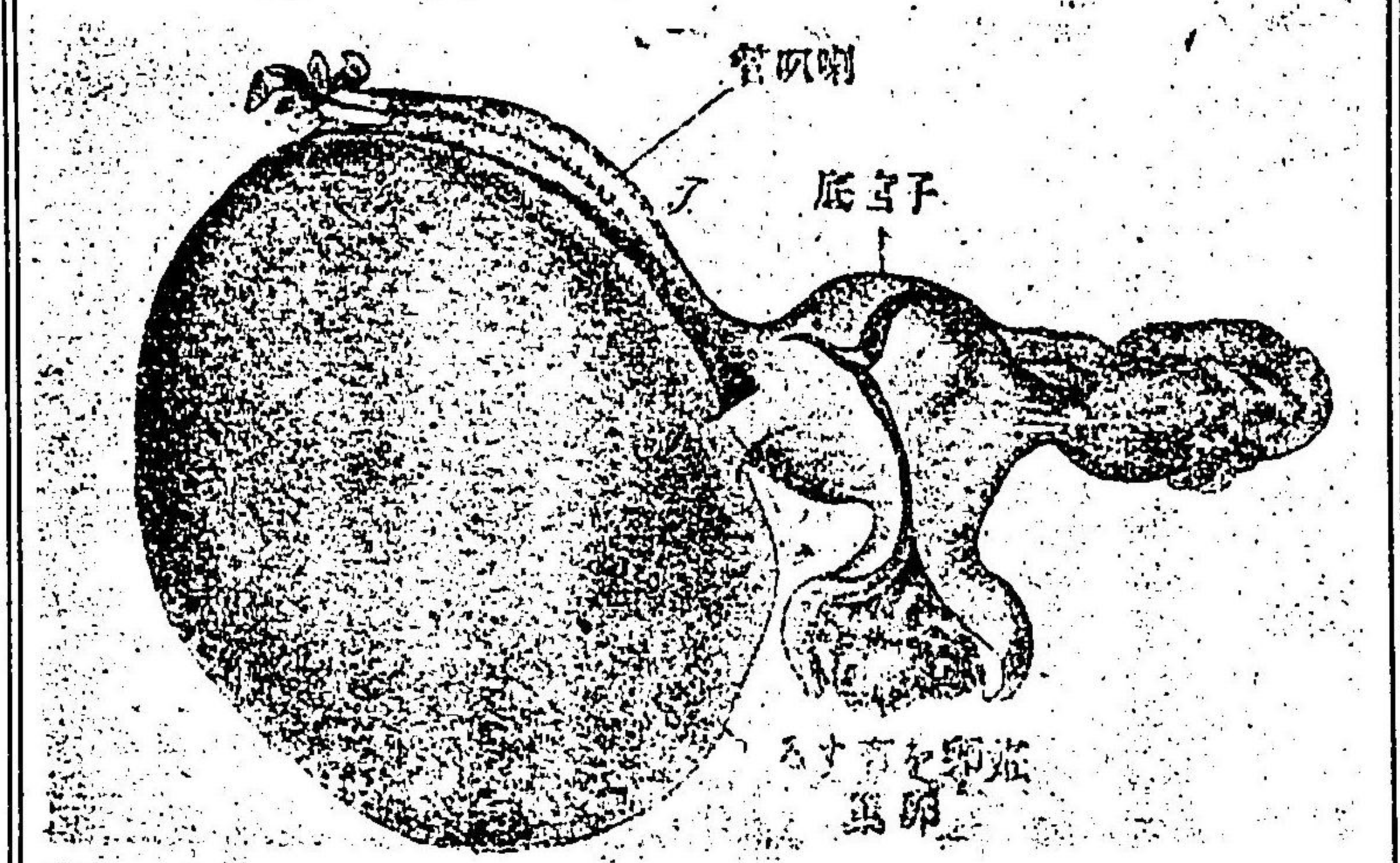
第五百七十七圖



喇叭管妊娠を示す  
謂喇叭管流産を來し何れも腹腔内に著しき出血(内出血)を來し急性貧血の爲めに死を招くに至るべし又た時としては胎嚢破裂前に於て胎兒死亡し此際胎兒若し小なる時は全く吸収せられ形迹を残さざるに至る事あれども胎兒發育して大なる場合には羊水竝に筋肉其他の軟部のみ吸収せられ骨は異物として遺り(石兒)或



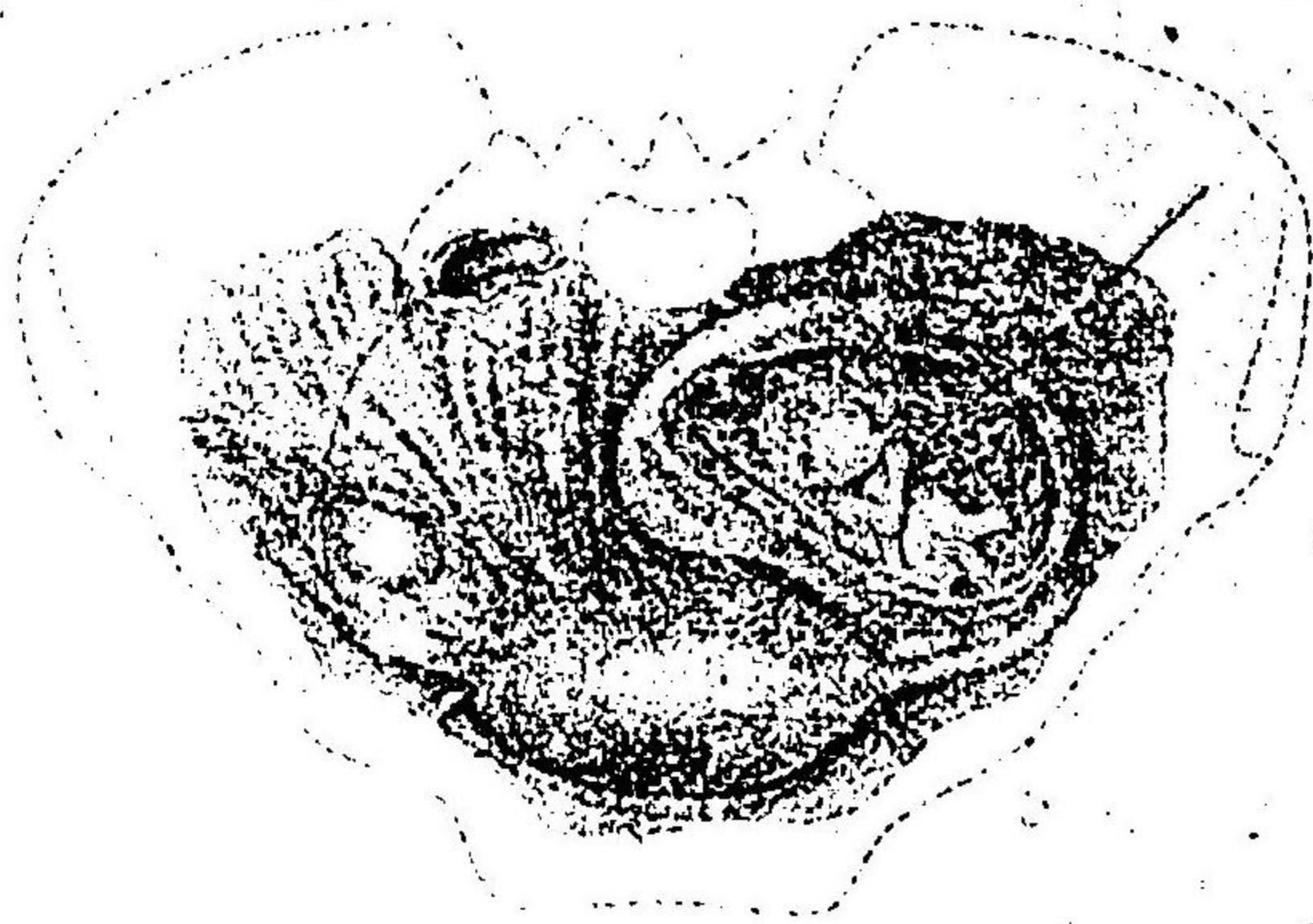
第五百八十八圖



卵巣に於ては、胎児完全に至るに發育して、妊娠の末期に至る事あり、然る時は腹壁切開に由て之を取り出すに非ざれば母兒共に死を招くべし、而して子宮外妊娠に

- 子宮外妊娠ノ徵候及ビ處置ヲ記セ
- 子宮外妊娠ヲ診斷シテ之レヲ處置セヨ
- 子宮外妊娠ノ徵候

第五百九十九圖



腹腔内妊娠を示す

於ては殆んど診斷し得ざるものご見て可ならん、唯だ妊娠初期

に在ては多く子宮内に生ぜる脱、落、膜、剝、離、し、出、血、を、來、し、且、つ、一、般、妊、娠、徴、候、に、加、ふ、る、に、時、々、下、腹、の、疼、痛、等、を、來、す、事、あ、る、べ、き、が、故、に、是、れ、等、に、注、意、す、る、を、要、す、妊、娠、後、半、期、に、至、り、て、は、腹、壁、の、直、下、に、胎、囊、を、觸、れ、得、べ、き、が、故、に、普、通、の、妊、娠、よ、り、も、明、ら、か、に、胎、兒、身、體、各、部、を、觸、れ、得、べ、く、胎、動、等、も、明、ら、か、に、觸、れ、妊、婦、も、之、れ、を、感、ず、る、事、強、く、往、々、胎、動、と、共、に、激、烈、の、疼、痛、を、訴、ふ、る、事、あ、り、て、此、際、内、診、を、行、ふ、に、子、宮、は、唯、だ、少、く、増、大、せ、る、の、み、に、し、て、空、虚、を、感、ず、る、の、み、な、ら、ず、胎、兒、を、藏、す、る、胎、囊、は、子、宮、外、に、在、る、事、明、ら、か、な、る、を、以、て、診、斷、確、實、と、す、べ、し、若、し、胎、囊、破、裂、せ、ず、し、て、胎、兒、死、亡、す、る、時、は、初、め、確、め、得、た、る、胎、兒、心、音、胎、動、等、は、消、失、し、全、身、倦、怠、を、覺、へ、子、宮、口、よ、り、は、不、正、の、出、血、を、來、し、一、日、膨、大、着、色、し、た、る、乳、房、は、再、び、弛、緩、縮、少、し、初、乳、の、分、泌、止、む、に、至、る、又、胎、囊、破、裂、す、る、か、喇、叭、管、流、

産、を、來、す、時、は、突、然、下、腹、に、劇、痛、を、發、し、妊、婦、は、顔、面、蒼、白、脈、微、細、頻、數、等、内、出、血、の、徴、候、を、發、す、べ、し

**處置**、産婆は以上述べたる諸種の徴候に注意し少しにても其疑あらば猶豫なく産科醫の診察を乞はしむべし又た突然下腹に疼痛を發し急性貧血の症状を現はさば(胎囊破裂又は喇叭管流産の徴候)直ちに産科醫を招かしむると同時に妊婦を極めて安靜に平臥せしめ下腹に氷嚢を貼し赤酒ホフマン氏液等の興奮薬を服用せしむべし尙ほ詳細は後節論述する内出血の條下を参照して嚴重なる處置を行ふべし

複胎妊娠

複胎中雙胎は八十回の妊娠中凡そ一回品胎は八千回中一回嬰

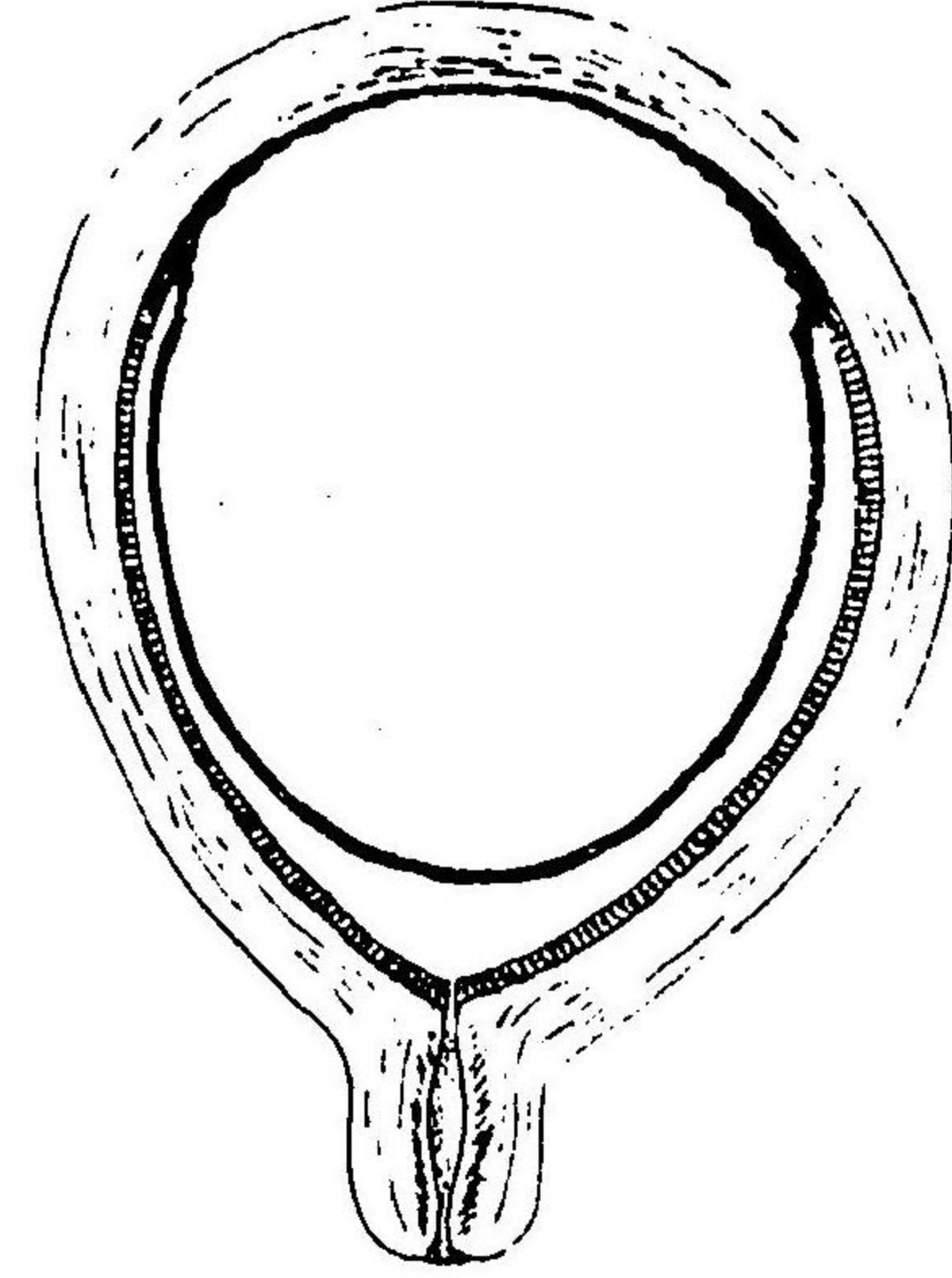
○多胎妊娠トハ如何  
(子宮内に二個以上の胎兒を孕むもの)

○數胎は子宮外妊娠  
ノ鑑定

胎及び五胎妊娠は非常に稀なり六胎妊娠は今日までに唯だ一  
二回ありしのみなり云ふ

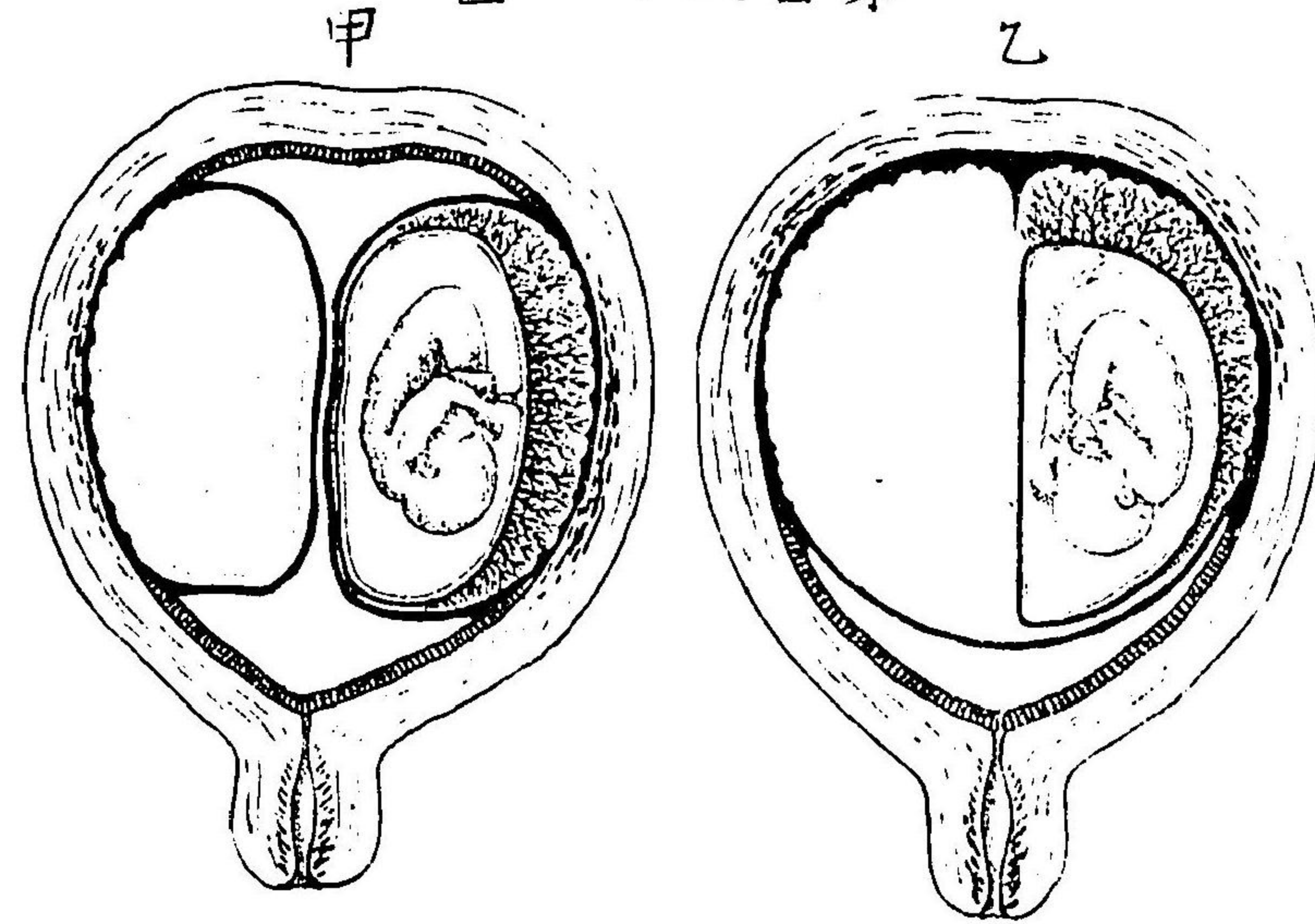
此複胎妊娠は普通妊娠に比すれば早産をなす事多く雙胎は屢々妊娠末期に達する事あるも其胎兒は常に小にして成熟胎兒に比すれば發育甚だ劣れり品胎以上の複胎に在ては殆んど成熟兒を分娩する事なし而して複胎妊娠は二個又は數個の卵同時に受胎するによるものあり或は一箇の卵中に二個或は數個の精蟲の進入するによるものあり故に雙胎を區別して一卵性雙胎、二卵性雙胎とす其他の複胎も亦た之れに等しく區別すべしと雖も甚だ稀なるが故に茲には唯だ専ら雙胎に就て述ぶるを以て品胎以上の妊娠は之れに由て推知すべし  
一卵性雙胎は一卵中二兒を宿せるものにして各兒各別の羊膜

圖十六百第



一卵性双胎を示す

圖一十六百第



二卵性双胎を示す

を有するも共通の絨毛膜を有し、二卵性雙胎は各兒各卵中に宿  
れるものにして各兒各別の羊膜及び絨毛膜を有す而して何れ  
の雙胎も共に共有の脫落膜を蒙むり（二卵性雙胎に在ては時  
として各別の翻轉脫落膜より被はるゝ事あり）胎盤は絨毛膜  
の絨毛と脫落膜より生ずるものなるが故に一卵性なる時は一  
個二卵性なる時は二個にして卵膜を以て相連結す臍帶は素よ  
り各兒各別ありと雖ごも時として胎盤附着部に於て兩者合す  
る事あり複胎妊娠に於ける胎兒の姓は同姓なる事多く殊に一  
卵性雙胎は常に同姓あり

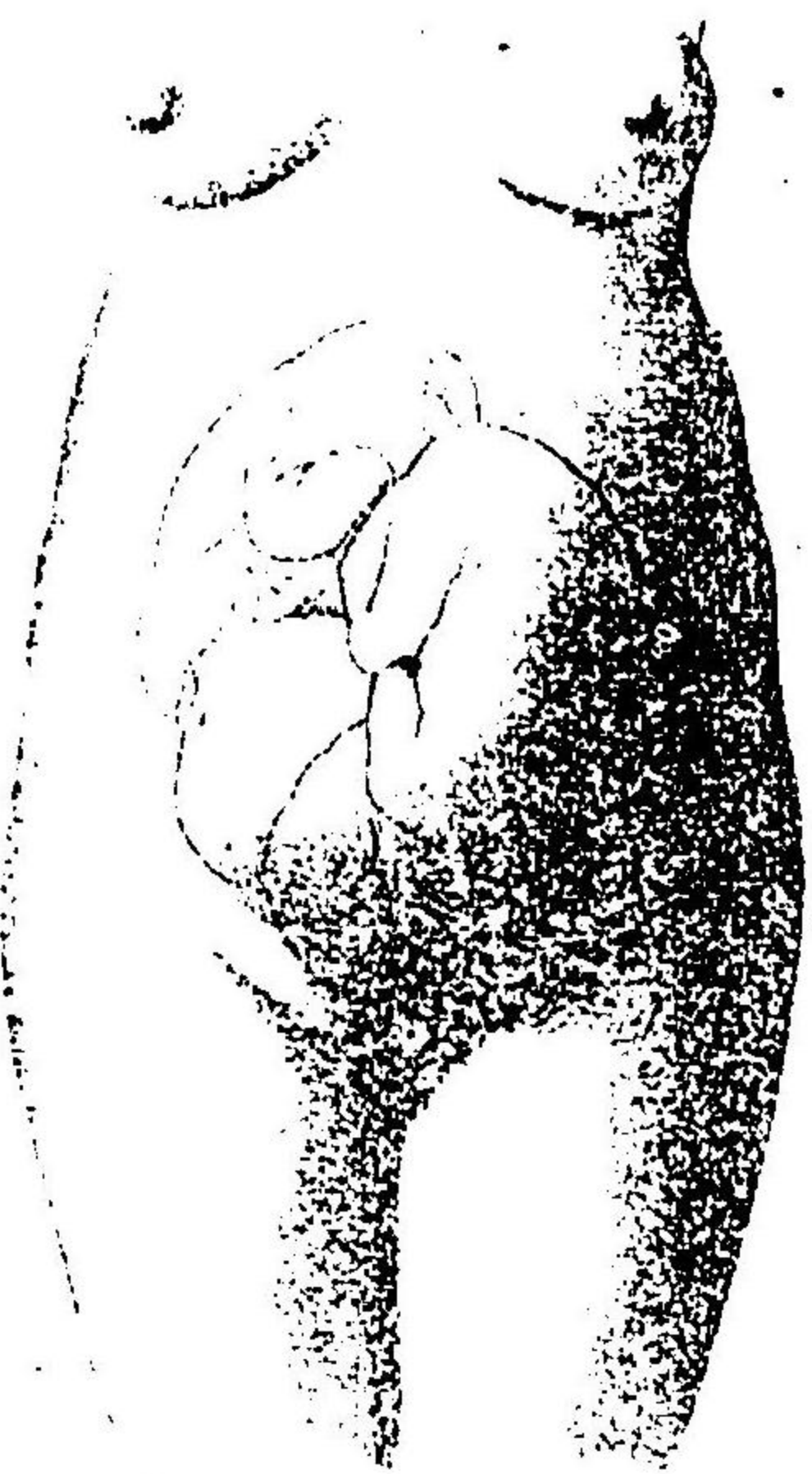
雙胎は兩兒共に頭位を取れる事多く一兒頭位にして他兒骨盤  
端位を取れるもの之に次ぎ兩兒骨盤端位を取り或は横位を爲  
すものは甚だ稀なり

○雙胎妊娠ノ徴候ハ如何

徴候及び診断、複胎の診断は妊娠中に於ては少しく困難なり其徴候としては子宮は異常に膨大し従つて腹部は著しく膨満し呼吸困難を訴ふる事甚だしく下肢の浮腫及著しき靜脈管の怒張を認め觸診上各胎兒の境界をあせる溝をふれ妊婦は兩

二兒共に頭位をとれる雙胎を示す

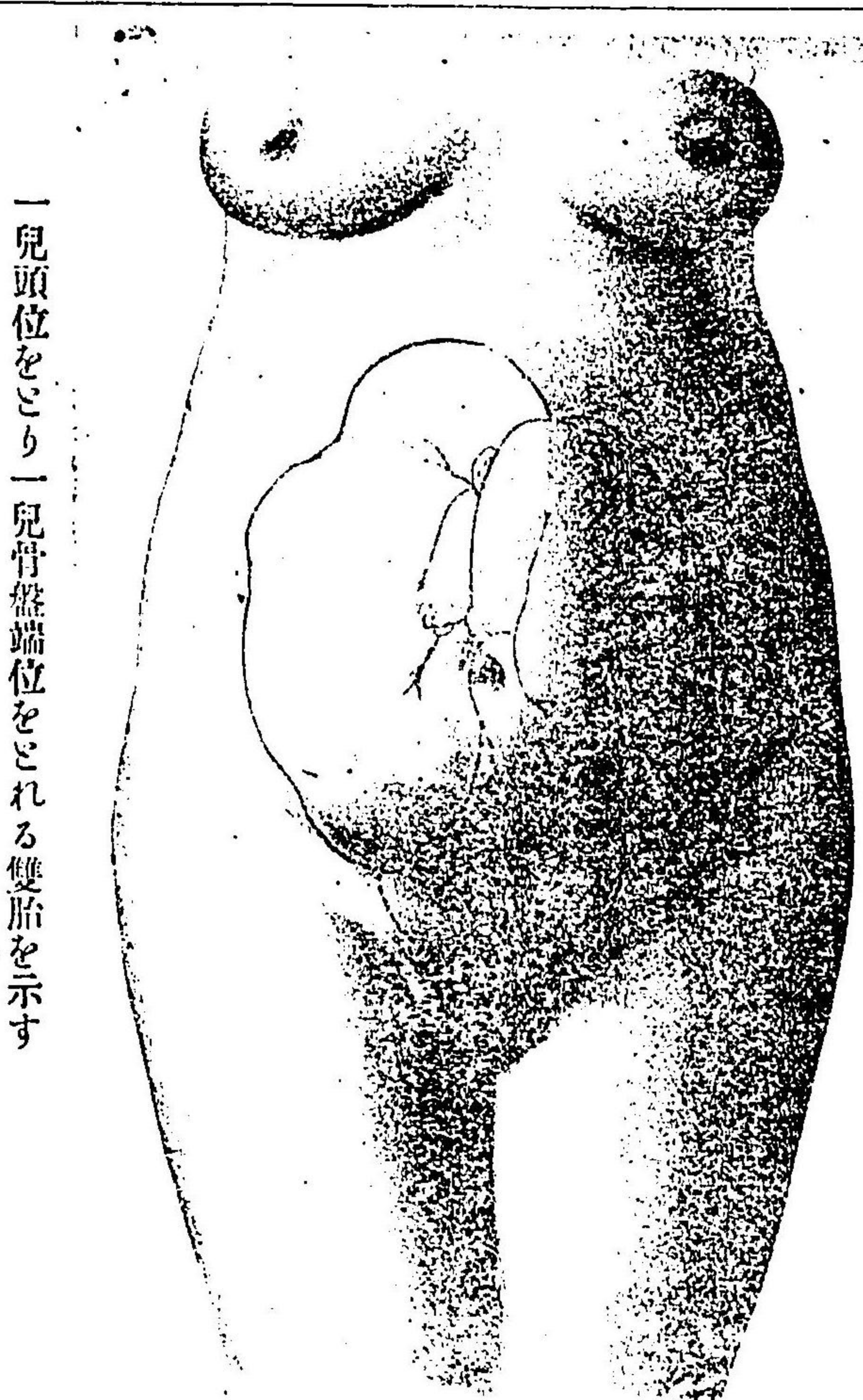
第百六十二圖



側或は數ヶ處に於ける胎動を感じ二箇所或は其れ以上の胎兒同名部例之は二箇所以上の頭部或は臀部の如きを觸れ聽診上二箇所

以上に於て各明らかに數及び調子を異にする胎兒心音を聽き

第百六十三圖



一兒頭位をとり一兒骨盤端位をとれる雙胎を示す

或は一胎児已に分娩せるか若くは死亡の確徴（例之は搏動なき臍帶脱出）あるに拘はらず尙ほ心音をき、胎動を認むる時は確實に複胎妊娠なる事を診断し得べし然りと雖も羊水過多あるか若くは胎児が子宮内に於て前後に重なり合へるが如き場合に在ては心音を聴取し難く且つ各胎児の部分に触る、事困難なり

### 妊娠中胎児の死亡

○妊娠中胎児死亡ノ原因  
因襲候及ビ診断

妊娠中胎児は左の種々ある原因に由て死亡す

**第一、卵の異常、** 即ち胎児の畸形或は疾病及び卵膜臍帶の異常例之は葡萄狀鬼胎臍帶の眞結節、纏絡、壓迫、胎盤に異常ありて胎児を養ふ事能はざるもの卵と子宮との

### 間に於ける出血

**第二、母の疾病、** 即ち急性及び慢性の傳染病の如きもの例之は痘瘡、室扶斯、猩紅熱、麻疹、肺炎、虎列拉、ペスト、肺癆、微毒、等又た母の營養不良、高度の貧血、劇しき下痢等之に屬す

**第三、子宮の疾患、** 即ち子宮の炎症、子宮内膜の疾病、及び子宮の位置異常

### 第四、劇烈なる精神感動

**第五、外力の侵襲、** 即ち母體腹部の打撲、墜落、轉倒、劇動、例之は騎馬、乗車、舞踏、等其他腰湯、冷水浴又は墮胎藥の服用等に由て胎児は疾病を得次で死亡する事あり

胎児死亡後の變化、以上の原因に由て胎児が死する時は通常直ちに流産早産を來すものなれども時としては永く子宮内に留まり種々の變化をなす事あり殊に妊娠の初め一ヶ月位に在ては胎児は吸収せられ其痕跡だも見る事能はず單に卵膜のみ産出する事あり或は卵は尙ほ病的變化をなし漸次發育して鬼胎(モール)を形成する事あり或は妊娠四ヶ月後に於て胎児が久しく羊水中に在る時は浸軟作用と名くる變化を來し全身皮膚は汚穢赤色を呈し處々剝脱して帶褐赤色の眞皮を現はし臍帯は膨大して柔かく頭部は柔軟にして各骨の縫合弛み毛髪は容易に抜け顔面膨大して眼鼻等は崩れ腹部は著しく膨大し四肢の筋肉は甚だ軟かにして關節外づれ羊水は溷濁して暗綠色を呈するに至る是を軟化胎児又は浸軟兒と稱す又た時として

て胎児は硬固となり皮膚帶黃褐色を呈する事あり例之は雙胎兒の一兒死亡せる場合に於ては死兒は硬固となり扁平とあるとあり是を石兒又は紙狀胎兒と稱す又た胎児死亡せる後ち空氣が卵膜中に進入する時は腐敗作用を發起し胎児組織は全く破壊せられ瓦斯發生を來し母體は烈しき熱を發して死を招くに至る事あり

妊娠中胎児死亡の鑑定

は妊娠の初期に於ては甚だ容易ならず然れども妊娠に由て起れる症狀は屢々速かに消失し子宮の増大止み下腹の冷感を覺へ時々嘔氣ありて味感の變化を來し屢々惡寒を催し腔内よりの血様或は肉汁様の排泄物を認むる時は死亡せるに非ざるやの疑を生ずべく妊娠の後半期に至れば其鑑別頗る容易にして一旦腫大し緊實となれる乳房

○胎児死亡シタル時ハ如何ナル状態アルヤ  
及ビ其處置ハ如何  
○分娩前ニ於テ胎ノ死亡ヲ知ル法ハ如何  
且ツ分娩ニハ如何ナ  
○胎中胎児死亡ノ徵候



は再び弛緩し子宮の増大は止み反て縮少し下腹の冷感を覺へ胎動は止み一度び聽き得たる胎児心音臍帶雜音等を聽取する事能はざるに至り又た胎児の位置は妊婦の移動に従て容易に變ずるが故に妊婦は腹内に異物ありて自己の運動と共に移動するが如く感じ腔内よりは悪臭液を漏らし雙合診を行ふに兒の頭蓋骨は弛緩し恰も囊中に水と石片とを盛りて探ぐるが如く感ずる等は胎児死亡の徴候あり但し胎児心音胎動等は羊水過多なる時兒背後方に向へる時等に於ては胎児生活するも間問明らかあらざる事あるにより反覆検査せざれば誤を生ずる事あるべし

**處置**、産婆は胎児死亡せるを推知することも是れを明らかに妊婦に告げずして或は流産早産を來すべき事のみを知らせ置

妊婦にして胎児の死亡せるを聽かば忽ち力を落し甚しき精神感動を起すことあらん

欠

MISSING

或は飲ましめ四肢の末端より軀幹に向つて壓迫繃帶を施こすを良こす

### 第八十七節 流産及び早産 (妊娠の中絶)

○流産早産ノ區別及ヒ其原因ヲ記セ

流産とは妊娠七ヶ月以前に分娩し兒の母體外に於て發育する事能はざるものを云ひ早産とは妊娠八ヶ月後十ヶ月の間に於て分娩し兒は適當の看護に由れば母體外に於て發育し得るものを云ふ而して流産を更に分て二期とす  
流産第一期とは胎盤完成以前を云ふものにして妊娠一ヶ月より四ヶ月迄を云ひ第二期とは胎盤完成後にして妊娠四ヶ月より七ヶ月迄を云ふ

流産及び早産の原因、流産及び早産は共に同一の原因に

○流産ノ原因及ヒ處置ハ如何

流産及び早産

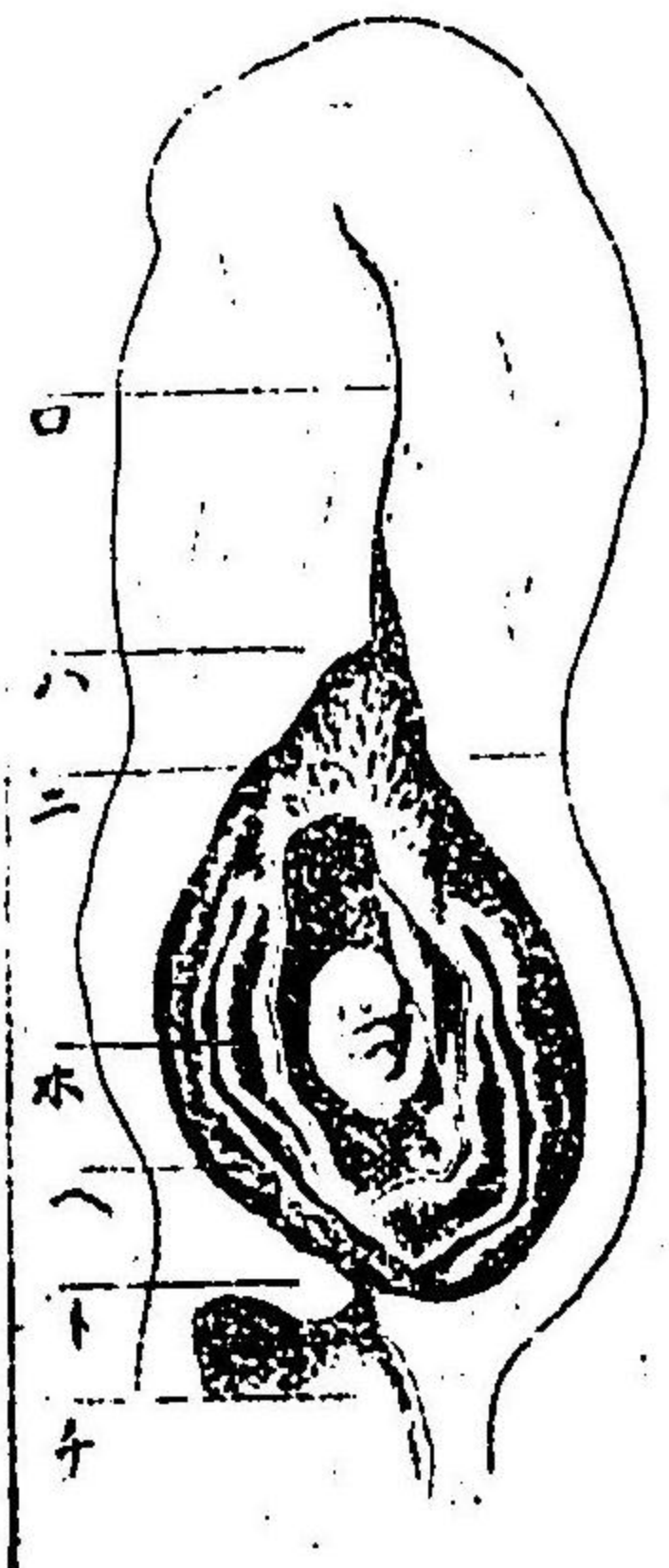
○流産ノ原因竝ニ其時期

- 流産ノ徴候竝ニ豫防法ヲ記セ
- 初期流産ノ症状及ビ處置ヲ記セ
- 流産ノ危険ナル理由ヲ舉ゲ
- 流早産竝ニ其處置

流産の區別

由て發するものにして前節述べたる胎兒死亡の原因は又た流早産の原因とある而して普通最も屢々流早産の原因を占すものは妊婦の微毒子宮内膜炎子宮腔部子宮頸管の糜爛ありとす流産の徴候、第一期の流産殊に妊娠の第二、三週に於ては問流産を來すと雖も妊婦は疼痛ある月經と思ひ誤まり流産たるを覺らざる事多し然れども多くは通常の月經に比すれば血液多量にして凝血を混じ頗る強き陣痛様の疼痛を伴ふものとす妊娠第二、三ヶ月に至れば其徴候頗る著明にして刻期的に陣痛を發し子宮口は開大して脱落膜は子宮内面より剝離し甚しき出血を現はし卵膜は通常破るゝ事なくして分娩せらるゝものことす之れを完全流産と云ふ若し子宮口の開大不充分なる等に由て卵膜破裂する時は羊水を漏出し胎兒は卵膜の一部

圖五十六百第



イ 内子宮口  
ロ 子宮腔  
ハ 内子宮口  
ニ 胎盤  
ホ 胎盤脱落膜  
ヘ 胎盤脱落膜  
ト 外子宮口

流産しつつある状態を示す

と共に極めて容易に分娩せられ終りに脱落膜を産出す而して此の如く卵膜

破裂して胎兒

産出する時は

後産の一部は

子宮内に残留

し爲めに反覆

する甚しき出血を來し或は種々の病を發し危険を招く事あり是れを不完全流産と云ふ

時としては出血は内部のみに止まり即ち脱落膜の組織及び絨毛膜間に出血し胎兒は爲めに死亡し多くは吸収せられて消失し子宮内に於て全く凝血よりおれる大なる塊状物を形成す之

を血胎と稱し其血胎中の血色素吸収せられて消失するに至れば肉胎と稱し數週數月の間子宮内に留まり次で大出血を起して娩出せらるゝ事あり

又た時としては下腹疼痛子宮出血を來し流産の徴候現はるゝと雖も適當の處置に由て流産は停止するのみならず妊娠の末期に達し健康の生兒を得る事あり

第二期の流産は早産若くは通常の分娩に類似し刻期的に陣痛を發し子宮口は漸次開大し次で卵膜破裂し胎兒を産出し然る後々産の産出を來すものにして卵膜を被むりつゝ胎兒の産出するは稀あり然れども正規の分娩に比すれば後産の殘留を來すこと多く從て出血の恐れ多し

産婆は婦人に接し先きに月經閉止し居たるものにして下腹及

○流産ニ對スル産後ノ處置  
○流産第一期處置ノ要領ヲ記セ

び腰部の疼痛子宮出血を訴ふるをきかば直ちに先づ流産を想像し精密なる診察を行ふべし若し乳房腫大し是れを搾るに初乳を漏らし子宮は膨大し臍粘膜及び子宮腔部は藍紫色を呈し甚だ柔軟となり子宮口は開大し殊に滑澤なる卵の一部を觸知する時は確かに其流産の始まれるを知り得べし

處置、妊婦子宮出血を發せば妊婦をして直ちに靜臥せしめ出血の多少を検すべし而して出血甚だ少量ある時は絶対的安靜を守らしめ三四日間平臥せしめば或は流産を防ぎ得べし但し此際内診、腔洗滌等子宮を刺戟する事は全くあすべからず若し出血多量なるか或は陣痛様發作甚だしき時は直ちに醫師の來診を乞ひ傍ら嚴重なる消毒のもとに内診を行ひ子宮口の大さ及び子宮口部に既に卵の脱出せる事なきや否やを検し出血多

量にして母體に危険を來すの恐れある時は氷片を混じたる寒冷の三プロセント石炭酸水又は百倍リゾール水又は攝氏五十度の三プロセント石炭酸水又は百倍リゾール水を多量に腔内に灌注し且つ綿花を石炭酸水に浸して固く腔内の栓塞法を行ひ下腹に氷嚢を貼し靜臥せしむべし

若し出血の爲めに母體急性貧血に陥り顔面蒼白脈搏微細頻數等の症狀を呈せばホフマン氏液十滴乃至二十滴を水に和し又は赤酒「ブランデー」等の興奮藥を内服せしめ頭部を低く保つべし尙ほ詳細は急性貧血の條下を参照して處置すべし

腔内に挿入したる綿花は挿入後十二時間以内に取出し尙ほ出血ある時は更に新鮮なるものを挿入し若し全く止血する時は再び挿入するの必要なし而して綿花即ち「タンポン」交換の際

赤酒は一回二三  
瓦を與へブラン  
デは水を和して五  
瓦乃至十瓦を與ふ

は其附着せる血液血塊等を検し卵を混ざる事あきや尙ほ腔内に卵の脱出する事あきやを検し若し疑あらば之れを保存して醫師の検査を受くべし

卵排出後尙ほ出血止まざれば後産の一部子宮内に殘留するの徴あるを以て宜しく醫師の治療を受くべし醫師の來着前は安靜に氷巻法「タンポン」を行ふべし（尤も「タンポン」は凡ての場合に於て他の方法により止血するを得ば成るべく行はざるを良しす）而して流産後は正規分娩後に於けるが如く八日間には安臥せしめ後ち起坐を許し其他の攝生法亦た通常の産褥に異なるなし若し其攝生法を守らざる時は後來種々の病を惹起し測らざる危険に陥るべく殊に流産の取扱には嚴重なる消毒法を確守すべきことを忘るべからず

○早産兒ノ處置如何  
○早産兒ノ看護法ヲ記

早産の徴候及び處置 早産の徴候及び經過は殆んど正規分娩に等しく規則正しき陣痛を以て始まり子宮口は開大し卵膜は胎胞を作り次で破水の後胎兒産出し終りに後産々出す而して娩出したる胎兒は發育不充分あるが故に極めて看護に注意せざれば死を來すべし殊に兒の體温を失はざる様湯婆等を以て適當に暖むるを要す且つ兒は哺乳の力乏しきが故に乳汁を與ふるにも充分の注意を要す母の攝生及び取扱に就ては正規分娩に異なる處あり

### 第八十八節 晩産

晩産とは妊娠第十ヶ月即ち四十週より後れて胎兒の産出する場合を云ひ從て胎兒は通常過度に發育し分娩も多少困難なる

死亡したる胎兒は稀れに子宮内に留まり分娩期日に後れて産出する事あるも晩産に非ず

を常とす(過熟胎兒云ふ)此晩産は甚だ稀に見る處のものにして多くは分娩期日の測定を誤れるか或は終末月經の明らかならざるにより正規分娩を晩産と思ひ誤れる場合多し其處置は正規分娩に異なる處なく褥婦の攝生法及び取扱法亦た正規分娩に同じ

### 第十章 分娩異常及其取扱法

分娩異常とは母若しくは胎兒の健康を害するか或は困難にして人の助けを要する所の分娩を云ふ而して正規分娩の條下に述べたる如く妊婦が健康にして胎兒及び其の附屬物産道其他一般生殖器竝に産出力等に異常なくんば分娩は正規なり得べ

○難産トハ如何

○如何ナル場合ニ於テ  
産婆ハ産家ナシテ醫  
師ヲ招カシムルヤ

しこ雖以上の中一ツにても異常あらんか従て分娩は異常とあ  
るものなり  
分娩異常の處置は専ら産科醫の職務に屬すこ雖産婆は産婦を  
取扱ふに當つて早く此の異常を發見し時を誤まらず産科醫の  
治療を乞はしむるの義務あり而して醫師の來着までは應急の  
處置を行ひ次で醫師を助けて其施術に遺憾をからしむるを要  
す産婆若し異常に注意せず等閑に打ち過ぎ或は自ら誤りたる  
處置を行ふことあらんか分娩經過は益々不良となり母兒共に  
其生命を救ふこと能はざるに至るべし

### 第八十九節 産道の異常

#### 甲、軟部産道の異常

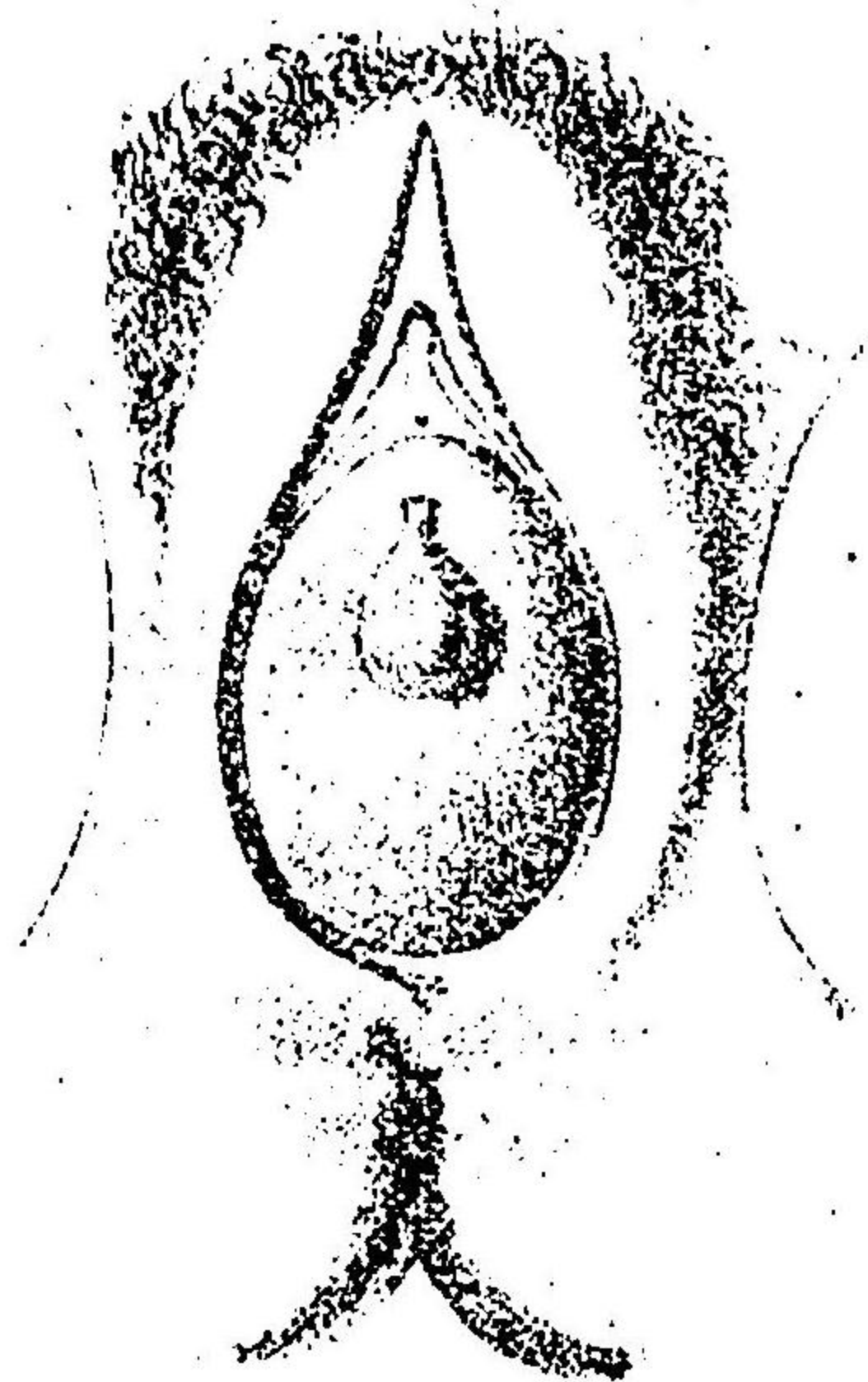
### 陰門腔狹窄及び膾會陰の延長性缺乏

之れに屬するは生來陰門腔の狹隘なるもの處女膜の強靱ある  
もの前回分娩時の損傷に因れる癍痕腔及び陰唇の腫瘍陰唇の  
浮腫等にして高年例之は二十五歳以上の初産婦の膾及び會陰  
或は陰門炎膾加答兒等の結果として硬固となれる膾及び會陰  
は常に弾力に乏しく延長性を缺くべし  
分娩に際して兒頭は已に深く下降し陣痛の正規なるに拘はら  
ず常に一所に停止して更に先進せざることあり斯る時は兒頭  
は已に故障なく骨盤内に入りたる位なるが故に骨盤に狹窄  
かどの異常なき事を推定し得べく従て産婆は分娩遅延の原因  
を他に求めざるべからず即ち斯の如き場合に於ては先づ會陰  
膾陰門に異常なきや否やを注意すること肝要あり



處女膜は殆んど閉鎖して一小孔を胎し分娩の際該小孔より胎胞は一小胞をなして脱出したるものを示す

第百六十六圖



通常の場合に於ては腔及び會陰は兒頭の先進に由りて擴張せられ處女膜の如きは断裂するを常とすれ共狹窄高度なるか甚しく延長性を缺く者にては陣痛の強劇なるに拘らず兒頭の先進甚だ緩慢あるか若しくは全く停止し陣痛は終に全く微弱とあるか或は過劇陣痛を惹起し終に腔會陰の大破裂を起して分娩を終り若しくは子宮破裂を起して母體

の死を來すべし故に狹窄輕度なる場合には外陰部の溫卷法を行ひ或は微溫消毒液を腔内に浣注し或は坐浴を取らしめ若し其の效なきか狹窄高度なるものは常に醫治を乞はざるべからず

### 子宮口の閉塞狹窄及び延長性缺乏

子宮口の全く閉鎖するは極めて稀有にして多くは狹窄なり而して狹窄及延長性缺乏の原因を悉くするものは前分娩時の損傷に由る癍痕其他子宮頸部の疾病例之は炎症性の癍痕、子宮頸の肥大、癌腫並に筋腫及び高年の初産婦等なり

子宮口の狹窄あるか或は延長性を缺くときは陣痛正規あるも子宮口は開大せず子宮頸部は著しく菲薄とあり陣痛漸次強劇

分娩の際外子宮口の狭窄により子宮下部著しく延長非薄となり將に破裂せんとするものを示す

第百六十七圖



1 子宮口  
2 胎盤  
3 子宮壁  
4 膀胱  
5 子宮頸部延長して著しく非薄なるもの  
6 子宮壁

るものに在ては遂に痙攣性陣痛を發し甚だしきに至りては子宮頸の破裂を來すことあり

となるに従ひ前腔穹窿部は先進部の爲めに膨出し菲薄となり恰も胎胞を觸るゝが如く感じ開大せざる子宮口は後方薦骨窩に轉位す而して子宮口尙ほ開大せざ

産婆若し其狭窄軽度にして且癍痕より來れる事を知らば微温の消毒液を以て一二時間毎に一回づ、腔洗滌を行ふべし然る時は多くは子宮口の開大を促し得べしと雖も狭窄高度ある時は先づ醫師の來診を乞ひ其の指揮に従はざるべからず

### 子宮の位置異常

子宮の前屈後屈症等は既に異常妊娠の條下に述べたるを以て茲に略す

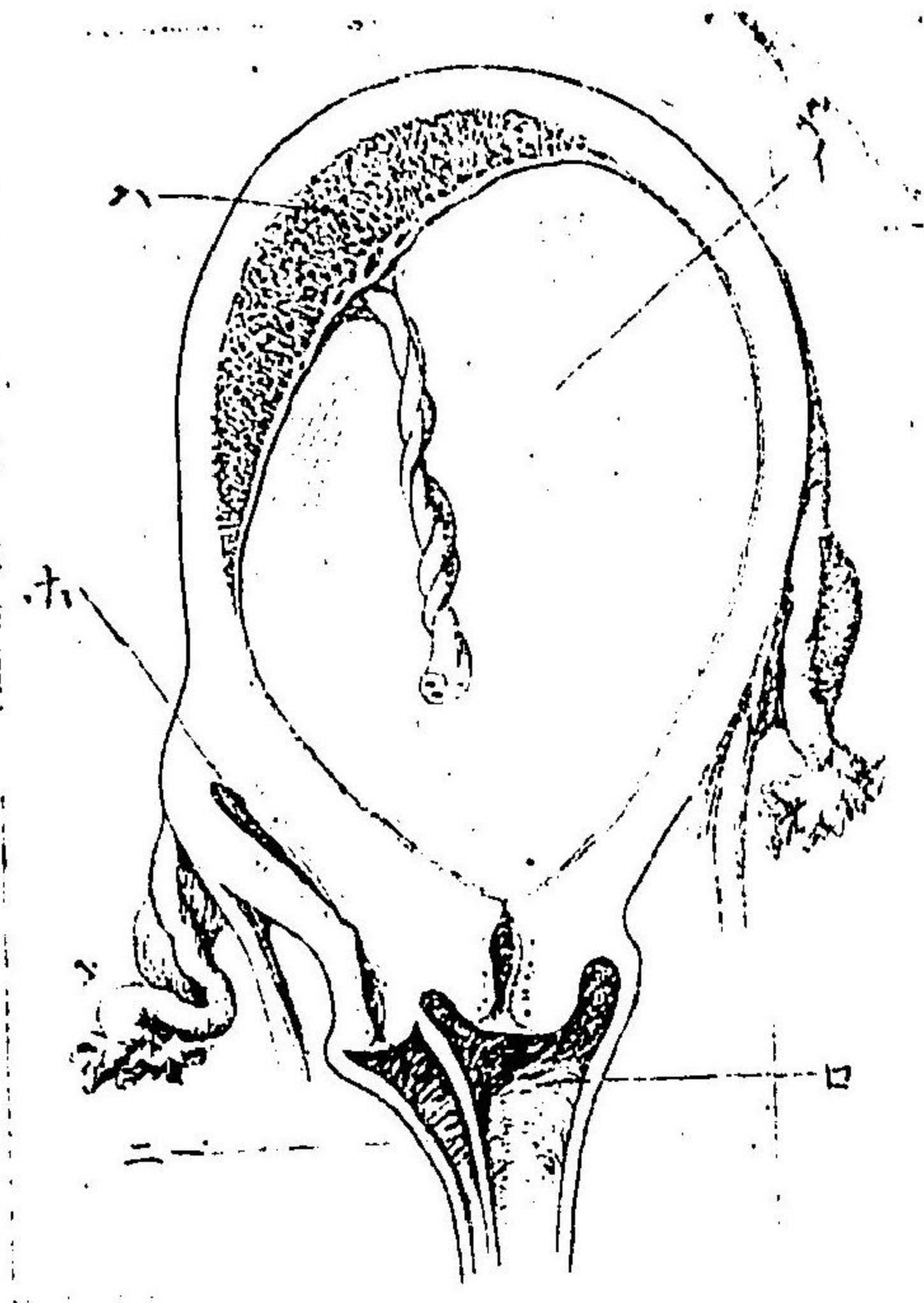
子宮の左方或は右方に轉じ若くは傾くものは分娩の際著き障害をまねき子宮の傾斜著しきに従ひ産出力は骨盤腔に向はず反て一側の腸骨窩に向ふが故に分娩大に遅延し且つ顔面位横位等の異常位置を來し易し

處置、兒頭若し一側の腸骨窩に固定せらるゝ時は産婦をして  
 兒頭の存する側方に臥せしむべし然るときは子宮底は自己の  
 重さに由りて同側に轉じ子宮口は骨盤の中央に來り以て容易  
 に分娩を遂ぐるを得べし例之ば子宮右側に傾くときは左側臥  
 を取らしめ左側に傾くときは右側臥を取らしむ然れども尙ほ  
 效を奏せざれば直様産科醫の往診を乞はしむべし

子宮の發育異常

子宮の重複せるもの又は双角子宮と名くる子宮底の分裂せる  
 ものも亦た妊娠する事あり而して是れ等は多く分娩の障害を  
 來し注意して検査せざれば子宮外妊娠と誤ることあり

圖八十六百第  
 示を娠妊るけ於に宮子複重



イ左妊娠子宮内容  
 ロ左側腔  
 ハ胎盤  
 ニ右側腔  
 ホ右子宮

子宮脱腔脱

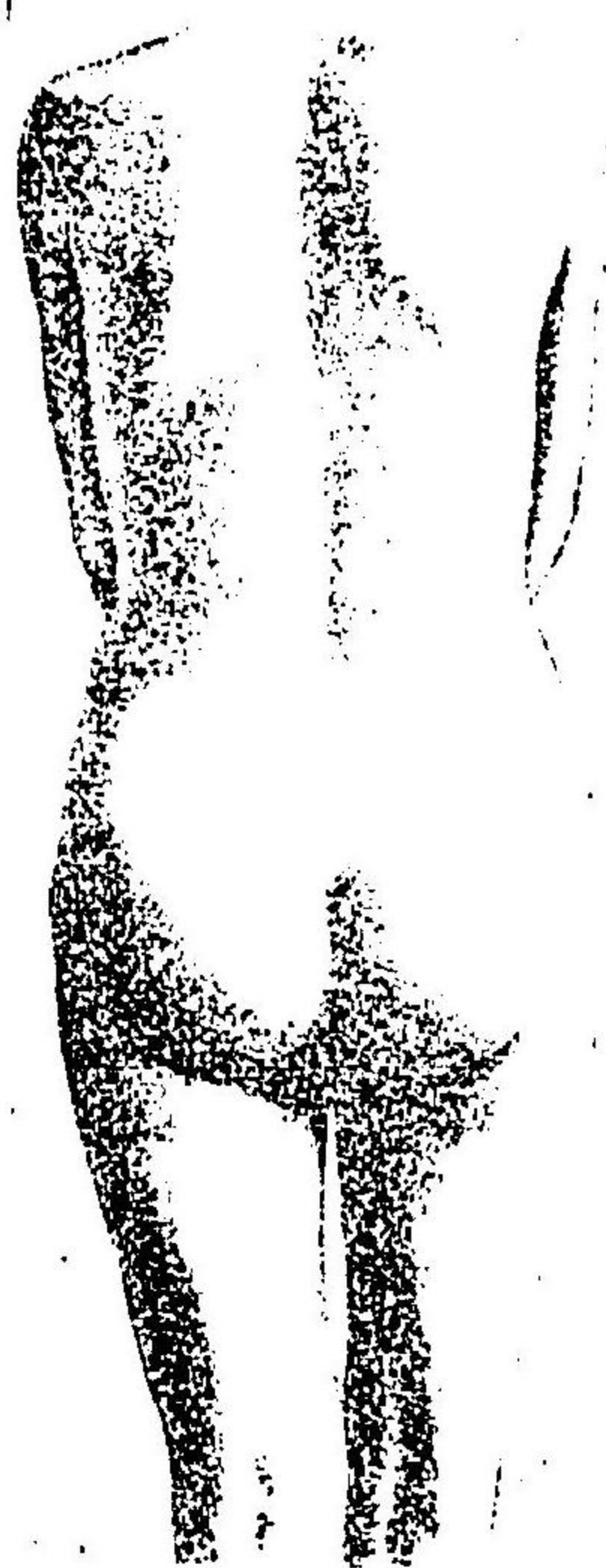
子宮脱は已に妊娠異常の條下に述べたるが如く妊娠の進むに  
 つれて多くは自ら整復するものなれども稀には妊娠末期まで

過劇陣痛は子宮脱腫脱を起し易し

持續し分娩に當りて甚だしき障碍を來すことあり尤も輕度あるものにて子宮口が陰唇間に現はれざるが如きものにありては甚だしき障碍なくして分娩を終るべしと雖高度のものにありては子宮口は開大せず子宮は其周圍より壓迫を蒙むり時を經ば壞疽を起すに至るべし腫脱は多くは子宮脱を伴ひ或は單獨に現はるゝことあり  
分娩時輕度の子宮脱あるときは産婦の臀部を少しく高くして側臥せしめ全く努責を禁じ以て子宮口の全開大を待つべし亦た初めより高度なるときは之れを整復したる後ち固く腫脱を施し以て子宮口の開大を待つべし而して始めより醫治を乞ふべきは論を待たざる處にして腫脱も子宮脱と同様の處置をなすべし

○陣痛異常ナクシテ子宮開口スルモ兒ノ分娩スルコト能ハザル原因ハ如何

圖九十六百第



狹窄骨盤とは骨盤徑線の尋常のものより短縮せるものにして

乙、硬部(骨部)産道の異常  
狹窄骨盤

以上の外産道の周圍よりする壓迫例之は卵巢腫瘍の如きは兒頭骨盤内に進入するを妨げ膀胱直腸の充盈は陣痛の微弱を發し分娩を遅延せしむるは既に論述したるが如し宜しく妊娠異常の章を参照すべし

普通見るに  
肩の骨盤の  
通人たる  
骨の骨盤の  
盤をもる  
有後の(りし)

圖十七百第



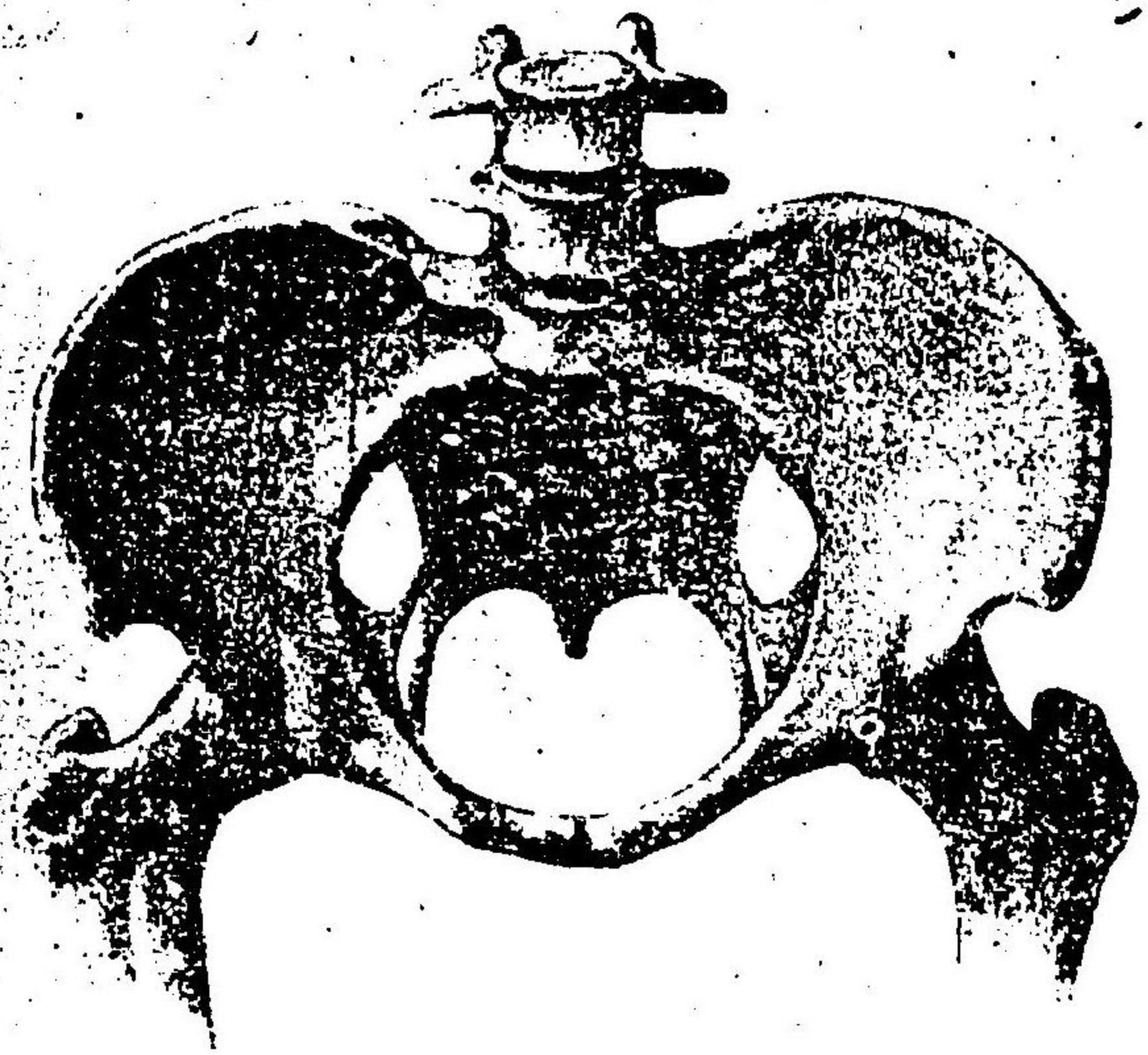
狹窄骨盤後を  
見よ(即ち横徑の)  
有るた見よ(即ち横徑の)  
すもるた見よ(即ち横徑の)  
婦の(即ち横徑の)  
人の(即ち横徑の)

歐米に在ては頗る多しと雖も本邦に在つては稀なり之を區別して左の七種とす

- 一般狹窄骨盤(全狹窄骨盤)
- 單純扁平骨盤
- 佝僂病性扁平骨盤
- 骨軟化病性狹窄骨盤

○漏斗狀骨盤ノ分規ハ如何  
○入口廣くして出口の狹小なるを漏斗狀骨盤云ふ  
○異形骨盤ノ種類ヲ記セ  
○過大及び過小骨盤ニ於ケル處置ハ如何

圖一十七百第



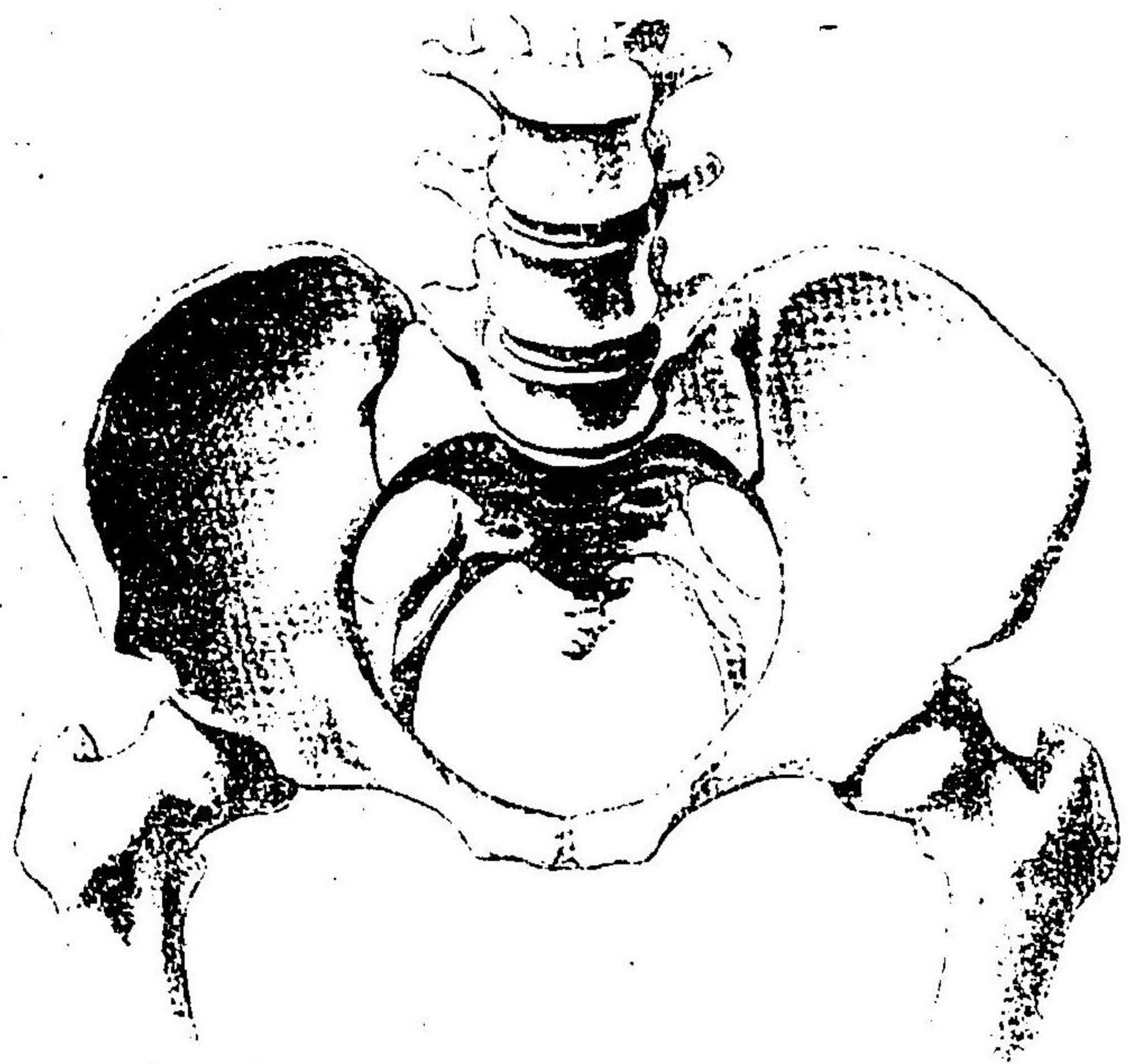
普通の骨盤を示す

- 横徑狹窄骨盤
- 斜徑狹窄骨盤
- 骨腫瘍性狹窄骨盤
- 第一 一般狹窄骨盤一名全狹窄骨盤
- 第二 單純扁平骨盤

骨盤の諸徑線一般に狹少なるものあり

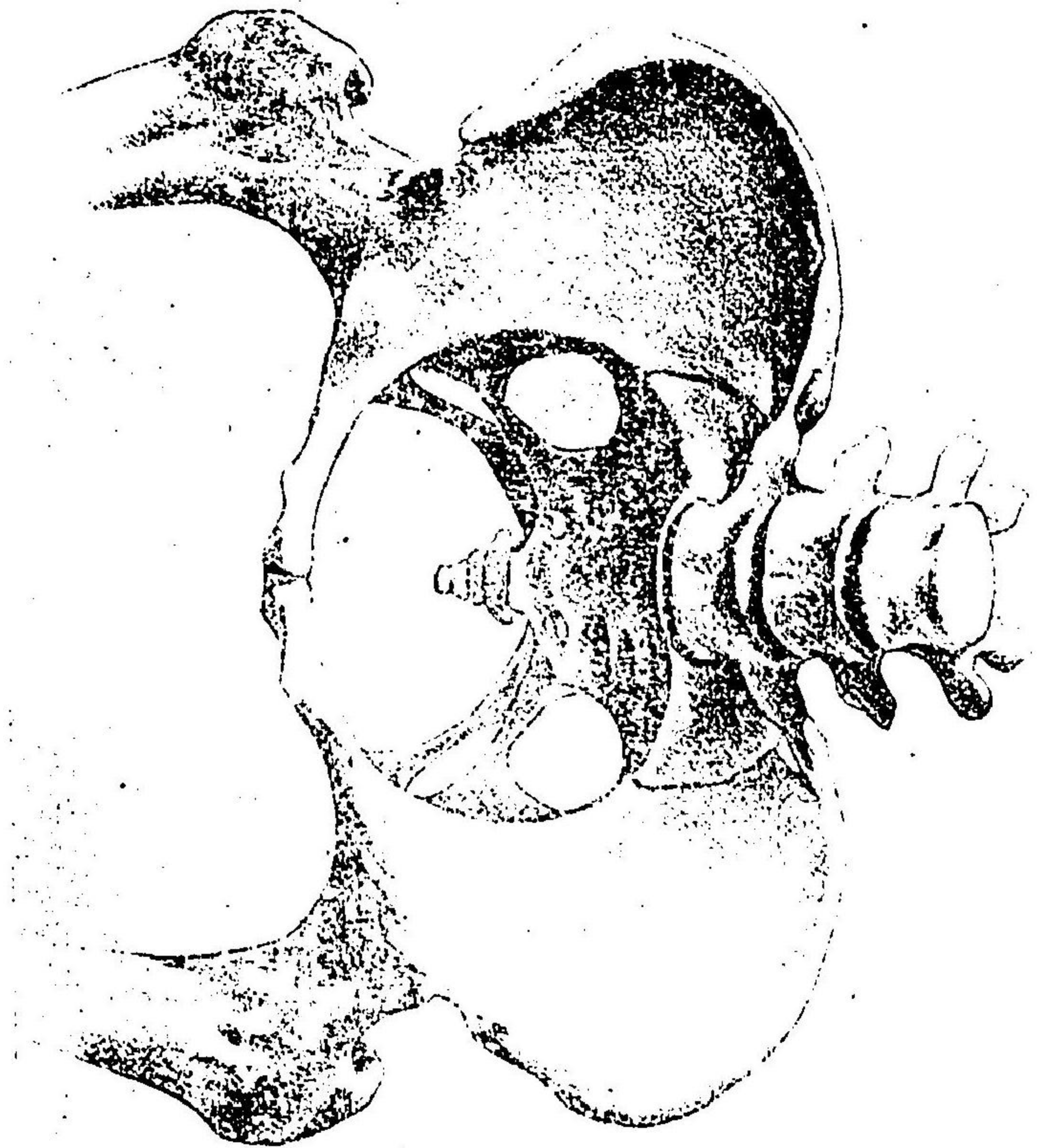
○異常骨盤中最多ナル一例其後如何ノ扁平骨盤トハ何ゾ及ビ其診定法ヲ記セ

第百七十二圖



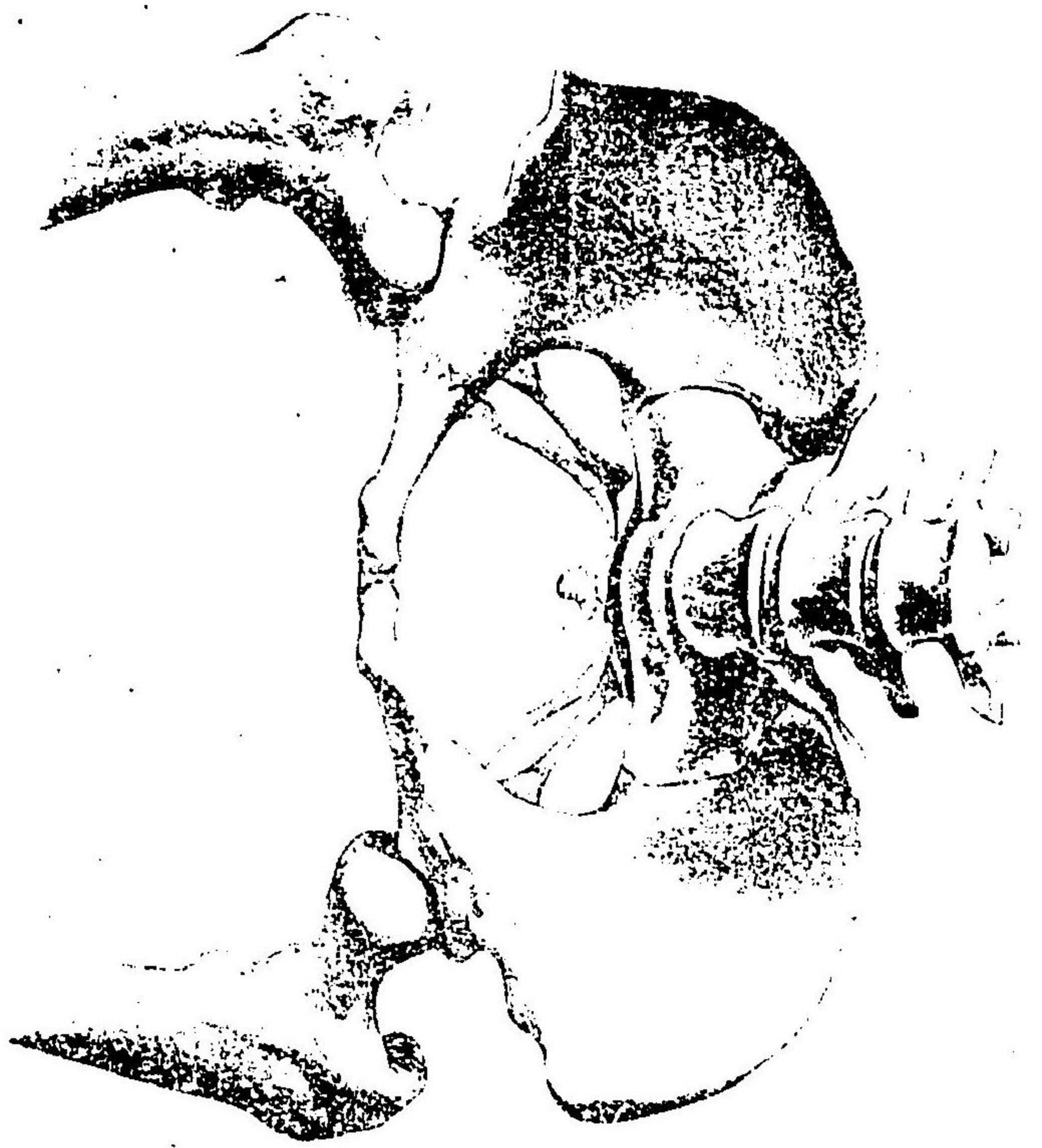
九二  
凡ての狹窄骨盤  
中最も多く見る  
所のものにして  
薦骨岬は著しく  
前方に突出し骨  
盤凡ての直徑線  
も屢々短縮ここ  
あり内診を行ふ  
示に手指は容易に  
す薦骨岬に達すべ  
し

單純扁平骨盤を示す



第百七十三圖

佝僂病性扁平骨盤を示す



圖四十四

圖五十七百第

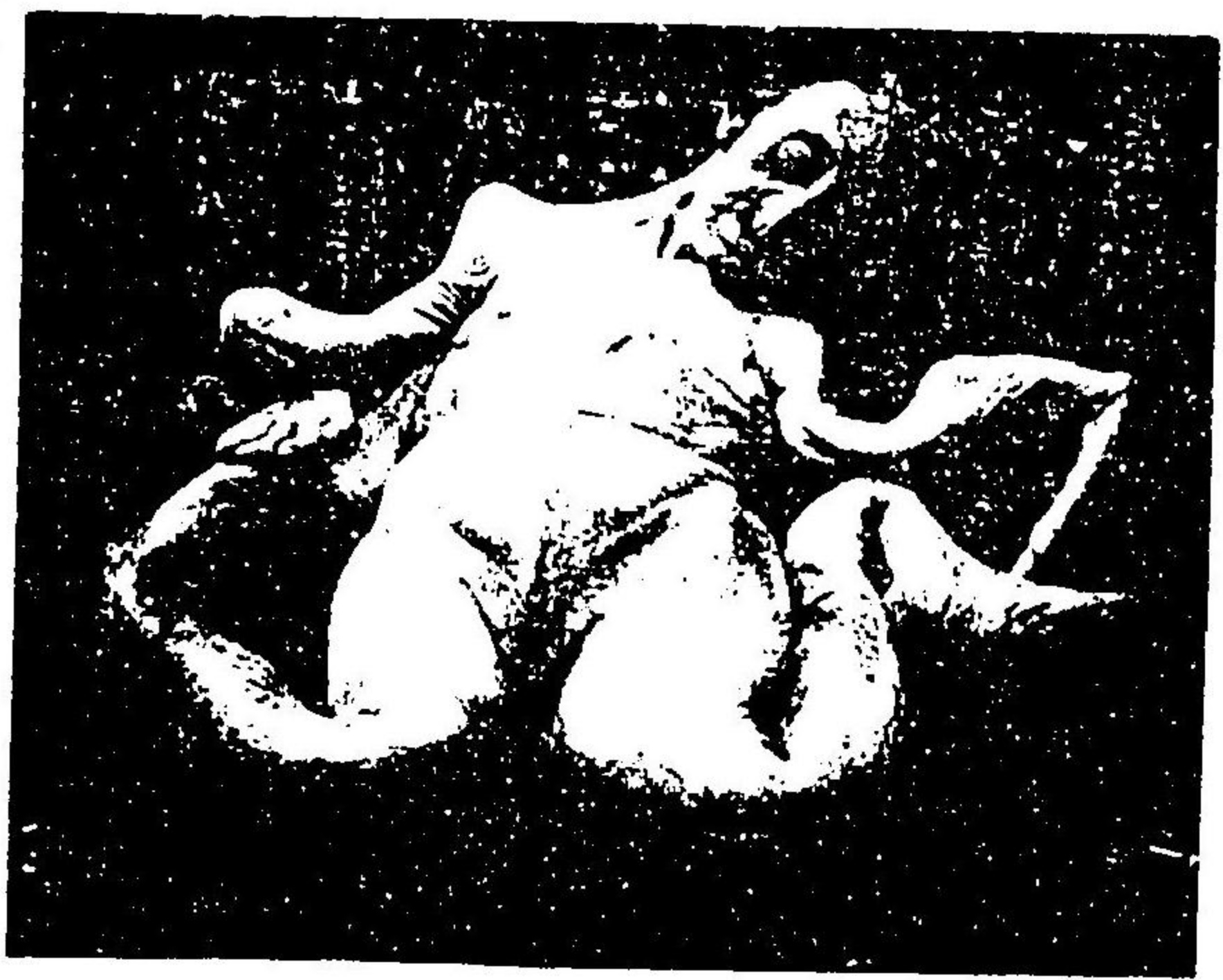
骨軟化病性狹窄骨盤を示す

### 第三 佝僂病性扁平骨盤

佝僂病は小兒期に來る疾病にして只さへ柔軟なる小兒の骨質は此の病の爲めに益々軟弱となり小兒は三歳乃至五歳に至るも歩行する事能わず而して身體上半部の重量は凡て骨盤部に加はるが故に薦骨岬は著しく前方に突出し従つて骨盤の直徑線は短縮し横徑延長し腸骨翼は扁平となり耻骨弓は著

しく廣まり兩下肢殊に大腿骨は彎曲するに至る

### 第四 骨軟化病性狭窄骨盤



高年度の軟骨化病に罹る婦人を示す

骨軟化病は大人に來る疾  
病にして骨質非常に柔軟  
なるが故に骨盤は軀幹  
と下肢の間に壓せられ周  
圍より中心に向て狭窄し  
兩髌臼及坐骨結節は相近  
接し薦骨岬は深く骨盤腔  
内に突出し無名線は著し  
き彎曲をなし耻骨弓は強

第七百六十六圖

第七百七十七圖



く狭少となり薦骨の下半部は強く前方に屈曲するに至る而して本症を患ふるときは身體諸關節に疼痛を發し遂に歩行困難となり妊娠中には病勢益々増悪するものなり然れ共此病は嘗て日本にありしを聞かず

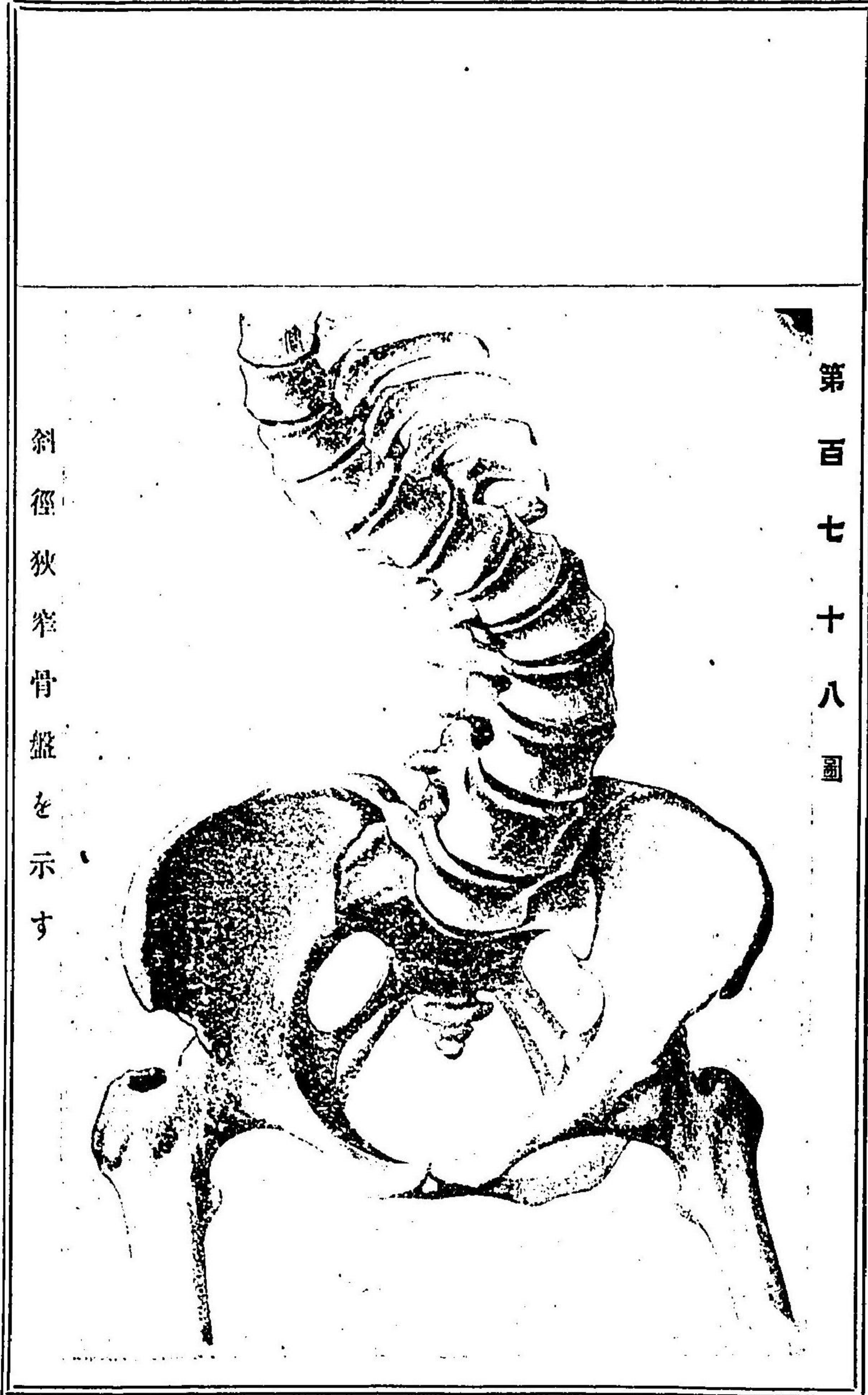
横徑狭窄骨盤を示す

### 第五 横徑狭窄

#### 骨盤

骨盤横徑線の短縮したるものにして薦腸關節は癒着し外検査上腰部は著しく狭く内診上兩坐骨棘は著しく近接して手指は左





斜徑狹窄骨盤を示す

右無名線に達し得る事あり

### 第六 斜徑狹窄骨盤

佝僂病其他の疾病により脊柱の側彎を來すか或は一足の跛なるもの等體重一方に偏するときは爲めに薦骨の側壓縮せられ其側の斜徑線短縮するに至る

### 第七 骨腫瘍性狹窄骨盤

骨盤内に骨腫と稱する瘤を生じ爲に骨盤内の狹隘となれるものを云ふものにして其腫瘤の大なるに従つて益狹窄の度を増すものとす

骨腫とは其名の如く骨組織よりなれる一種の瘤にして甚だ硬し

第 百 七 十 九 圖



骨腫瘍性狭窄骨盤を示す

狭窄骨盤の鑑定

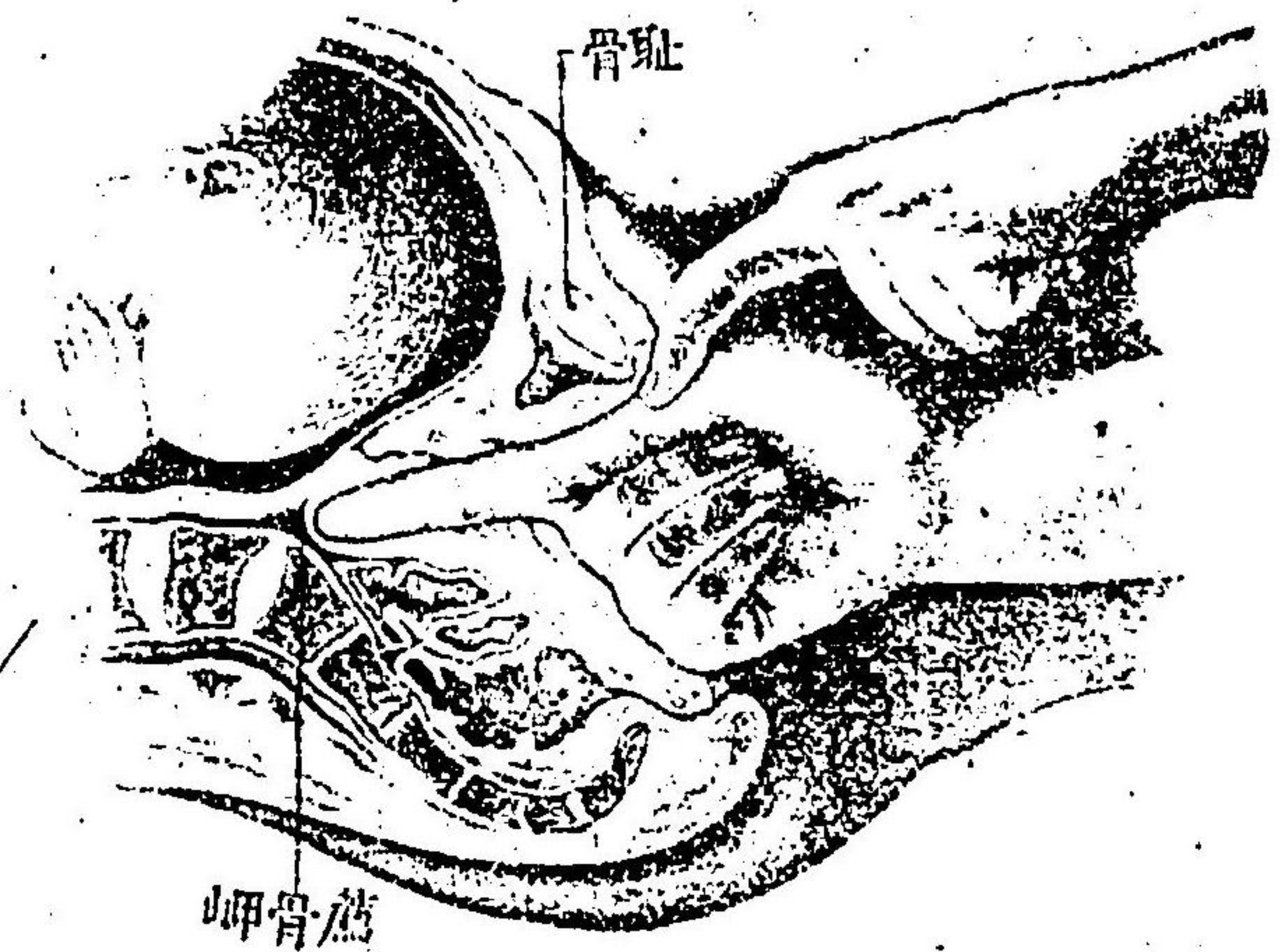
身體異常に矮少あるか嘗て佝僂病骨軟化病等にかゝりし事あるか脊柱或は下肢の彎曲あるか歩行蹣跚たるもの若しくは數回の分娩に於て胎兒の位置よかしりに拘はらず難産ありしものは狭窄骨盤たるの疑ひを生ずべく初妊婦にして妊娠末期に至るに拘らず兒頭骨盤入口に固定せざるか或は子宮底高く懸垂腹狀に突降するか若しくは分娩時に於て體位體向に異常かく陣痛強劇なるにも拘はらず兒頭骨盤内に進入せざるものは狭窄骨盤なりと想像するを得又た外検査に際し延ばせる拇指、小指が容易に兩腸骨前上棘に達し得るもの或は坐骨棘著しく近接するもの若しくは内診の時に示指は容易に薦骨岬に達するか或は兩坐骨結節の著しく近接せるもの若しくは指頭

の容易に、兩側無名線に達するものは確實に狭窄骨盤なる事を診断し得べし尙ほ其の詳細を知らんご欲せば骨盤計を以て骨盤の各徑線を測定するを要す

狭窄骨盤分娩の經過、  
軽度の狭窄骨盤にして陣痛強く胎兒の位置に異常なきときは分娩に時間を要する事多しご雖も著しき障害あ

くして分娩を遂げ得べく中等度の狭窄骨盤に在りても

第百八十八圖

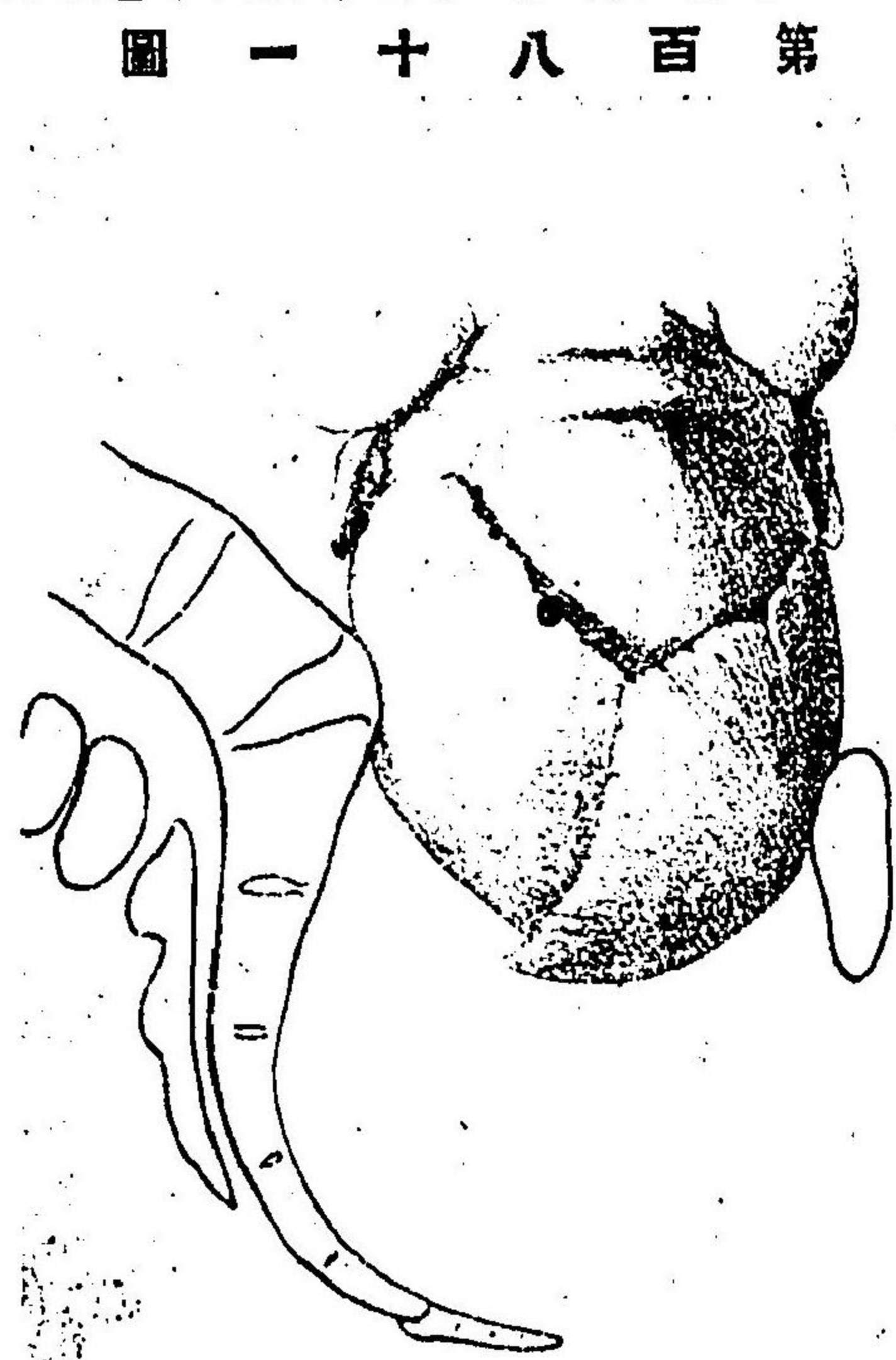


内診の際示指の尖端薦骨岬に達す

早産兒の如く兒體少なるときは分娩に障害なきか或は兒頭は著しく變形し頭蓋骨縁は著しく重積し大なる産瘤を生じて分娩すべし(後節前後顛頂骨位の條下参照)之に反して骨盤の狭窄高度なるときは兒の後頭骨盤内に進入する事能はずして顔面位、額位、横位、等の異常を招き陣痛は益々強劇となり遂に痙攣性陣痛を發し羊水は早期に漏出して胎盤の早期剝離、臍帶脱、上肢の脱出等を來し胎兒は死に至ること多く若しくは兒頭に甚だ大なる産瘤を生じ頭蓋骨の骨傷を起し母體に在つては軟部挫傷壓迫壞疽を來すべし而て虚弱なる婦人に在りては續發性陣痛微弱を發し陣痛甚だ強劇にして分娩長時に亘るものに在つては終に子宮破裂を來すべく極めて強度の狭窄骨盤に在ては到底自然分娩を遂ぐる事能はざるものあり

處置、狹窄骨盤の徴候を呈するものは既に妊娠中に醫師の診察を受けしむべし醫師は流産術を行ふか或は人工早産術に由

狹窄骨盤に於ける分娩の際兒頭骨縁強く重積する状態を示す



て胎兒を救ひ得べし分娩に際しても直に醫師を迎へ醫師の來着前は身體を安靜ならしめ努責を禁じ無用の内診を避け側臥せしめ可成胎胞を保存し兩便の通利

に注意すべし

### 過大なる骨盤

骨盤廣きに過ぎ産出力正規にして胎兒の位置體勢に異常なき時は分娩の經過短かく爲めに墜落産、臍帶の斷裂、高度の會陰破裂、膣破裂等を來し且つ子宮の翻轉を來すことあり其他胎兒は異常の體位體勢を執りやすく分娩反つて困難ある事あり産婆若し過大なる骨盤を有する産婦に接せば側臥の位置をこらしめ始めより腹壓を禁じ嚴重ある會陰保護法を行なひ若し胎兒の異常を來し分娩困難ある時は醫治を乞はざる可らず

### 高度の骨盤傾斜

過大なる骨盤 高度の骨盤傾斜

○骨盤傾斜ノ度強キモノ及ビ弱キモノノ處置如何

骨盤傾斜の甚だしき者は薦骨は著しく後方に突出し耻骨縫際は低くして産出力の方向は耻骨縫際に向ふが故に兒頭骨盤内に進入せんごするも耻骨縫際に支へられ後方の顛頂骨は深く進入して後顛頂骨位の如き體勢を取り大に分娩を困難ならしむるものごす此場合に於ては産婦をして強く股關節を屈し上體を前方に屈せしむるときは頭部は容易に骨盤内に進入し得べし

### 骨盤傾斜の弱きもの

骨盤傾斜の弱きものは前者に反して兒頭骨盤内に入るの際産出力の方向薦骨岬に向ふが故に後方の顛頂骨は薦骨岬に支へられ前方の顛頂骨深く進入し所謂前顛頂骨位の如き胎兒體勢

の異常を招くべし産婆は此際産婦の腰下に枕を挿入し傾斜の度を強めざる可らず

### 第九十節 産出力の異常

#### 陣痛微弱

陣痛微弱とは子宮の收縮力弱くして收縮時間短かく且つ非常に長き間歇ををこ爲めに分娩の遅延するものを云ふ其原因に二種あり

(一)分娩の初より陣痛微弱を來すもの之れに屬するは生來身體虛弱るか營養不良にして衰弱せるもの例之貧血症に罹れるもの重病の恢復期にあるもの子宮筋の發育不充分なるもの例之は子宮の畸形若年の初産婦子宮の位置の變化せるもの

○陣痛異常トハ如何  
○陣痛ノ微弱ハ如何ナ  
○陣痛ノ遲延ニシテ出產ノ要主ヲ記セヨ  
○陣痛微弱ハ母ニ向テ如何ナル分娩期ニ危險多キヤ又其危險症ハ何ナルヤ且其處置ヲ其取扱法ヲ記セ  
○陣痛微弱ノ原因及ビ其取扱法ノ原因處置

例之ば子宮脱懸垂腹に於けるが如し又俗に年子と唱ふる如く頻回分娩せる者の子宮壁は復舊の暇なく多くは弛緩しありて分娩の際陣痛微弱を起し易し又羊膜水腫復胎妊娠の如き子宮壁の異常に擴張しあるものも然り

(二)陣痛は初め正規なりしも後に微弱なるもの之れに屬するは産道の異常即ち狭窄骨盤子宮口の擴張し難きもの例之は子宮口に癭痕等あるか或は高年の初産婦の如きもの其他骨盤内の腫瘍たこへば子宮筋腫卵巣腫の如きもの或は膀胱及び直腸の充盈等是等は初め陣痛正規なるも胎児の先進を妨げ遂に陣痛微弱を起すに至る又胎児殊に先進部の大なる時若しくは胎児の位置異常あるとき例せば腦水腫の如き顔面位、額位、横位、等の如きは陣痛正規あるも分娩は進まず子宮筋は

洗腸排尿をなさずして自から陣痛微弱を招き醫師の手を煩はし洗腸の回数や頻は産婦が大にいやがりましたからどの申譯何と御手前味増に非ずや

遂に働き勞れ母體全身も疲勞し陣痛微弱のみならず遂には腹歴さへも充分に營み能はざるに至るべし

徴候、陣痛微弱なるときは外診上子宮は硬からざるか或は極めて僅かの時間のみ少しく硬固となるのみにして間歇時長く甚だしきに至りては産婦は疲れて睡眠を催す事さへあり従つて疼痛を感ずる事輕微なり

開口期に陣痛微弱を發せば母兒共に直接に害を蒙ることおしと雖も卵膜緊張せず子宮口の開大は遅延すべし而して早期に破水せるものに陣痛微弱を併發せば甚だ危険あり産出期に於ては兒頭は回轉することかく分娩遅延し壓迫作用の爲め産瘤は漸次増大し終に兒頭と骨盤との間に存する軟部分の壓迫壞疽を起すに至るべく胎児も死する事多し殊に危険なるは微菌

○開口期ニ於ケル陣痛微弱ノ處置  
○陣痛微弱ニシハ分娩困難ナルモノニハ如何ナル處置ヲ施スヤ

の侵入にして破水後已に二時間も娩出を終らざれば羊水は已に腐敗を始め體溫昇騰脈搏頻數等を來す事あり従つて幸ひに分娩を遂ぐるも産褥熱を起すの恐れあり後産期に陣痛微弱を發せば甚しき出血を來す(後産期出血の條下參照)

處置、身體虛弱あるものは妊娠中より牛乳其他の滋養物を攝らしめ分娩時の陣痛微弱を未發に防ぐの方法を講じ分娩時陣痛微弱を發するときは産婆は何れの期に拘はらず常に膀胱直腸を空虚ならしむること肝要にして開口期にありては産婦を先進部の存する側に臥せしめ若しくは時々臥位を變換せしむるか或は徐々に歩行せしむるときは陣痛を催進し得ることあり此期に於ては腹壓を禁じ忍耐して子宮口の開大を待つべし産出期に至れば胎兒の心音母體の體溫脈搏に注意し産瘤の増

大に意を注ぐべし而して常に胎兒先進部の存する側方に臥せしめ微溫の消毒液を以て陰洗滌を施し下腹に溫奄法を施すべし後産期に於ては間斷なく子宮底を摩擦し陣痛を催進するに勉め而て凡ての場合に赤酒、濃き茶、暖かき牛乳、等を與ふるときは能く陣痛を催進すべし産出期後産期にて二時間を経過するも分娩を終る能はざるときは必ず醫治を乞はざるべからず

### 過劇陣痛

過劇陣痛とは子宮の收縮力が産道抵抗に對して普通の場合よりも比較的強く従つて收縮時は長く間歇時の短かきものを云ひ多くは經産婦に來り身體強壯にして子宮筋肉の發育良きも

○陣痛強キトキハ如何ナル害アルヤ且ツ其處置ハ如何

の若しくは、神経質の婦人に來り精神感動に由つて起り分娩前  
 身體を強く勞働せるもの、早期の努責を營めるもの、或は度々の  
 内診に由つて子宮を刺戟せるなどの場合等に來る而して一般  
 過劇陣痛を發するときは、子宮の收縮強劇にして陣痛間歇時短  
 く産婦は劇しき疼痛を訴へ顔面潮紅齒を喰ひしほり或は高く  
 叫聲を放ち不隨意に努責し大小便の失禁放屁等も自ら慎む能  
 わず此際胎兒小なるか産道の寛濶なるものにおいて甚だ短  
 時間に分娩を終り餘り疼痛を感ぜざることあり例せば立ちなが  
 ら分娩し或は厠の中にて産み落したるもの等は此種のものに  
 多し此の如き時は之れを墜落産或は急産と稱す  
 過劇陣痛に由つて蒙るべき害は甚だしき疼痛、早期の破水、子  
 宮口の裂傷、會陰の破裂、胎盤の異常剝離、子宮脱、臍脱、子

宮翻轉、後産期出血、等にして甚だしきに至りては人事不省  
 に陥る事あり胎兒にありては劇しき子宮收縮の爲めに胎盤  
 血行の障害を來し假死に陥り易く其他墜落の爲め臍帶の断裂  
 頭部の損傷を來す事あり  
 處置 前回の分娩に於て度々急速の分娩を遂げたるが如きも  
 のにありては妊娠中より前以て少しにても腹痛(陣痛)起らば  
 必ず臥床すべき事を命じ置くべし分娩已に始まらば努責を禁  
 じ側臥位を取らしめ注意して會陰保護をなし兒頭が急速に陰  
 裂を通過せんこせば強く之れを支持すべし後産期及び分娩後  
 にありては反つて陣痛微弱を起し出血するの恐れあるが故に  
 注意すべし



痙攣性陣痛

○痙攣性陣痛ノ原因徴候及ビ處置  
○何ナラハ痙攣性陣痛ト云フヤ

陣痛甚だ強劇にして發作時長く間歇時は極めて短縮せるのみならず普通陣痛の如く子宮の全く弛緩せざる場合を云ふ若し全く間歇時を缺き子宮は持續して收縮の状態に止まるべきは之れを子宮の強直カタレックスと云ふ此際胎兒は常に同一位置に固定せられ分娩は全く停止するに至るべし  
産道の抵抗大なれば陣痛は益々強劇とあること通常なるが故に硬軟産道に異常あるか或は兒頭大なるか若しくは胎兒の位置に異常あるときは陣痛は多くは強劇となり次で痙攣性とあるべし例之ば狹窄骨盤、骨盤内の腫瘍、子宮口の強硬なるもの卵膜の強靱なるもの横位、腦水腫、癒着せる雙胎、等に来り其他粗暴なるか或は頻回の内診、羊水の早期漏出、麥角の

如き子宮收縮を促す藥品の内服及び度々高熱の消毒液を以て洗滌したる時等に來る

觸診するに子宮は硬くして石の如く産婦は下腹より下肢に放散する劇痛を訴へ尿閉便秘を來し嘔氣を催し往々發熱し時としては全身の痙攣さへも惹き起し胎兒體部は子宮壁より壓迫せられ胎盤血行不良の爲め胎兒は多く死に至り分娩は全く中絶し遂には子宮の破裂を來し後産期に至れば胎盤の産出遲延し甚だしき出血を來すことあり

處置、精神身體を安靜からしめ腹壓を止め内診を中止し速かに醫師の來診を乞ひ其來着前原因の除き得べきものを去り下腹の濕布巻法を試むべし

○分娩第二期ニ於テ痙攣性陣痛ヲ發シタルトキノ處置

### 腹壓の異常

腹壓は子宮口充分に開大し已に破水したる後に於ては胎兒産道に異常なき限り分娩に向て非常に效力あるものあり故に産婆は能く之れを利用することを忘るべからず然れども種々の原因により腹壓の異常を來すことあり

早く分娩を終らしめんとて早期に努責せしめて反て経過を長からしむ

(一) 早期腹壓、即ち開口期に於ける努責は害ありて益あり然れ共身體薄弱神經質の婦人若しくは早期破水の時に於ては屢々早期に努責を營む事あり然るときは早く産婦の疲勞を來し娩出期に至て効力ある腹壓の不全を來すに至るべし又早期腹壓の爲めに子宮頸及び穹窿前壁の延長若しくは子宮脱腔脱を來すことあるべく或は胎兒位置の變化を來すことあり

(二) 腹壓不全、神經質の婦人に在りては胎兒産出時に於け

る疼痛を恐るゝにより自ら腹壓を抑制することあり其他懸垂腹腹壁の弛緩せる者腹腔内に腫瘤ある者膀胱直腸の充盈せる者重き呼吸器疾患ある者に來り身體疲勞せるものにおいて陣痛微弱と共に來るべし

(三) 過劇の腹壓、胎兒が會陰を通過するの際は強劇の腹壓不隨意に起るものあり其他陣痛過激ある際は腹壓も常に強劇となり時として之が爲め頸部に氣腫を發生することあり  
處置、早期の腹壓及び過劇の腹壓は産婦を側臥せしめ且つ努責の有害無益なるを説き聞かし腹壓不全あるときは赤酒等の興奮藥牛乳卵等の滋養物を與へ膀胱直腸を空虚ならしめ適當の腹帶を施すべし

- 不順産ノ種類及ビ産ノ徴候
- 胎兒異常ナル原因ハ如何
- 異常頭位ノ状態及ビ其處置ノ大略
- 頭産ニ於ケル障害ハ如何

第九十一節 胎兒の異常

異状の體勢を取れる頭位

前頭位（一名前顛位又た顛頂位ともいふ）

體向に由りて前頭位を第一、第二に區別す、第一前頭位とは第一前頭位外診上の状態を示す × 臍部

兒背母體の左側に向ひ且つ少しく後方に向へるものを云ひ即ち頭蓋位第一體向の第二分類にして又第四頭蓋位の稱あり第二前頭位とは兒背母

圖二十八百第



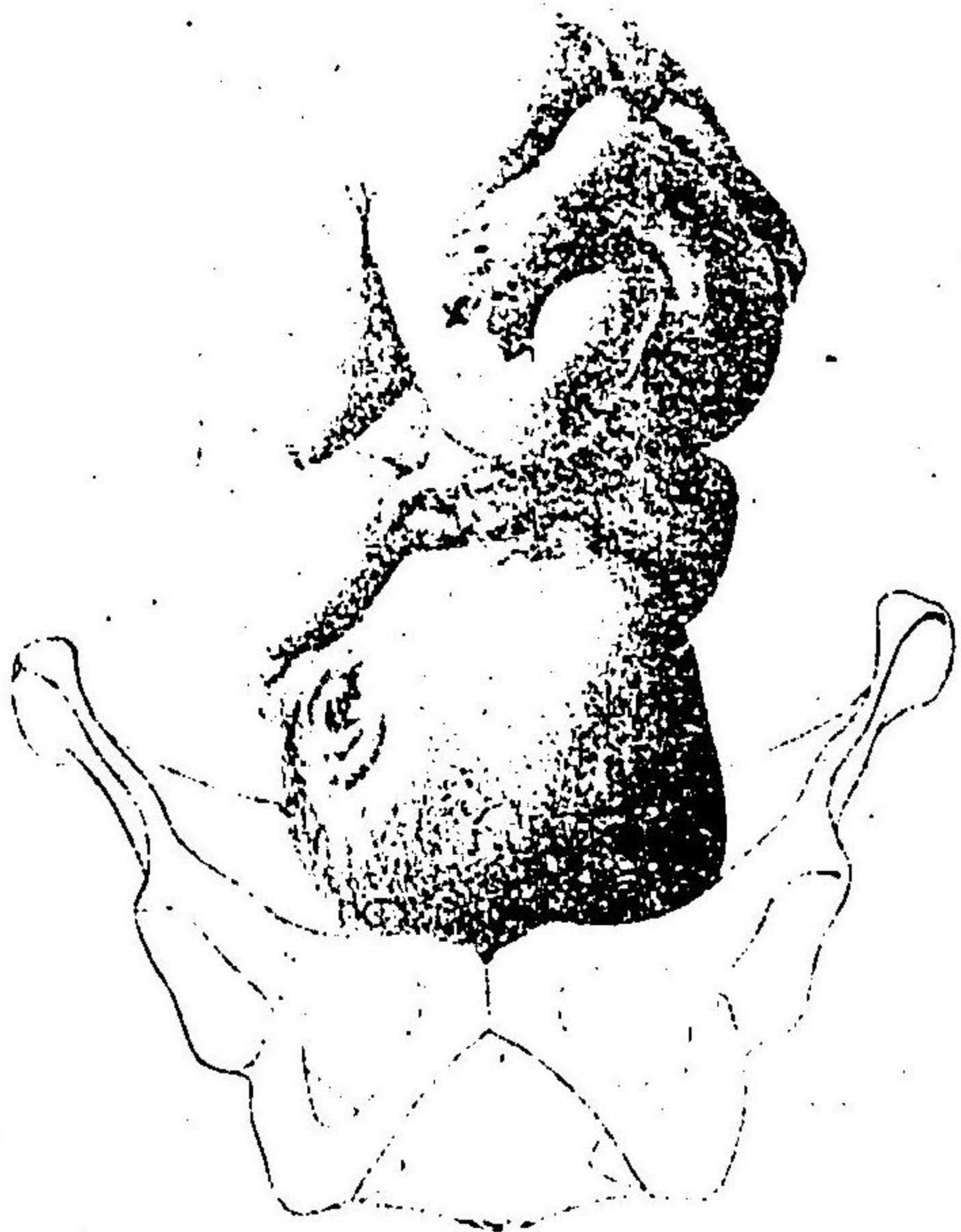
- 前頭位ト後頭位ノ分上處見ノ異ナル點ヲ舉ゲヨ

體の右側に向ひ且つ少しく後方に向へるを云ひ頭蓋位第二體向の第二分類にして第三頭蓋位の稱あり而して此前頭位にあ

りては兒頭は多くは輕度の伸展の體勢を取るが故に後頭位に比すれば大

ある頭圍を以て骨盤内を通過せざるべからず従つて分娩は困難となり會陰破裂を來し易し

圖三十八百第



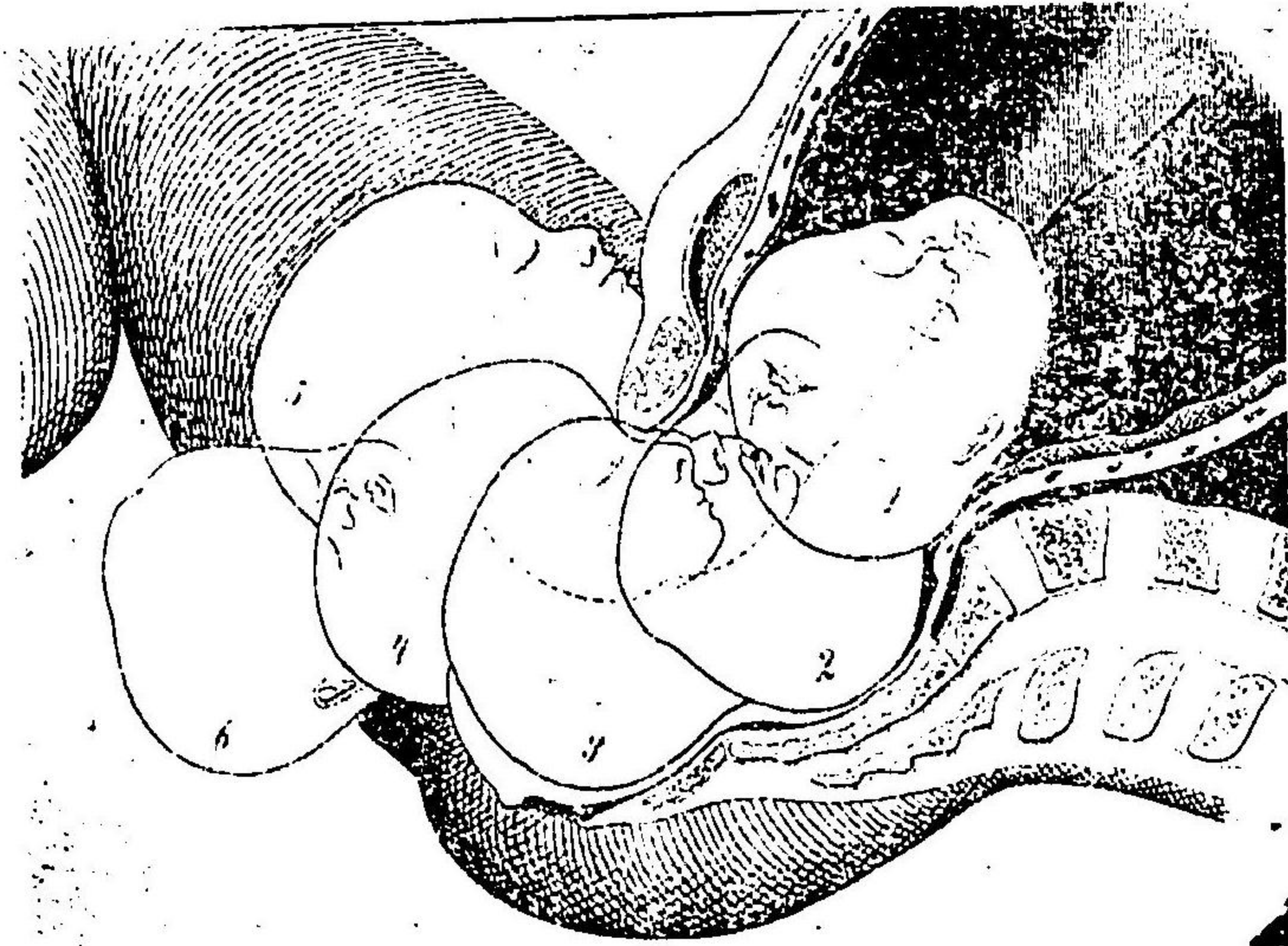
前頭位は子宮位置の異常例之は左傾、右傾、懸垂腹、等或は

前頭位の原因

前頭位

第二前頭位は第一前頭位より多し

第 百 八 十 四 圖



第二前頭位の分娩機轉を示す

- 矢は産出力の方向
- 點線は骨盤誘導線の方
- 1 兒頭骨盤内に進入せん
- 2 第一回轉を營めるもの
- 3 第二回轉を營めるもの
- 4 5 第三回轉を營めるもの
- 6 第四回轉(兒頭の外回轉)を營めるもの

輕度の骨盤狹窄  
 兒頭の少しく大  
 ある場合に來り  
 易く之に反して  
 兒頭少あるか産  
 道廣濶ある等兒  
 の移動し易きも  
 のにも來るべし  
**外診、第一前頭**  
 位は第一後頭位  
 に第二前頭位は  
 第二後頭位に於

○前頭位ノ分娩經過如何  
 ○頭頂位ノ分娩經過如何

第 百 八 十 五 圖



けること一あり

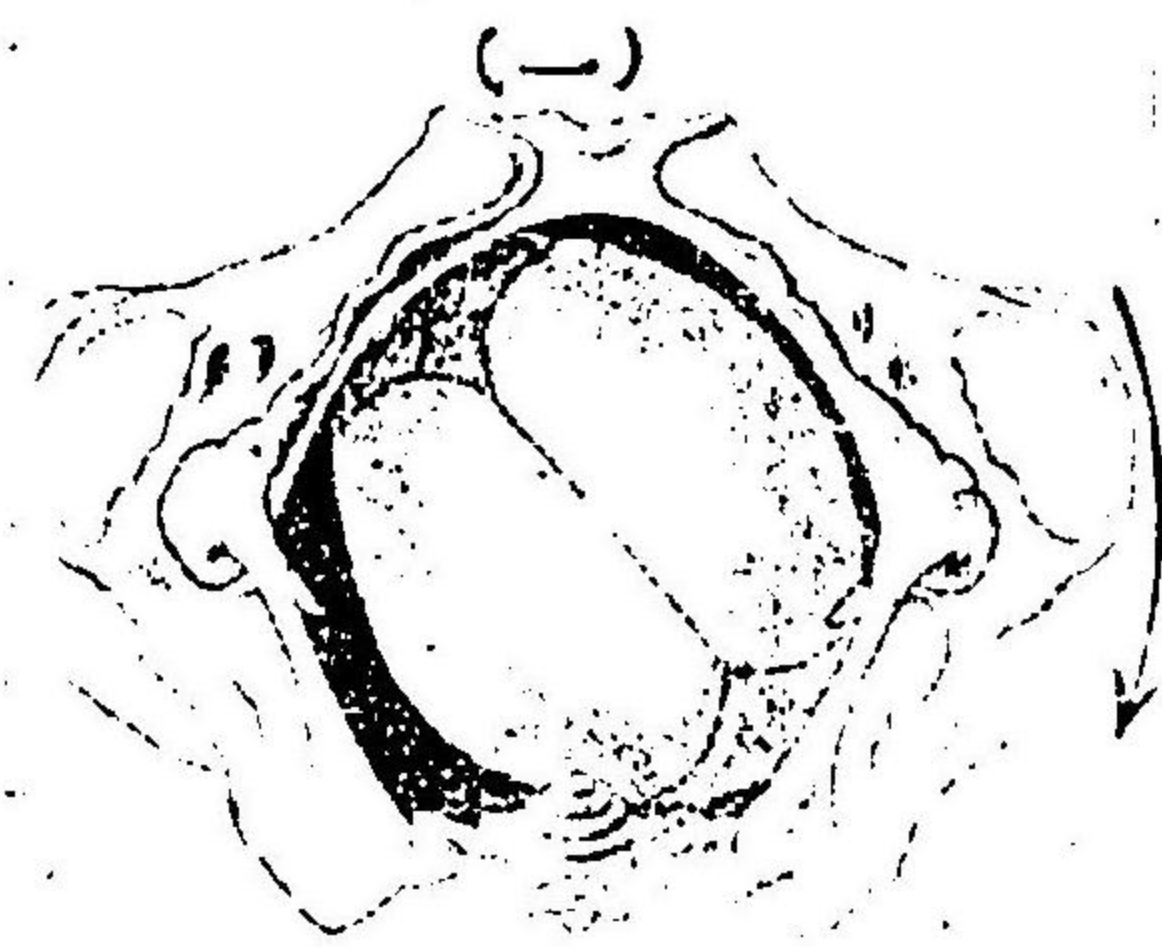
分娩機轉、初め兒頭の矢狀縫合は骨盤入口の横經線或は斜  
 徑線(第

一前頭位  
 に在ては  
 第二斜徑  
 線第二前  
 頭位に在  
 ては第一  
 斜徑線)  
 に一致し  
 て骨盤内

に進入し第一回轉に由りて大顛門の部尤も下り第二回轉に由りて第一前頭位に在りては右より左に第二前頭位に在りては左より右に回轉して前頭部は耻骨弓に近づき骨盤出口部に至れば兒頭の矢狀縫合は骨盤出口の直徑線と殆んど一致するに至る而して第一前頭位にありては右の前頭部第二前頭位に在りては左の前頭部先づ陰裂間に現はれ次で前頭結節部は耻骨弓下に止まり後頭は會陰より産出し以て第三回轉を終る次で兒頭は第三回轉と反對の横軸回轉を營み顔面全く産出するに至る此の如くして兒頭全く産出せば第一前頭位にありては顔面は母の右大腿の内面に向ひ第二前頭位にありては左側に向ふ其他肩胛の産出等全く後頭位に於けるが如し

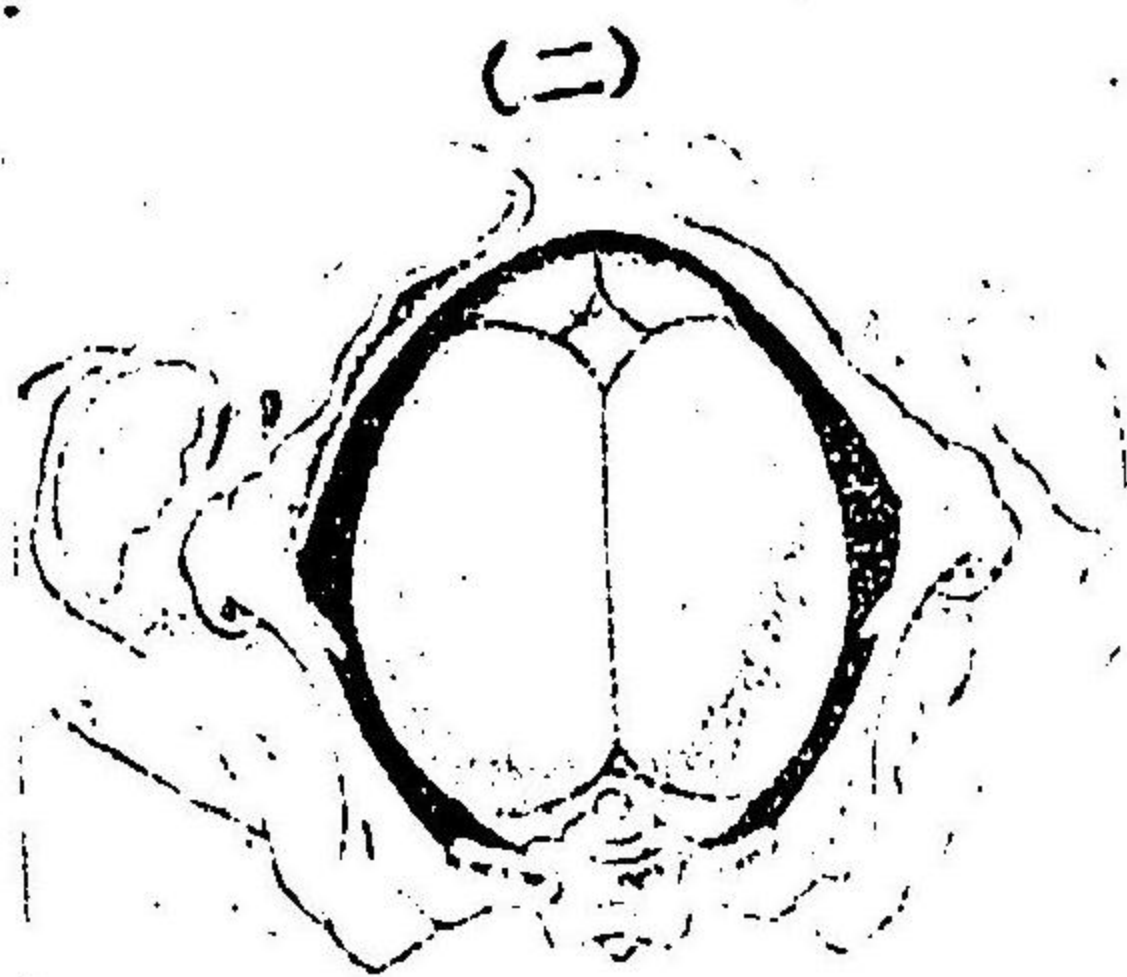
産瘤は第一前頭位に於ては右の前頭部に第二前頭位に在ては

圖六十八百第



りあに部廣盤骨は部進先

圖六十八百第



りあに口出盤骨は部進先

左の前頭部に生ず此位置にて生れたる兒頭は後頭及び前頭壓せられ直徑短縮し球形を呈す而して前頭位は分娩の經過中屢々後頭位に變ずることあり殊に産婆の處置適當なれば益々此良結果を得ること多し

内診、内診上小顛門を觸るゝこゝ一般に困難なり而して第一前頭位に於ける内診上の状態を示す 同

前頭位に限らず凡て頭背の前方に向へる頭位に於ては骨盤腔に於ては骨盤の直徑は常に第一斜徑の斜徑に一致す即ち第一斜徑線と云ふが第二斜徑線と云ふが如し

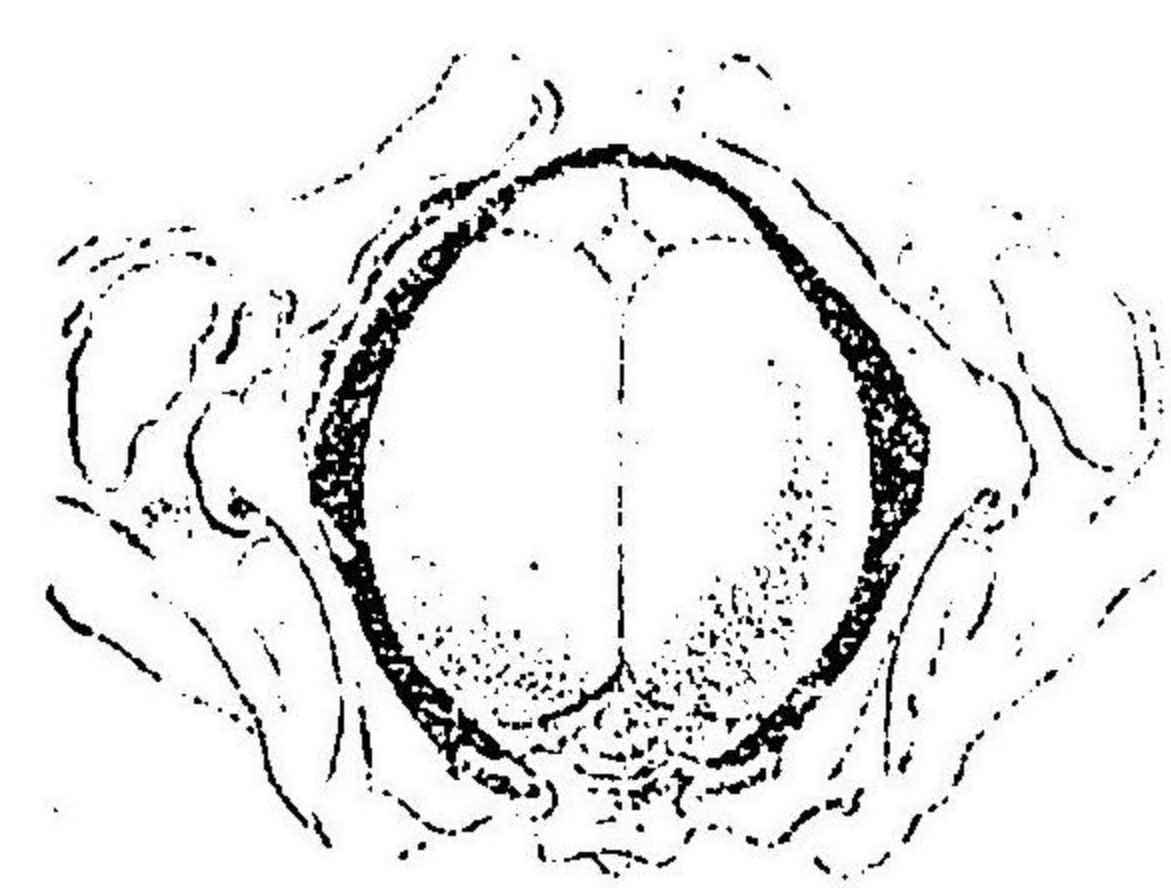
前頭位に在りては大顛門は右前方にありて最も下降し顔面は右の腸耻結節部に向ひ小顛門は左後方にありて後頭は左の薦

第二前頭位に於ける内診上の状態を示す



先に進ぶ骨盤各部にあり

第百八十七圖 (二)



先に進ぶ骨盤各部にあり

腸關節に向ひ矢状縫合は第二斜徑線に一致す第二前頭位に在ては小顛門は右後方にして後頭は右薦腸關節に向ひ大顛門は左前方にして最下降し顔面は左腸耻結節に向ひ矢状縫合は第

一斜徑線に一致す

處置、分娩の初期に於ては先づ兒の後頭の存する方を下ににして臥せしめ後頭位に變せん事を勉むべし然れ共後頭前方に回轉する模様なくして兒頭は前頭位の儘産出を始むるときは大顛門の存する方を下にして臥せしめ前頭の先進を助くべし而して兒頭會陰通過の際は頭圍(兒頭の前後徑を直徑させる頭圍)後頭位に比し大なるのみならず左右の顛頂結節を連ねたる兒頭の大横徑は會陰を過度に延長すべきが故に嚴重なる會陰保護法を行はざれば大なる破裂を來し易し

顔面位

顔面位とは顔面の先進する位置にして前頭位と同じく子宮の

顔面位の原因

顔面位

○顔面位へ如何ナル場  
合ニ生ズルヤ  
○面位ノ原因徴候ハ如  
何  
○面位ノ種類及ビ其處  
置ハ如何

右傾、左傾、狹窄骨盤、兒の後頭の強く發育せるもの、兒の頸部の腫瘍、大なる兒頭、或は之れに反して兒頭の小さるもの

第二顔面位の外診上の状態を示す

×臍部○心音聴取部

第 百 八 十 八 圖



○顔面位ノ第一體向ノ  
徴候ヲ記セ

の、骨盤の廣濶あるもの等に來り胎兒は頸を伸ばし頤部は胸を遠ざかり後頭は背部に接し極度の伸展の體勢を取り骨盤内に進入す之を區別して第一顔面位第二顔面位の二を云す第一顔面位とは兒背及び前頭部母體の左側に在る者を云ひ第二顔面位とは兒背及び前頭部母體の右側に在る者を云ふ而して頤部常に前方に向ひ兒背第二分類をこるこ普通にて頤部後方に向ひ前方に回轉せざるものは決して自然分娩を遂ぐるこ不能はず

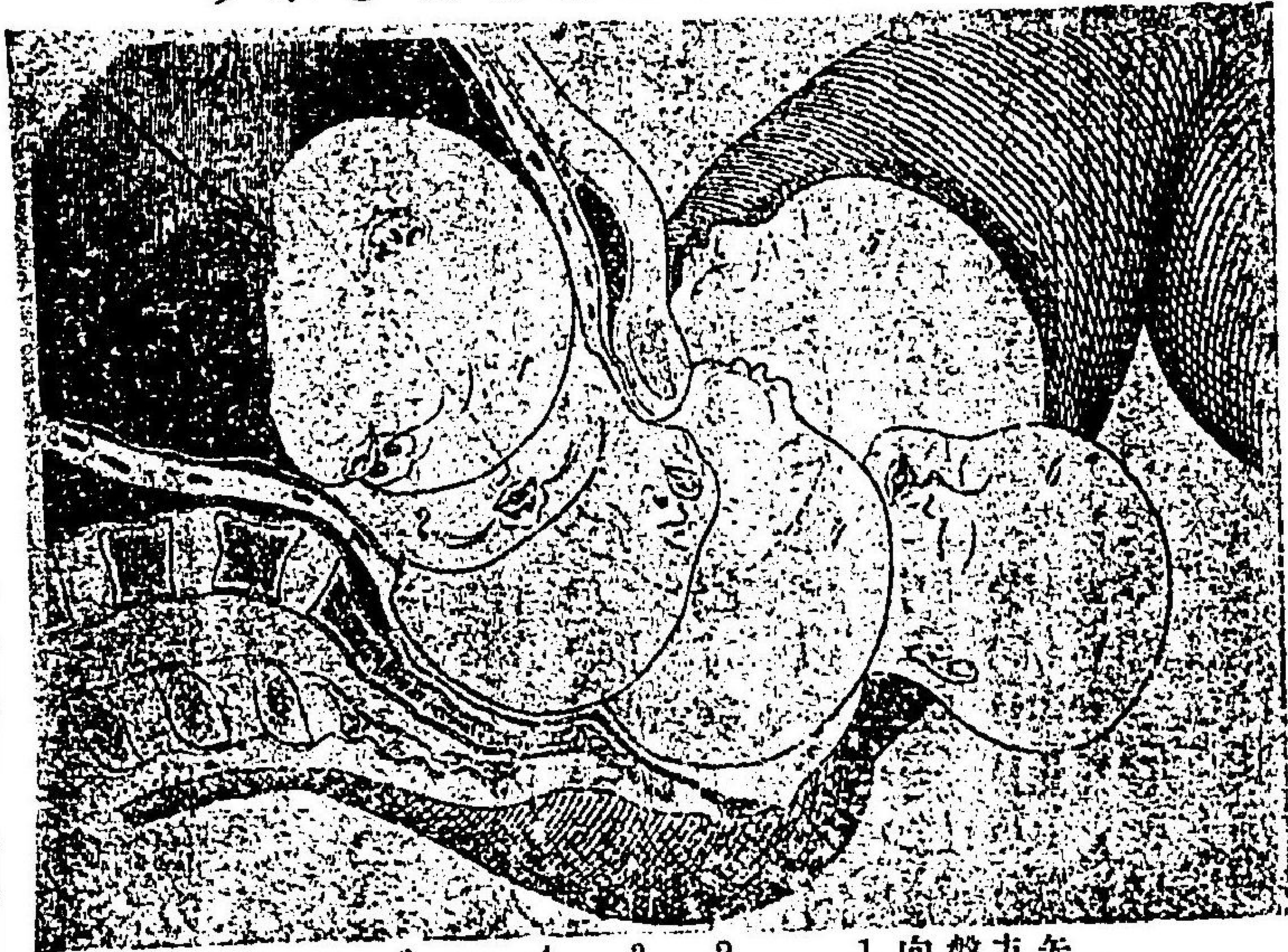
○顔面位ノ外検査ノ所  
見ヲ記セ

外診、第一顔面位に於ては胸部は廣き面として母體の右側に於て觸れ臀部は子宮底の稍々左側に小部分殊に下肢は臀部に沿ふて子宮底の中央或は稍々右側に位いし耻骨縫際上少しく左側に於て著しく突隆せる兒の後頭を觸知し心音は臍の右下

顔面線とは前頭縫  
合より鼻背を越へ  
て頤部の中央に至  
るを云ふ

方に於て聴取す  
第二顔面位に於ては前者と反對にして臀部は子宮底の右側小  
部分は子宮底の中央或は左側胸部は母體の左側に於て觸知し  
心音は臍の稍々左下方に於て聴き兒の後頭は耻骨縫際上の少  
しく右側に於て觸知すべし即ち顔面位にありては兒の軀幹は  
全く斜ある位置を取り且つ兒の胸部は母體腹壁に近き故に胸  
部の存する側に於て心音を聴取し得る事特有あり  
分娩機轉、骨盤入口部に於ては第一顔面位に在りては顔面  
線は横徑線若くは第二斜徑線に一致し第一回轉に由りて兒頭は  
益々伸展し頤部最も下り骨盤内に進入し第二回轉に由りて頤  
部は右より前方に回轉し前頭は後方に回轉す骨盤出口に至れ  
ば顔面線は骨盤出口の直徑線と殆ど一致するに至る而して右

第 一 百 八 十 九 圖  
第一顔面位の分娩機轉を示す



矢は産出力の  
方向點線は骨  
盤誘導線の方  
向  
1 先進部骨盤  
入口上にな  
り  
2 第一回轉を  
營めるもの  
3 第二回轉を  
營めるもの  
4 5 第三回轉  
を營めるもの  
6 兒頭外回轉  
(第四回轉)  
を示せるもの  
口角及右下顎  
部は耻骨弓下  
に現はれ頤部  
は耻骨弓下に  
止まり始めに  
顔面次に前頭  
顛頂後頭等順  
次會陰より産  
出す肩胛は初  
め顔面線の取  
りたる徑線と  
交叉する徑線



に一致して骨盤腔内に進入し其後の産出状態は後頭位に於けるごとく、等しく兒頭産出せば顔面は母體の右大腿に向ひ産瘤は顔面の右側に生ず。

第二顔面位に在りては第一顔面位と左右相反し顔面線は横徑或は第一斜徑線に一致し骨盤腔内に入り次で頤部は前方に回轉し左口角及左下顎部先づ耻骨弓下に現はれ初め顔面次で前頭顱頂後頭は會陰より産出す次で肩胛の横徑は顔面線の取りたる徑線と交叉する徑線を以て骨盤内に入り兒頭娩出せば兒の顔面は母體の左大腿に向ひ産瘤は顔面の左側に生ず。

顔面位に於て産出したる兒は顔面短縮し頭部は後方に壓展せられ恰も烏帽子を附けたる如き形を呈し甚だ醜し而して此位置に於て産道を通ずるときは其頭圍は大なるを以て分娩は

第百九十九圖



困難にして時間を費やし加之前頭位に於けるごとく兒頭の大横徑を以て會陰を壓排するが故に會陰破裂を來し易く且つ伸展せる頸部は産道の壓迫を被り爲めに腦内の血液循環不良と

大横徑を以て會陰を壓排するが故に會陰破裂を來し易く且つ伸展せる頸部は産道の壓迫を被り爲めに腦内の血液循環不良と

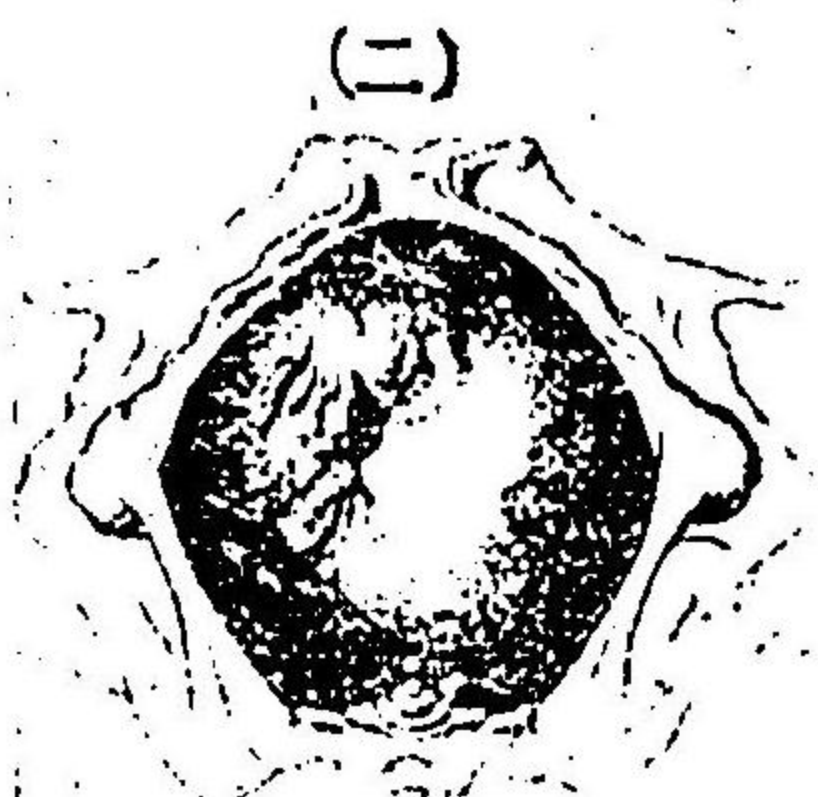
顔面位に於ける児の死亡するもの多き理由  
 時としては骨盤出口に至るも第二回轉を營まず顔面線は横徑に位置する事あり然る時は到底自然分娩する事なし

かり血液鬱滞し児の死亡を來す事多く百人中凡そ八人の死亡數を見るに至る若し顔面位に於て頤部後方に止まり前方に回轉せざるときは到底自然分娩を遂ぐる事能はざるものかり何とあれば児の頭部と胸部と相重りて其儘娩出するが如きは普通の胎兒普通の骨盤の大きにては決して出來得べからざることにして唯だ胎兒の極めて小あるか死胎兒あるか骨盤の異常に大なる場合にのみ産出する事あるべし

内診、顔面は平らかあるを以て分娩の初めに於て未だ高位にあるときは後頭位に於けるが如く骨盤内に突隆せる先進部を觸知すること能はず唯だ平らかにして所々に凸凹不平の面を觸知するのみ而して顔面に骨盤腔内に入れば常に眼窩縁、鼻背、口を觸れ頤門縫合等を觸る、事少なし加之産瘤高度に

○顔面位ト尾位トテ内診ニ由テ鑑別セヨ  
 肛門内に手指を挿入する時は指に胎糞を附着す

圖一十九百第



りあに部廣盤骨部進先

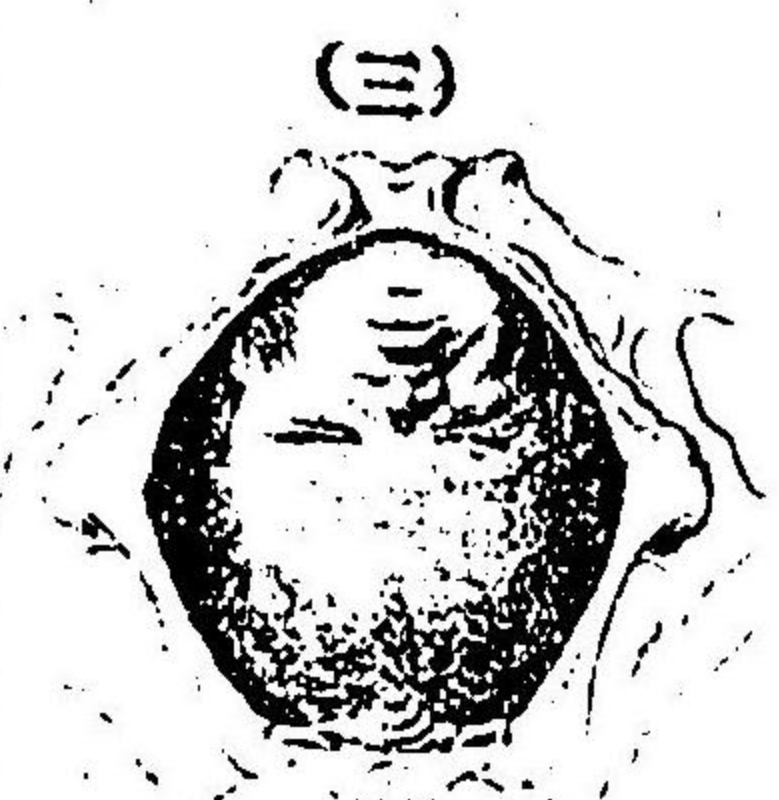
圖一十九百第



りあに上口入盤骨は部進先

第一顔面位に於ける内診上の状態を示す

圖一十九百第



りあに口出盤骨は部進先

發生するときは以上の各部を定むること甚だ困難にして往々口を肛門と誤り鼻背を陰部と誤る事あり即ち臀位と誤り易

運動はよく肛門の括約筋はよく運動はよく突起を有するを以て區別し得、内診上第一顔面位に於ては顔面線は第二

斜經線に一致し頤部は右前方にあり眼窩及前頭は左後方にあり第二顔面位は之れに反す  
 處置、分娩の第一期にて兒頭未だ骨盤内に固定せず胎胞尙ほ存在するものに在りては其破裂を來さざる様努責を禁じ度々の内診を避け母體を後頭の存する側方に臥せしめ後頭位に變ずる様勉むべし然れ共斯くして後頭位に變ぜしむる能はざるこきは一時も早く産科醫を招くべし其來着前兒頭已に骨盤内に入り固定するこきは頤部の存する側方に臥せしめ其回轉を助くべし而して勉めて安靜を守らしめ努責を禁じ羊水の漏出上肢臍帶等の脱出を防ぐに勉め専ら胎兒心音に注意すべし兒頭産出の際は嚴重の會陰保護法をなし兒頭産出後の處置は後頭位分娩の處置に於けるが如し

額位(一名前額位)

頭位中分娩の最も困難なるは額位にして顔面位之れに次ぎ後頭位は最も易く前頭位は後頭位と顔面位との中間に位す

○額位ハ何故ニ分娩困難ナルヤ

額位の原因

額位とは前額の先進するものを云ひ顔面位の初期に在ては往々此位置を取る事あれども分娩の進行と共に多くは顔面位又は前頭位後頭位等に變ずるを以て全く此位置にて分娩を遂ぐるは極めて稀れなり而して額位に於ける胎兒は顔面位に比して伸展は軽度なれ共産道通過の際は顔面位より一層大なる頭圍を以てするが故に頭位中分娩最も困難にして多くは初めより醫治を要すべし  
 額位の生ずる原因は前頭位顔面位に於けると同一あり  
 外診、顔面位に於けると殆んど異なる處をみし只だ軀幹の斜ある事顔面位の如く甚だしからざるに耻骨縫際に後頭を觸るゝ事著しからざるこの差あり

圖二十九百第



第二顔位の外診上の状態を示す

て顔面の後方に向ふものは顔面位に於けると等しく殆んど自然分娩を遂ぐる事能はざるものなり先づ兒頭の前頭縫合は骨盤入口の横徑線或は斜徑線に一致して骨盤内に進入し次で顔

分娩機轉 他の頭位と等しく額位を分ちて第一及第二額位とす第一額位は兒背母體の左側に向へるを云ひ第二額位は此に反す而して兩者とも額部は常に先進し顔面は前方に回轉し娩出を終るものにし

圖三十九百第



面は前方に回轉し後頭は後方に回り骨盤出口に至れば前頭縫合は骨盤

出口の直徑線と殆んど一致し前額は先づ耻骨弓下に現れ上顎或は鼻根部耻骨弓下に止まり

顛頂部後頭部は會陰より産出し次で口及び頤部は耻骨弓下より産出す而して産瘤は前額部に生じ肩胛の産出は後頭位又は前頭位と異なる處なし此位置にて分娩したる小兒の頭部は額部著しく延長膨隆す

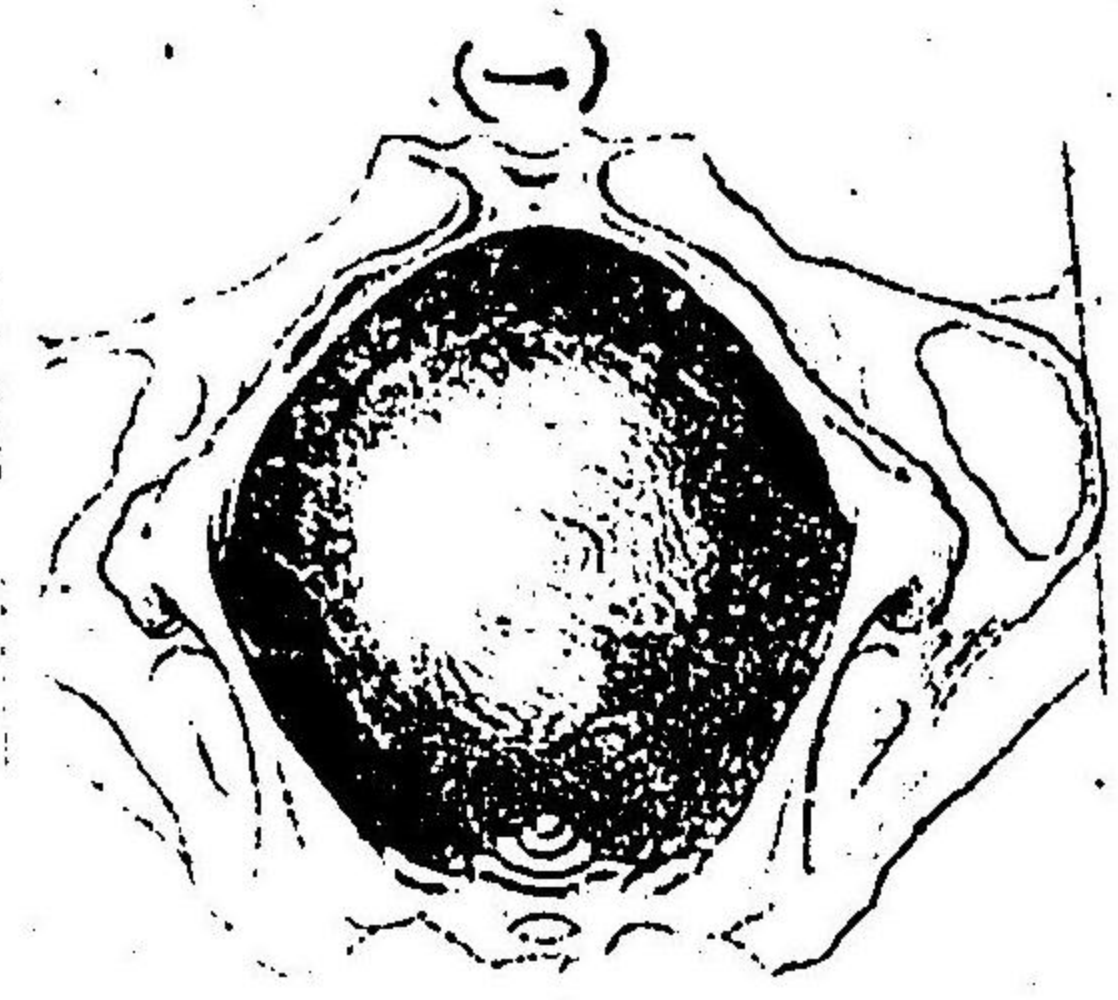
○額位ト顔面位ト内診上與ナル點ヲ記セヨ

内診、内診するに骨盤入口の中央に前頭縫合の横徑線又は

第一第二額位に於ける内診上の状態を示す (第一額位)

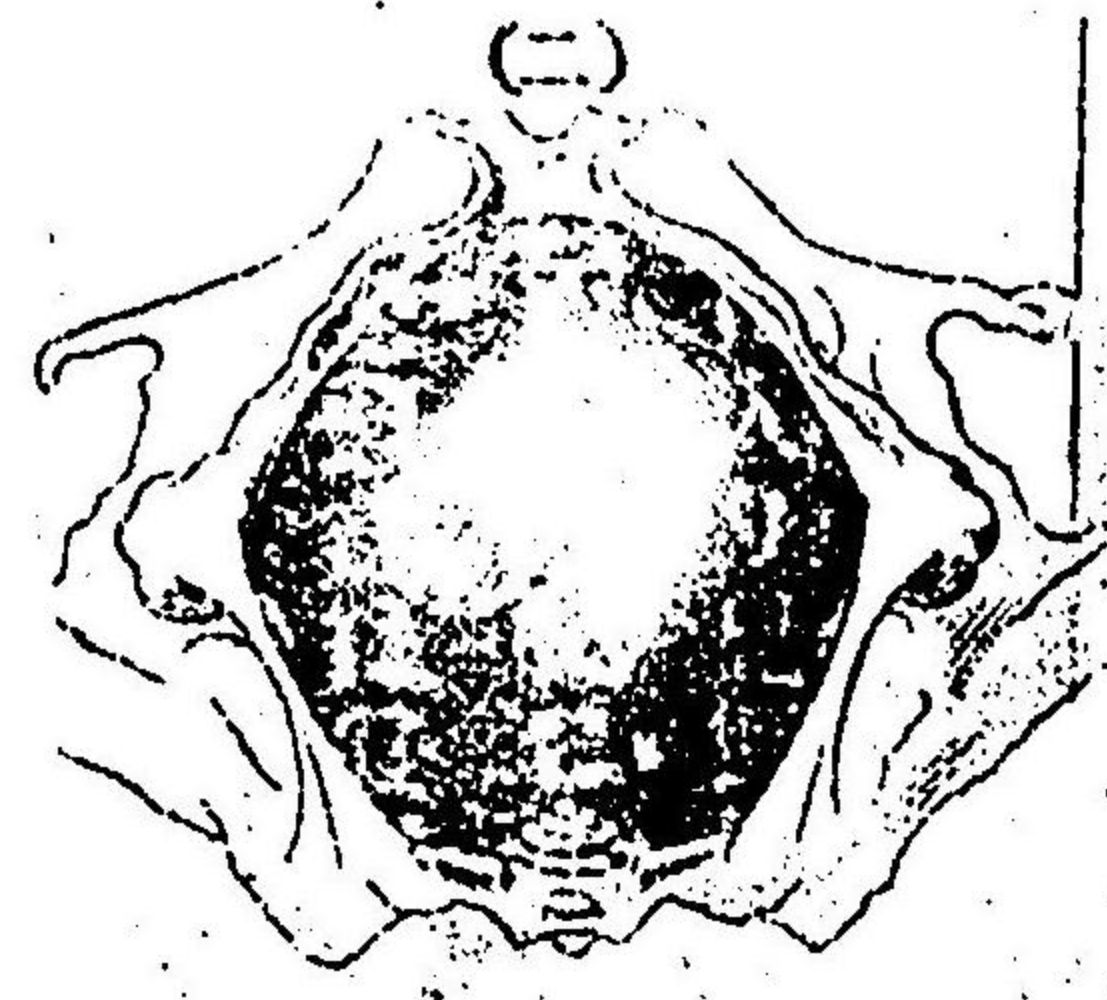
同 (第二額位)

圖四十九百第



りあに部廣盤骨は部進先

圖四十九百第



りあに部廣盤骨は部進先

斜徑線に一致せるを認め其一側に大顛門他側に眼及び鼻背を觸れ甚だ顔面位に類似す然れ共内診の際頤部、口部を觸るゝときは顔面位にして額位にありては大顛門前額前頭縫合眼窩縁鼻背を觸るゝのみあり而して凡て顔面位額位の内診に於ては顔面殊に眼部を損傷せざる様極めて注意すべし

處置、産婆額位あるを知らば直ちに産科醫を迎へ其來着前未だ破水せざるものに在ては成るべく永く胎胞を保存するに勉め内診を止め努責を禁じ後頭の存する側方に臥せしめ後頭位に變ずるに勉むべし兒頭已に固定せる後に於ては頤部の存する側方に臥せしめ顔面位に變ぜしむるを要し破水後なる時は産婦を極めて安靜に保ち羊水の漏出を防ぐべし而して此位置に於ける分娩は常に非常に困難あるが故に産婆は初めより醫

師に托する事を忘るべからず醫師の來着前先進部既に排臨するに至らば殊に注意して會陰保護法を行ふべし

頭蓋位深在横位(一名頭蓋位底在横位)

○頭蓋ノ横在産ハ如何ナル經過ヲトルヤ  
頭蓋位深在横位の原因

頭蓋位にして兒頭が骨盤狹部に至るも第二回轉を營まず矢狀縫合は依然骨盤の横徑に位し大小顛門は同じ高さにある事あり然る時は之れを頭蓋位深在横位と云ふ斯の如き異常は兒頭小なるか骨盤の大なるごきに來り兒頭が第二回轉を營まざる限りは娩出は非常に困難なるべしよし又其儘娩出を遂ぐるこあるも會陰の破裂は到底免るべからず然れども陣痛正規なるごきは多くは第二回轉を營み後頭位若しくは前頭位を以て娩出すべきが故に産婆は此異常を發見せば後頭の存する側方を

下にして臥せしむべし

處置、精密ある診斷を遂げ努責を命じ産婦をして兒の後頭の存する方を下にして臥せしめ以て第二回轉を營ましめん事を勉むべし若し兒頭回轉せず分娩遅延するごきは直に醫師を招くべし

左表は各頭位に於ける分娩機轉を説明したるものにして記憶に便ならしめんが爲あり

此表は暗誦すべし

後頭位		前頭位	
第一 左前小顛門	第二 右前同	第一 左後大顛門	第二 右後同
第一回轉	第二回轉	第一回轉	第二回轉
左より	右より	左より	右より
耻骨弓下に 停止する部	耻骨弓下に 停止する部	耻骨弓下に 停止する部	耻骨弓下に 停止する部
第三回轉	第三回轉	第三回轉	第三回轉
會陰通過 時の頭圍	會陰通過 時の頭圍	會陰通過 時の頭圍	會陰通過 時の頭圍
右顛頂骨の後 部	右顛頂骨の後 部	右顛頂骨及右 顛頂骨の前部	右顛頂骨及右 顛頂骨の前部
左 同上	左 同上	左 同上	左 同上

額面位		額位	
第一 左後	第二 右後	第一 左後	第二 右後
同 部		同 部	
伸		伸	
右より 左へ	左より 右へ	右より 左へ	左より 右へ
頤部		鼻根部 (上顎)	
屈：頤部より顛頂骨直徑に 伸：頭部直徑に		屈：鼻根部より顛頂骨直徑に 伸：後部に至る頭部直徑に	
顔面右半部		左 同上	
右前額部		左 同上	

第一回轉及び第三回轉の部に屈あるは兒が屈服の胎勢をこり頤部胸部に近づくを示し伸は反對の方向即ち伸展運動を示す又た第三回轉の部に屈伸あるは一旦頤部が胸部に近づくの運動をこり次で更らに伸展の運動を爲すを示す

前顛頂骨位、後顛頂骨位

普通分娩に在りても兒頭は少しく斜の位置を取り前方の顛頂骨は後方の顛頂骨よりも少しく深く下降し従つて矢狀縫合は

原因

薦骨胛に近く位するを常とする然れども扁平骨盤又は骨盤傾斜の甚だ少きもの等にありては前方の顛頂骨は後方の顛頂骨よりも著しく深く下降し矢狀縫合は横徑に位して著しく薦骨胛に近づく事あり之を前顛頂骨位と云ひ甚だしきに至りては内診の際兒の耳を觸知する事あり之に反

第百九十五圖



前顛頂骨位を示す

して後方の顛頂骨は前方の顛頂骨よりも深く下降し矢狀縫合

著しく耻骨縫際に近接するときは後顛頂骨位と稱す是等の體

後顛頂骨位を示す



第百九十六圖

狹窄の度甚だしからざれば後方に存する顛頂骨は薦骨胛を滑

勢異常に在りては兒頭は骨盤の邊緣に支へられ陣痛に由りて益々斜めに骨盤内に下降するが故に自然の分娩は甚だ困難なり然れども前顛頂骨位にありて骨盤

處置

りて下降し往々分娩を遂ぐる事あるも後顛頂骨位に在りては自然分娩は殆んど望むべからず何れにせよ産婆若し此の如き位置を発見せば膀胱直腸の排泄に勉め専ら陣痛の障害を除くに勉め兼て醫師を迎ゆる事を忘るべからず

頭位に於ける上肢下肢の脱出

原因

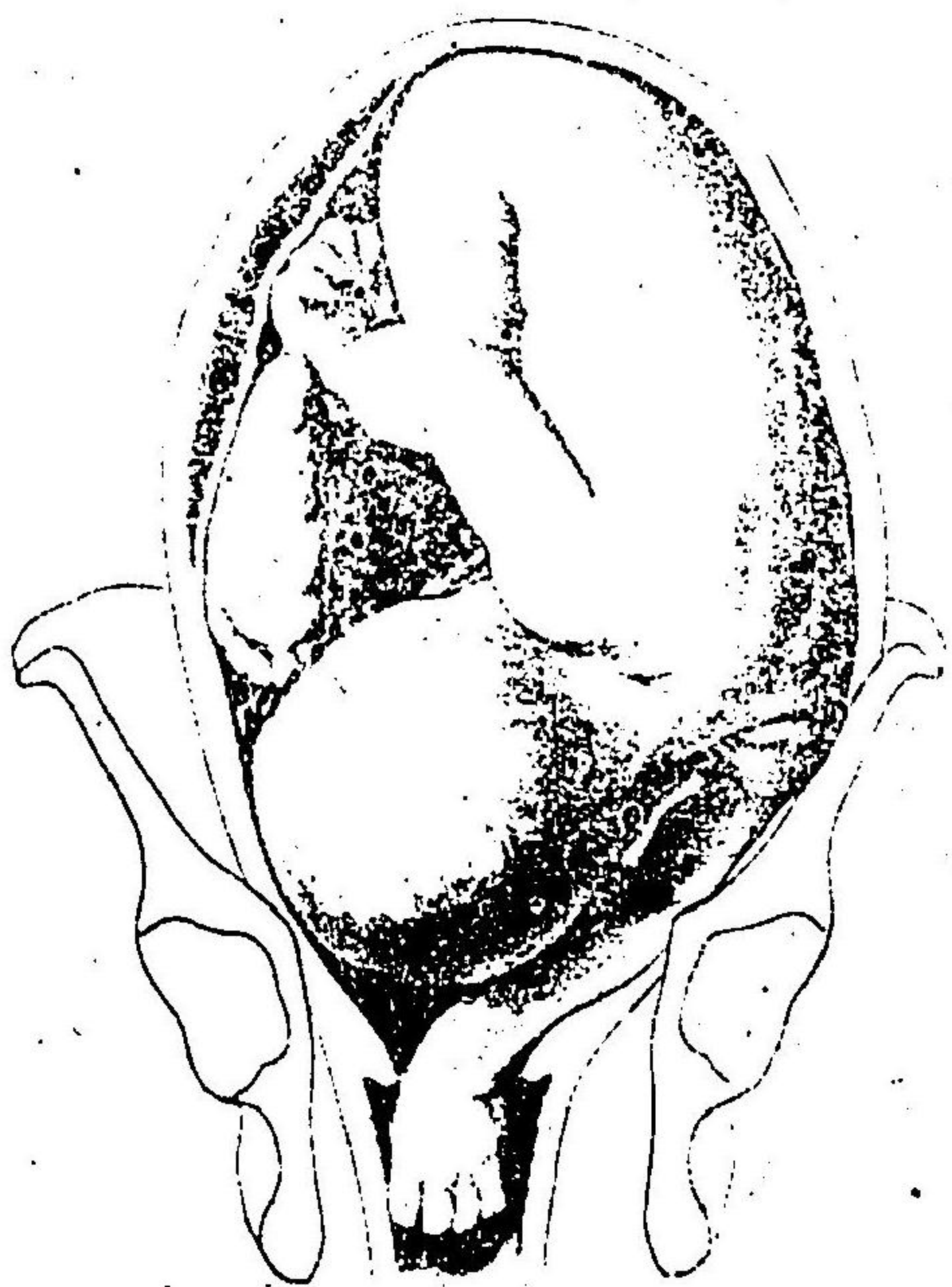
破水後兒頭が産道内を全く閉塞し能はざるこきに於て起るものにして最も屢々小なる胎兒及び死亡せる胎兒、羊膜水腫、狹窄骨盤、懸垂腹、等に來る而して既に破水前に於ても時としては兒頭に沿ふて手或は下肢を觸知する事あれどもかゝるこきは脱出と云はずして下垂と稱す此際若し破水するときは手或は足は羊水と共に子宮口外に脱出し甚だしく兒頭の回轉

頭位に於ける上肢下肢の脱出



○頭産ニシテ一手或ハ  
一足脱出ノ處置ヲ記  
セヨ

第百九十七圖



頭位に於ける上肢の脱出を示す

骨盤の中央に來りて其脱出を防ぎ得るころあり然れども脱出大部なるときは到底此の如き方法にては整備し難きが故に必

を妨ぐるもの  
を妨ぐるもの  
す  
處置、産婦を安  
靜ならしめ努責  
を禁じ上肢下肢  
の下垂若しくは  
脱出せざる側方  
を下にして臥せ  
しむるときは屢  
々整備し兒頭は

らず醫治を乞ふべし而して産婆は脱出せる部分を手にて還納するが如き事を試むべからず

異常の體位をこれる分娩

骨盤端位(俗に逆産云ふ)

○逆産トハ如何

骨盤端位の原因

骨盤端位とは頭部上方に存し骨盤部より産出するものにして其原因を大別して三とす(一)胎兒の運動を容易ならしむるもの即ち羊水過多子宮壁弛緩(殊に經産婦)小なる胎兒(流産兒早産兒)死産兒複胎妊娠(二)兒頭の骨盤腔内へ進入するを妨げらるゝ場合即ち腦水腫後頭の強く發育したるもの(長徑頭櫛)扁平骨盤狹窄骨盤(三)胎兒の頭部より骨盤部の重力大なるもの即ち無腦兒、胎兒骨盤部の腫瘍及び下腹部の腫瘍等な

り骨盤端位を分ちて左の四種とす  
普通の體勢を有するもの

(一) 腎足位(重複腎位) 腎部及び足部同時に先進するもの  
異常の體勢を有するもの

(二) 單純腎位、股關節を強く屈曲して膝關節を伸ばし足部  
を胸及び腹部に接觸せしめ腎部のみ先進するもの

(三) 膝位、膝關節を屈し股關節を伸ばし膝部の先進するも  
のにして左の二種に區別す

全膝位、 兩膝先進するもの

不全膝位、 一側の膝のみ先進するもの

(四) 足位、 足部の先進するものにして又左の二種となす

全足位、 兩足の先進するもの

不全足位、 一足の先進するもの

通常右の四種に分つこ雖も腎足位及び單純腎位を合して單に  
腎位とも稱す尙ほ以上四種に於て兒背の方向に由りて第一第  
二位に分ち第一及び第二分類を區別する事頭位に於けるが如  
し

外診、骨盤端位に於ては膝位あると足位あるとに關せず外檢  
査上凡て全く同一あり即ち子宮底の部に浮動性の球形硬固に  
して大なる兒頭を觸知し耻骨縫上に頭部に比して幾分の軟  
かき稍圓形なる臀部を觸知すべし而して第一骨盤端位に在り  
ては母體の左側に於て第二骨盤端位にありては右側に於て兒  
背を觸知し反對側に於て小部分を觸る可し心音は第一體向に  
在りては母體の左側に第二體向に在りては右側にして臍と同

第一臀足位の外診上の状態を示す

第百九十八圖



X 肝部  
○ 心音聴取部

底部の内容を觸知するは困難なるものにして妊婦診察法の條下に述べたるが如き位置を取らしむるも子宮下部の内容の如く明らかに觸るゝ事能はざるものなり故に縦位なるときは常

一の高さあるか或は其れより少しく上方に於て聴取すべし骨盤端位に於ては子宮底の部に兒頭を觸知し得べき筈あるも初妊婦其他腹壁の緊張せるものは勿論一般妊産婦に就て子宮

欠

MISSING

共に足位に變じ次で前方の臀部は耻骨弓下に止まり後方のも  
の會陰を通過すべし

以上は骨盤端位に於ける普通の分娩機轉なれども分娩經過中  
に於て屢々左の如き異常を呈する事あり

#### 軀幹の異常回轉

(一)例之ば第一體向にありて母體の左側に向へる兒背は臀部  
の産出と共に漸次前方に向ひ肩胛の産出に當りて通常再び左  
方に向ふと雖も時として再び左方に向はずして反て右方  
に回轉し第二體向となりて娩出する事あり或は臀部の産出後  
兒背は前方に向はずして直様後方に向ひ次で右方次に前方に  
向ひ遂に第二體向に變じ娩出する事あり足位にて後方の下肢

の脱出せるものによりては殊に屢々此の如き過度の回轉をなす事あり

(一) 臀部産出後兒背は後方に回轉し腹部を前方に向けたる儘娩出し顔面は耻骨弓下より娩出し兒頭の娩出を終る事あり

### 體勢異常

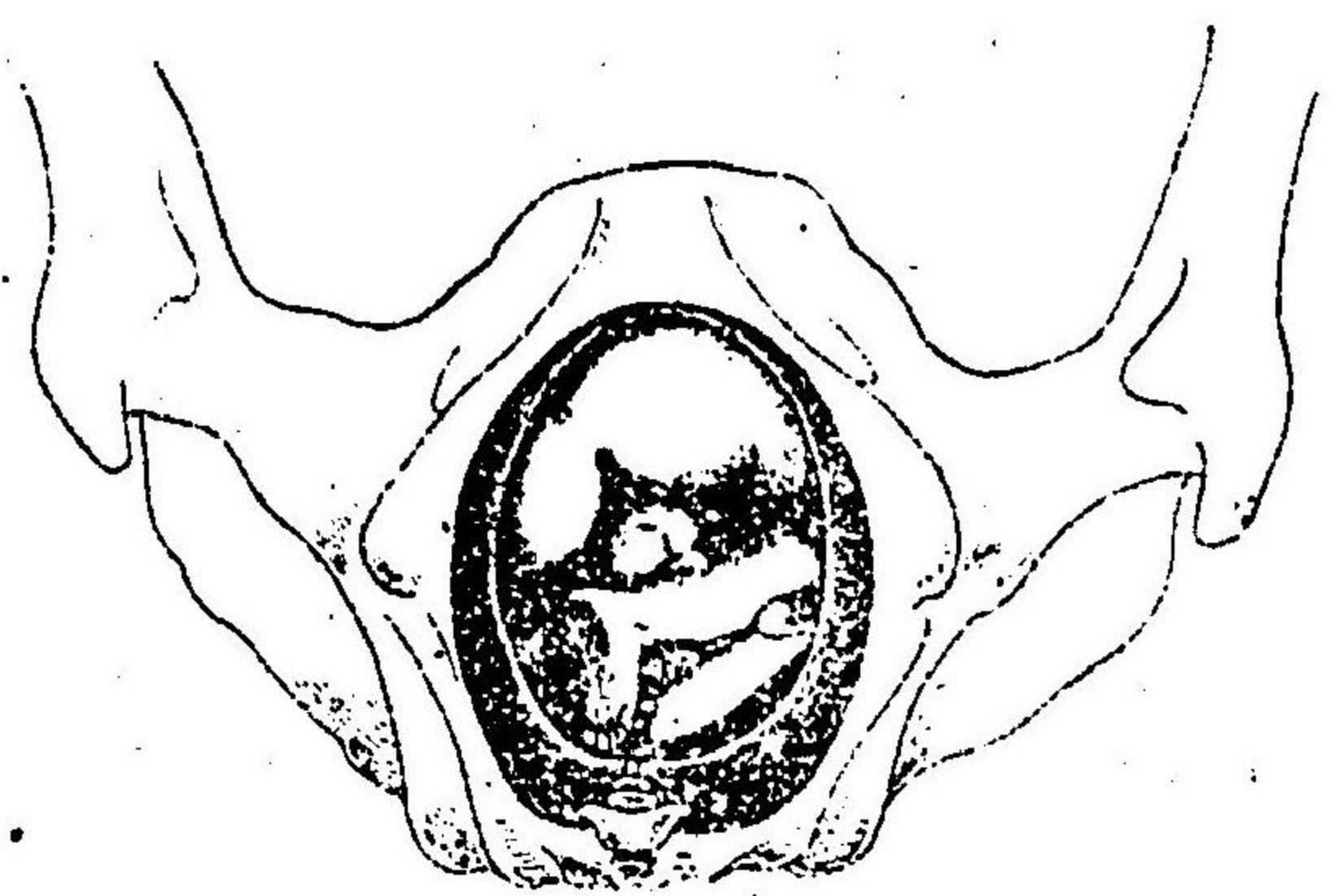
(一) 上肢の舉上、通常の分娩機轉にては上肢は交叉して胸部に接せるが故に胸部の娩出と共に難なく娩出すべしと雖も時として上肢は全く伸展して高く舉上し頭部に接着する事あり然るときは兒頭の娩出は甚だ困難なり

(二) 頭部伸展の體勢を取り頤部胸部より遠ざかる事あり然るときは伸展の度の強さに従ひ頭圍は増大するが故に分娩は

益々困難あり

内診、破水前にありては内診を行ふも先進部不正にして診断第二臀足位内診上の状態を示す

第 二 百 四 圖



往々困難ありと雖も足部若しくは足部の衝突状の運動を觸知せば診断は確實あり破水後に至れば二個の半球形を呈する柔軟なる臀部は一つの溝によりて左右に分たれ其中央に於て肛門を觸れ第一骨盤端位にありては肛門より指を左方に送るに尾骶骨の尖端を觸知し是に沿ふて指を上方に送るに珠數玉を併列せるが

手と足の鑑別

手と足の鑑別さへも出来ざるものは到底社會に立て産婆の業を営み能はざるべし注意すべし

如き薦骨の棘状突起を觸れ得べく又た肛門より指を右方に送るに男兒に在りては陰囊陰莖女兒に在りては陰唇を觸知すべし第二骨盤端位にありては第一と左右相反するのみ而して臀足位に在りては薦骨の反対側に於て足を觸知す破水後時を経たるものに在りては産瘤の發生により往々診断を誤り時として肛門を口腔と誤まる事あり然れ共口腔には齒槽突起舌あるを以て容易に區別し得べし又た兒の鼠蹊部に手指を挿入し得るときは稀れに横位に於ける腋窩と誤まる事あり然れ共こは精密なる内診と外診に由りて鑑別する事困難ならず殊に足位なきときは手と足の鑑別をなさば容易なり即ち足は手に比すれば其巾狭くして長く踵を有し趾は指に比すれば短く且つ五趾は殆んど同長を有し拇指は離開して運動自由あるも跗

趾と指を誤るなかれ  
左右足の鑑別

趾は離開する事なく且運動自由からざる等にて區別し得べし其他臀部は内診の際緊張せる卵膜と誤る事あり注意を要す又足位にありては先進せる足の右足なるや左足なるやを知る事必要なり之れを知らんには足蹠と檢者の手掌を合せ恰かも握手するが如くすべし此際拇指と跗趾と適合し握手し得べき状態にあらば同名足なり即ち檢者左手を用ひしならば左足なり或は足蹠を下方に向け足尖を前方に回轉し檢者の指を跗趾側より小趾側に向つて送るべし此の際檢者の指の方向が母體の左側に向はゞ左足にして右側に向はゞ右足なり或は又た檢者の手掌を足背に接觸せしめ檢するも可なり此際檢者の指と足趾の方向は相反する如くす而して檢者の拇指と跗趾と相合するときは異名側の足と知るべし之れに反して手掌足蹠とを合

せ、檢し(指し趾の尖端同方向を取らしむべし)拇指と跖趾と相合するときは異名側の足と知るべし

骨盤端位分娩の難易

骨盤端位分娩の利害

○頭産ト臀産ト何レカ易キヤ其理由如何  
○頭蓋位ニ比スレバ骨盤位ノ豫後不長ナル理由ハ如何

骨盤端位に於て胎兒は通常の大きにして産道に異常なく産出力も正規なるときは多くは自然の分娩を遂げ得るものなれども先進せる骨盤は頭部に比すれば小なるが故に頭部通過の際は更らに自ら産道を擴張せざるべからず故に此際幾分の時間を要し此間に臍帯は壓迫せられ胎盤血行の障害を來す事多く従つて胎兒に危険を及ぼす事屢々あり而して骨盤端位の中最も不良なる位置は全膝位全足位にして次は不全膝位不全足位次は單純臀位最も良好なるは臀足位なり即ち全膝位全足位に

○完全足位ト不全足位ノ豫後ハ如何

ありては先づ臀部の周圍のみにて子宮口を開くも不全膝位不全足位にては一侧の下肢之れに加はり單純臀位にては兩側の大腿だけ周圍を増し臀足位にては臀部及び大腿に加ふるに下腿の太さも加はり殆んど頭圍の大きさに達するが故に分娩は益々容易ありとす

骨盤端位は又た頭位に比すれば先進部一般に小にして且つ不正形なるが故に頭位に於けるが如く圓滑に産道を擴張する事能はず且つ頭位に於けるが如く先進部を以て全く産道を閉塞する事能はざるが故に羊水の漏出臍帯の脱出を來し易く或は又た已に述べたるが如く屢々異常の回轉異常の體勢を取る事あるが故に胎兒に危険を及ぼすの機會極めて多し、上述の理由により骨盤端位に於ては直接に母體の危険を來す事は稀れな



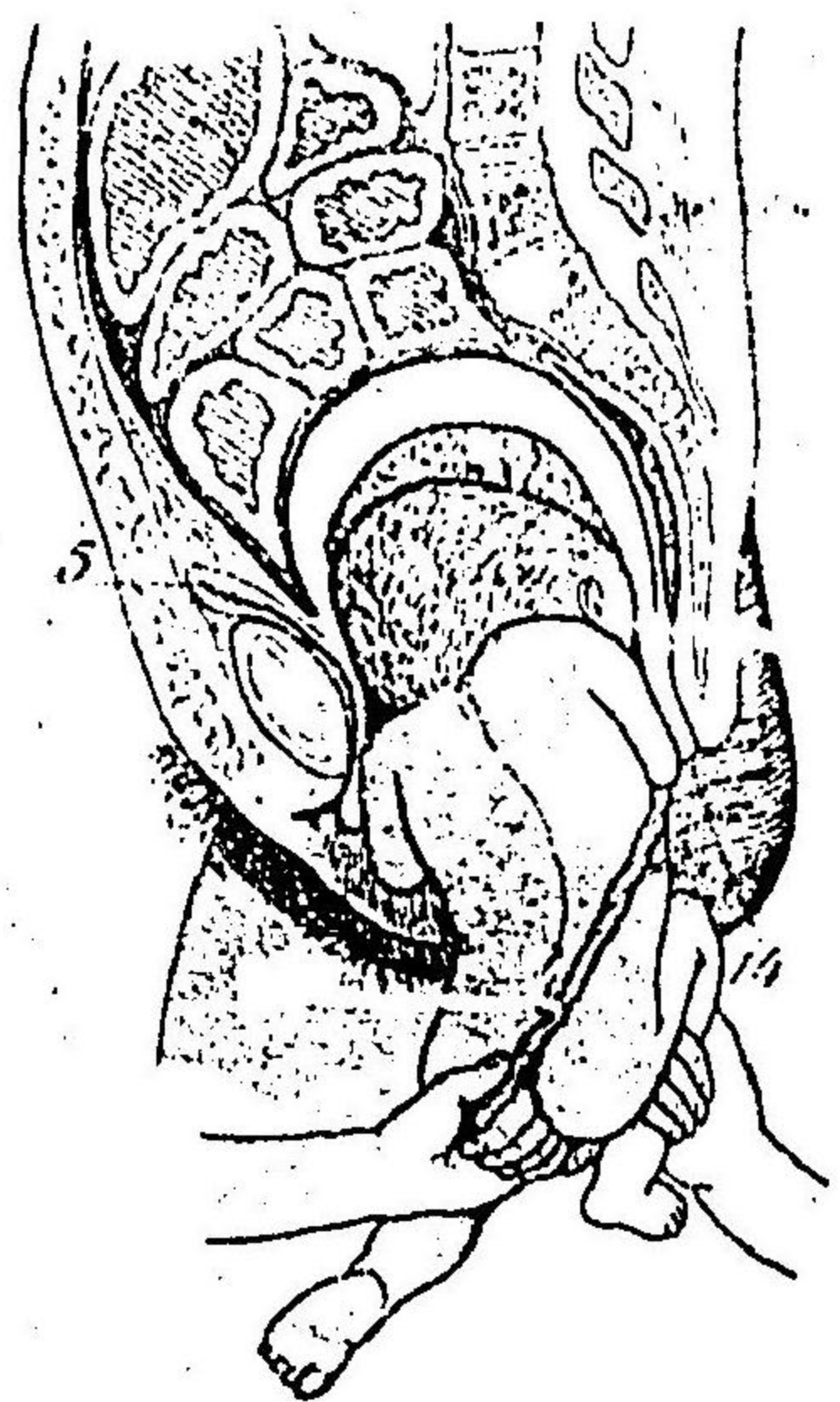
○骨盤端位ニ於ケル取扱法

り。雖も娩出術等の必要なる場合甚だ多きを以て従つて胎兒の死亡數は後頭位の産に於けるよりは甚だ多し

**處置**、上述の危険あるが故に骨盤端位の診斷確定せば其危険の迫まるる否に關せず速かに産科醫を招き其指揮を受く可きものにして其來着前開、口期に在りては母體を兒背の存する側方に臥せしめ腹壓を禁じ内検査等に由りて胎胞を破損せざる様法意し傍ら小兒の蘇生術其他に要する器具温湯冷水等を準備し置くべし胎胞既に破裂せば嚴重ある手及び外陰部の消毒を施し内診を行ひ臍帶脱出の有無を検し異常あくば屢々胎兒心音に注意し成るべく自然に且つ徐々に臀部の産出する様注意すべし而して臀部已に産出を初むるときは産婦を仰臥せしめ臀部に枕を挿入して之を高くし若し寢臺なるときは横床

此圖の臍帶の握り様は餘り力を入れ過ぎたり

圖 五 百 二 第



位を取らしめ（横床位とは産婦を寢臺上に横に臥せしめ臀部を床端に置き臀部には枕を挿入し寢臺に沿ふて二個の椅子を臍帶の兩脚間に跨がれるを離解する圖

せば兒背の存する方の手を以て後方より之を支へ腹部已に産出したるときは他方の手を以て臍帶の胎盤端を引きて之れを

置き産婦の左右の脚を載せ或は兩脚を介者に保持せしむるを云ふ）  
産婆は産婦の兩脚間に座を占め臀部已に陰唇外に現はるゝに至らば消毒したる一手を以て會陰を保護し臀部産出

緩め、或は胎兒の兩脚が臍帶に跨がり居らば其背部に存する一端を引きて之れを弛め後方の臀部を越へて滑脱せしむべし已に臍部まで娩出せば臍帶は胎兒の體部と産道との間に壓迫せられ暫時にして胎兒の窒息を來すべきが故に此の際陣痛正規あるときは産婦に強き腹壓を命じ娩出尙ほ遅延せば介者をこて陣痛と同時に子宮底を骨盤腔内に向つて押壓せしめ産婆は一手を前方の臀部に貼じ兒背を前方に回轉せしむる様注意し次で前方の肩胛耻骨弓下に來らば兒の腹側に向へる一手即ち前方の臀部に貼したるものを以て兒の足部を握み軀幹を前上方に向つて舉上し後方の肩胛を會陰より産出せしむ此際他手を以て會陰を保護すべし次で兒の後頭前方に回轉するときは強き腹壓を命じ介者をして子宮底を壓せしめ先づ肩胛を後方

會陰に向ひ押壓し後頭を耻骨弓下に來らしめ次で胎兒體部を舉上し會陰より顔面前頭部を産出せしむ胎兒産出後の處置は頭蓋位の分娩に異なる事なし  
若し臍部産出後時を費し胎兒益々危険に陥るか若しくは母體の危険あるときは醫師到着の如何に關せず産婆は骨盤端位挽出術を行ひ以て母兒兩體を救はざるべからず

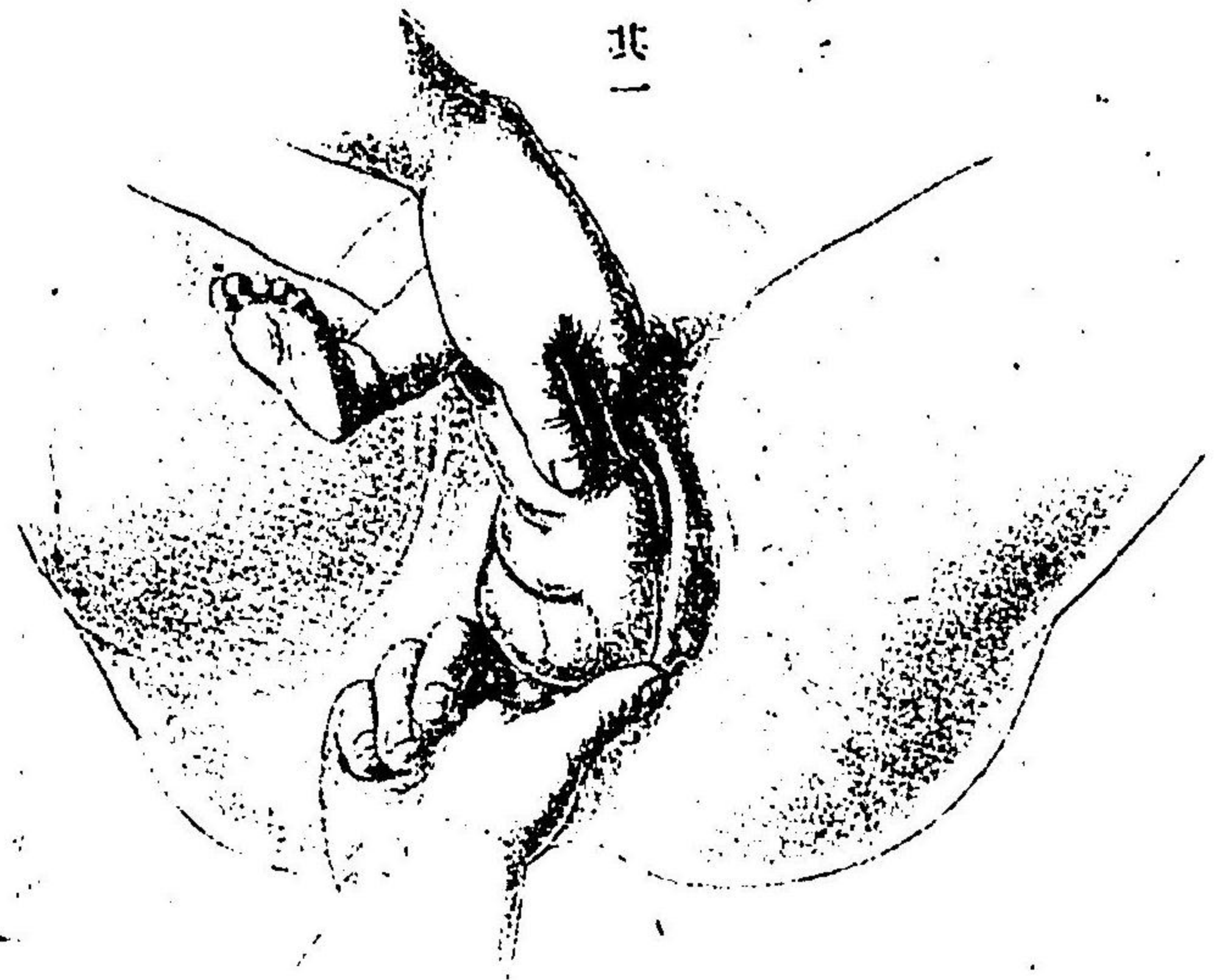
骨盤端位挽出術

産婆が骨盤端位挽出術を行ふは母體若しくは胎兒の危険に迫れる時醫師の力を借る事能はざる場合にして殊に臍部娩出後分娩の遅延する場合を以て最も多しとす然れ共臀部産出前に於ても早く娩出術を行はざるべからざる場合も亦之なきにあ

○産婆が骨盤端位挽出術を行ふべき場合  
○骨盤端位挽出法ヲ記  
セヨ

産婆は自然力を利用すべし押し出す又たは引き出すと云ふ時は常に陣痛の力を借れ

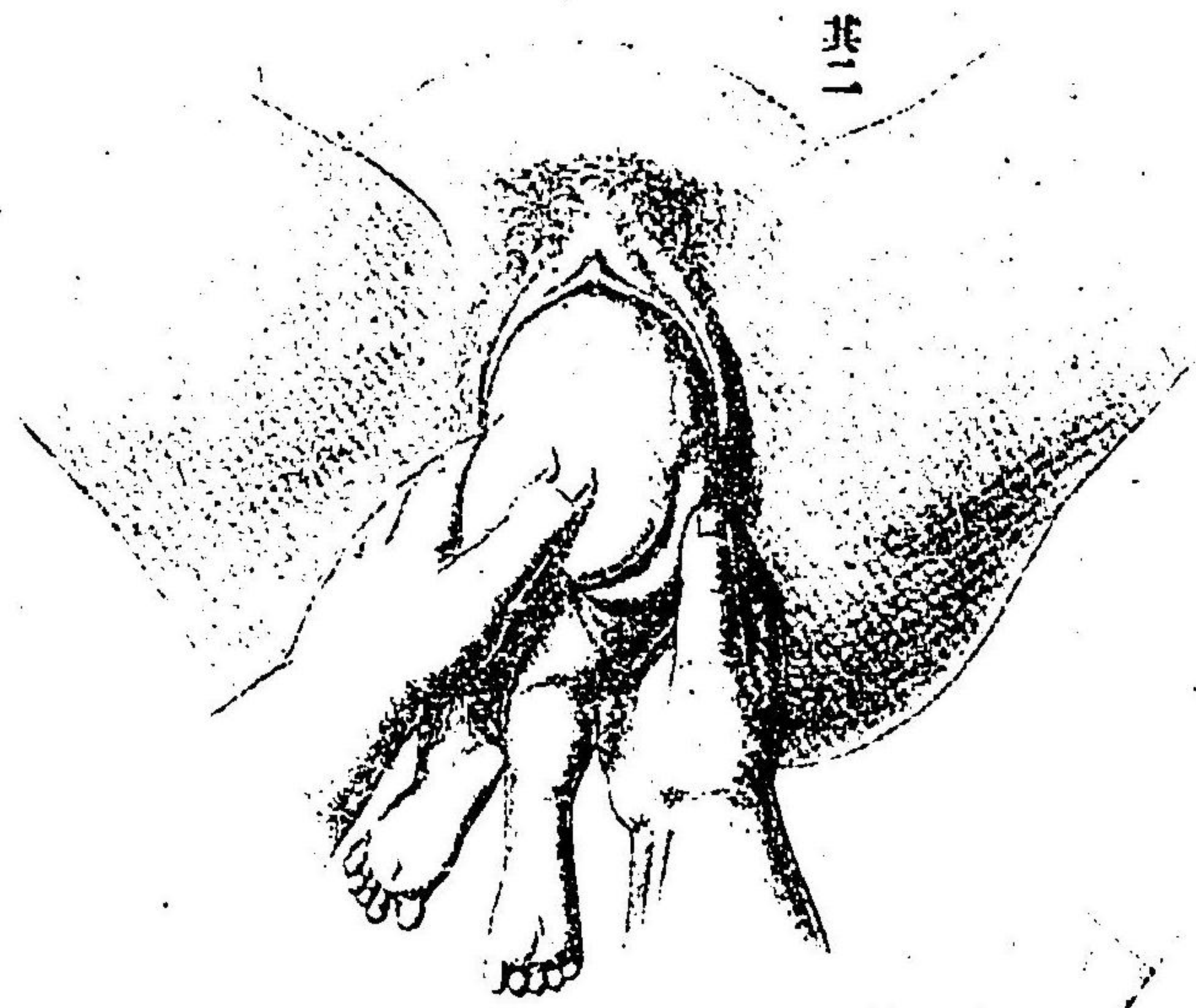
第 二 百 六 圖



骨盤端位挽出術(前方の一足に既に挽出せしものも)  
後方股關節の右に指示の鉤をさす

らず而して娩出術を行ふには子宮口は常に充分開大し居らざるべからず又た注意すべきは牽引を成るべく陣痛時に於て爲す事即ち成るべく自然力を利用して臍部の娩出までは徐々に牽引し

第 二 百 七 圖



同

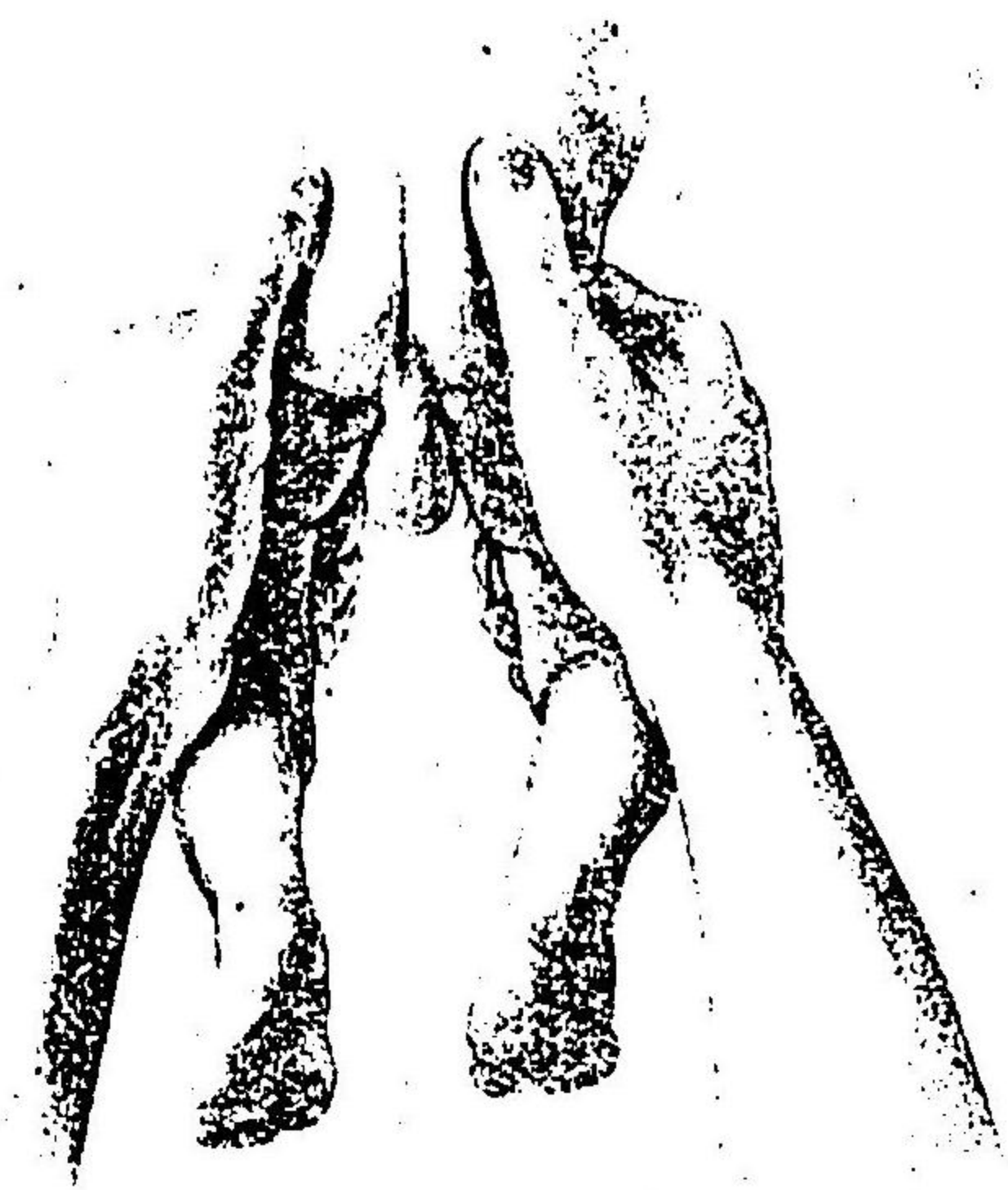
左方の股關節に指を釣して挽出す

其以後は暫時も時を失せざる様の方針を取るにあり何ごかれば陣痛間歇時に當りて強き牽引を試みるときは普通の體勢を以て胸部と共に生るべき上肢も産道の一部に支へられ爲めに舉上し

頭部も伸展の體勢を取るに至り娩出術は益々困難となればな

同 (其三)

第 二 百 八 十 圖



り又た胎兒の四肢若しくは軀幹を把握するに際しては常に其の大部分をば握り腹部には強壓を加へざる様注意すべし然らざれば鎖骨四肢等の骨折内臓殊に肝臓の破裂を來す事あり

娩出術を行ふに當りては

背部を前方に回轉せしめ臍部まで來出す  
常に胎兒部分と同名側の手を用ゆべし先づ胎兒足部腔内に下降しあらば之れと同名手の中指(出來得べくは環指小指を加

欠

MISSING

こゝこそ猪武者なるべからず猪武者なる時は柔軟なる兒の上肢を折斷するの恐あり

若し陣痛弱ければ介者をして子宮底を骨盤腔内に向つて押壓せしめ先づ肩胛下角の娩出するまで牽引すべし而してのち兒の腹側に相當する手指を前胸部に送り上肢の此處に存するや否やを検し上肢此處にあらば肘關節部を握りて之れを娩出せしむべし上肢若し舉上しあらば此の手を直様足部に送り胎兒の後方より示指を兩足間に挿入し拇指及び他の三指を以て左右の足關節部を把握し他手を以て上肢の離解カハカを行ふ

**上肢の離解** 上肢の離解は常に後方薦骨窩トキハダに向へるものより始め先づ之と同名の手を用ひ示指と中指を兒の背面より肩胛上膊に沿ひ挿入し指の尖端をして肘關節に至らしむ此際他の足部を把握せる手を以て足部を兒背と反對側の後下方に強く牽引するときは手指挿入に便利なり而して指の尖端已に肘

關節に達するに至らば足部を強く兒背と反對側の鼠蹊部即ち側前方に牽引し同時に挿入せる手指を以て上膊を軀幹の縦軸の周はりに回轉せしむべし然るときは上肢は胎兒自身の手を以て其顔を撫するが如き運動方向を取り漸次下降するを以て遂に之れを拇指と他の四指との間に握み挽出せしめ得べし次で此の手の手掌を以て離解せる上肢と共に側胸部を支へ足部を握れる手を他側の側胸部に貼じ（兩拇指は背柱の兩側にあらしむべし）然る後兒の顔面側に向つて回轉し前方の肩胛全く後方に回轉し終らば前と同様に上肢の離解を行ふべし斯の如くして上肢全く離解せば再び兩手掌を側胸部に貼じ拇指を脊柱の兩側にあて軀幹を強く後下方に牽引す然るときは前方の肩胛は耻骨弓下に來るべし次で軀幹を前上方に提擧せば後

方の肩胛は會陰を通過し全く産出すべし

後進兒頭の挽出

次で側胸部に貼じたる儘の兩手を以て兒背を前方に回轉せしめ後頭を耻骨縫際に向はしめ若しくは斯くせずして直様第二番に上肢の離解に用ひたる手を膈内に挿入し中指示指の尖端を鼻の兩側に貼じ或は口中に入れて齒槽突起部に貼じ他手の中指二指を以て頸部を挟み残り三指を以て肩部を握み先づ膈内の手を以て兒頭の横軸回轉を助け兒をして全く屈伏の體勢をこらしめ然る後頸部に貼じたる手を以て頂窩が耻骨弓下に現はるゝまで後下方に牽引すべし此際兒頭の進行緩慢ならば介者をして子宮底を押壓せしむるも可なり次で軀幹を前上方

指を口中に入るとは牽引の爲めならず兒頭の正規の胎勢を保たしむる爲めなり

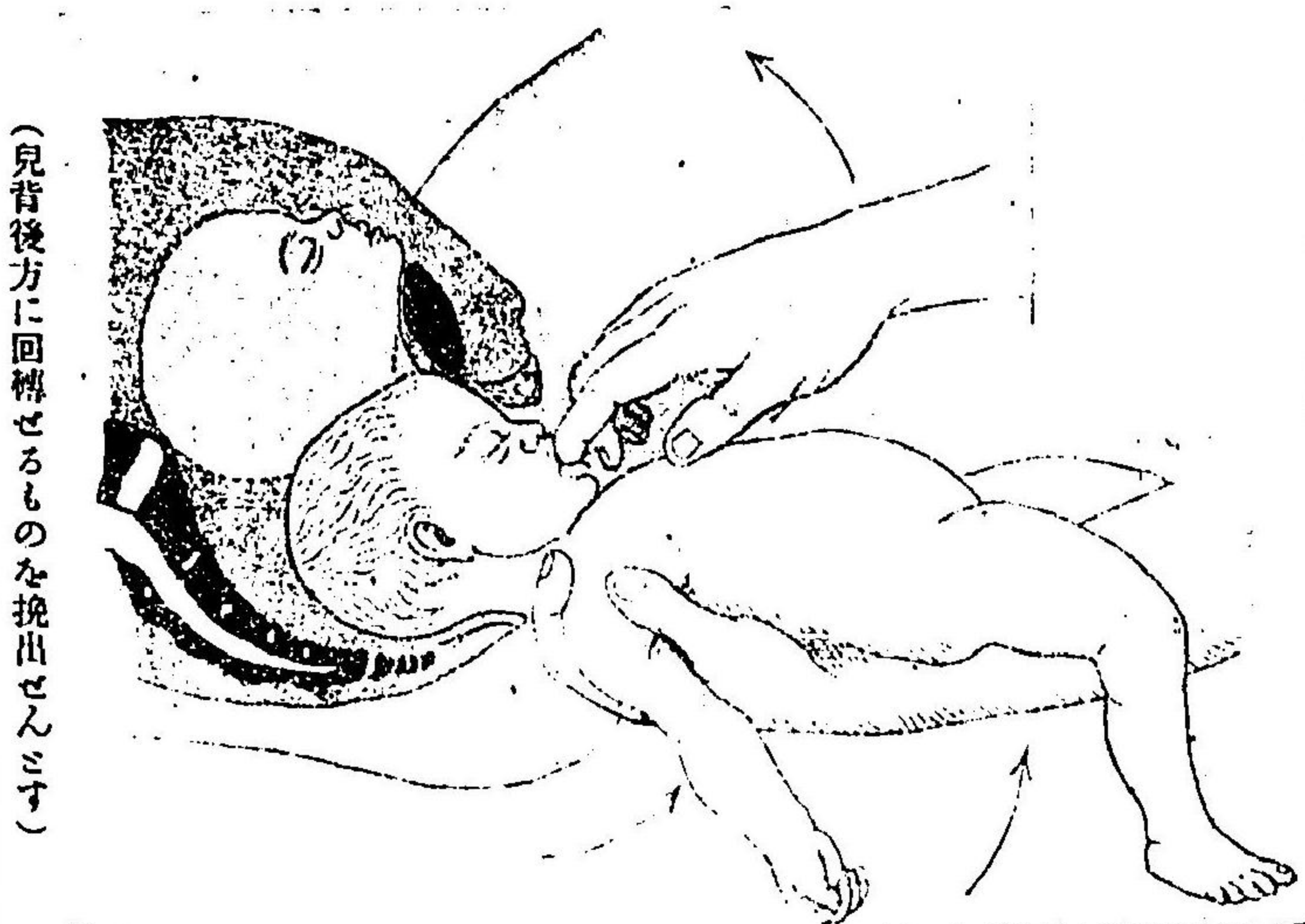
即ち母體の腹部に向つて回轉せしめつゝ牽引せば胎兒は全く挽出を終るべし

### 兒背後方に向へる骨盤端位の挽出術

骨盤端位に於ける兒背は分娩經過中多くは前方に向ふものあり、雖も臀部産出後時として後方に回轉する事あり、産婆は此際其回轉の方向に従つて回轉を助くるときは體向は全く變ずる事あるも兒背は終に矢張り前方に向ふて挽出すべし之れに反して自然回轉の方向と相反して牽出するときは兒背は遂に後方に止まり顔面は前方に向ひ舉上せる上肢の離解及び伸展せる兒頭の挽出は甚だ困難なるに至るべし而して此際舉上せる上肢を離解せんと思はゞ前方に向へる顔面を側方に回轉

此の挽出術は甚だ困難なり醫師に托すると肝要なり

第 二 百 七 十 七 圖



(兒背後方に向へる骨盤端位の挽出術)

同 (其十二)

する時は一方の上肢は後方薦骨窩の方に至るを以て通常の離解法を以て容易に離解し得べし然れ共此の如き顔面の回轉は甚だ困難なるものにて殊に兒頭が深く骨盤腔内に下降せるか或は伸展の體勢を取れる場合に於て然りこそ故に顔面の回轉出來ざれば止むを得ず顔面



熟讀を要す

の前方に向ひたる儘已に述べたるが如き離解法を試みて可なり然し乍ら耻骨縫際の後方は薦骨窩に於けるが如く空隙くうげき少なきを以て離解困難にして知らず識らず力加はり上肢の骨折メキヤを來し易し次で兒頭を挽出せんとするには顔面後方に向へるものさ全く反對の法を用ゆれば可あり

凡て骨盤端位挽出術に限らず子宮の内容(胎兒若しくは胎盤)を牽出若しくは壓出せんとするときは常に自然力を助くるの方針を取り必ず産出力の起るに同時に牽引或は壓出すべし然るときは胎兒は異常の回轉體勢を取るこ少なきものあり

横位

横位とは胎兒の縦軸と子宮の縦軸と交叉するもの即ち語を換

○斜位トハ如何其種類ヲ記セヨ

横位の區別

へて言へば胎兒が子宮内に於て横に位するものを云ふ而して眞正の横位は甚だ稀れにして通常兒頭は臀部より低く位し肩胛部最も先進すべし故に亦た斜位或は肩胛位の名あり

横位にありても兒頭の位置に由りて第一第二を區別し兒頭母體の左側にあるものを第一横位と稱し右側にあるものを第二横位と云ふ而して兒背の前方に向ふを第一分類後方に向ふを第二分類と稱する事縦位に於けるが如し

横位の原因

横位は經産婦殊に腹壁子宮壁の弛緩せるもの來り易く初産婦にして横位を來すは狹窄骨盤の場合に多し其他一般に産道に腫瘤等ありて兒頭若しくは骨盤端の先進を妨ぐるもの例之は骨盤内の腫瘍前置胎盤の如きものも横位を來すべし亦た羊水過多症複胎妊娠死亡せる胎兒等も横位の原因となるものあり

○横位ノ徴候ヲ記セ

り

外検査、腹部は横に廣くして、子宮底及び耻骨縫、際上は空虚あり而して一側に於て、

第一横位の外診上の状態を示す

兒頭他側に臀部を觸

れ第一分類あるときは

は兩者間に兒背を觸

れ第二分類なるときは

は明からに小部分を

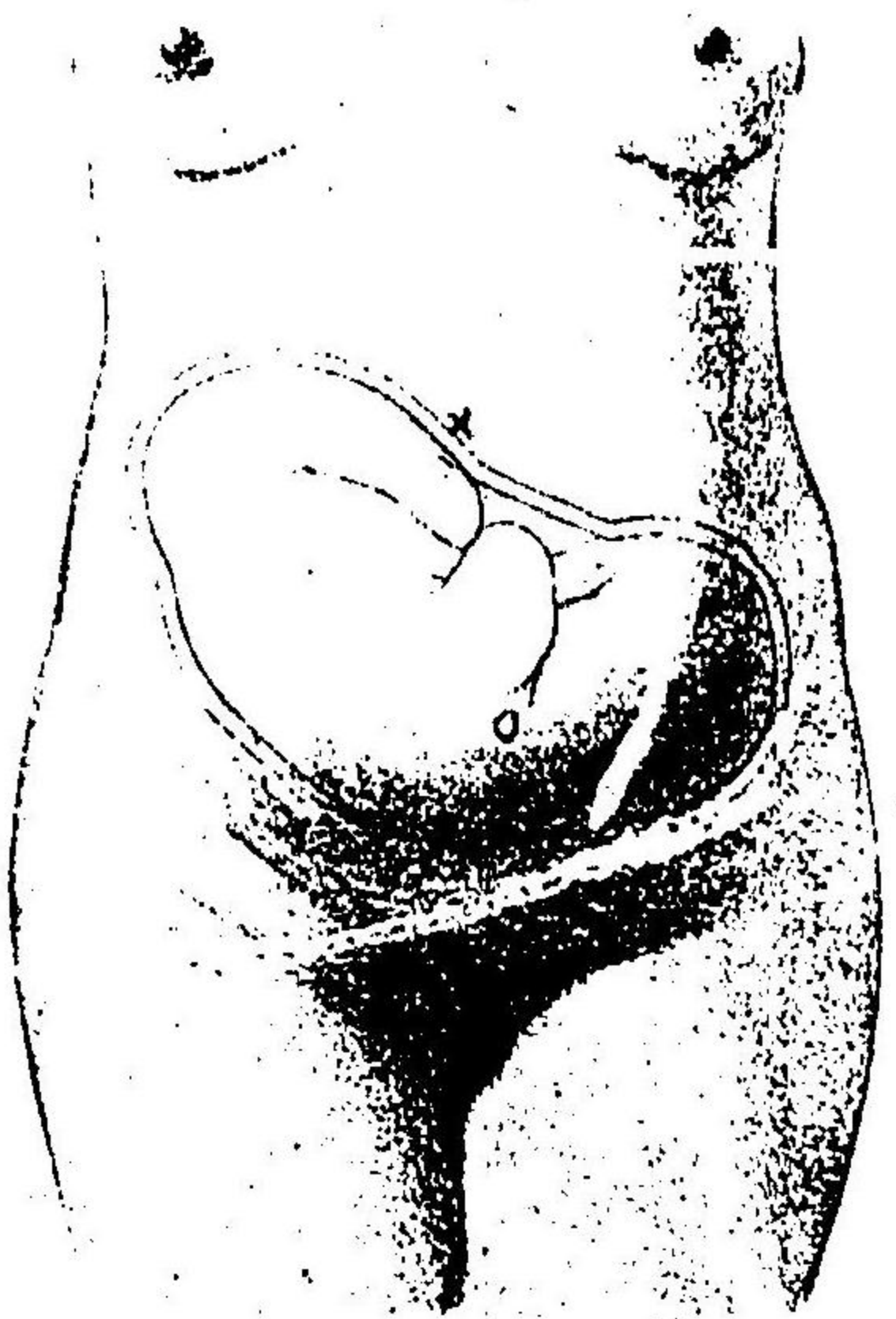
觸れ得べし、心音は白

條線より兒頭側に於

て頭蓋位に於けるより少しく下方に於て聴取し得べし

内診、破水前に於ては、一も胎兒の先進部を觸知する事能はず

第二百八十八圖



× 臍部

○ 心音聴取部

○横位ニシテ一手脱出セルモノ其左手ナルヤ右ナルヤ及び其處置如何

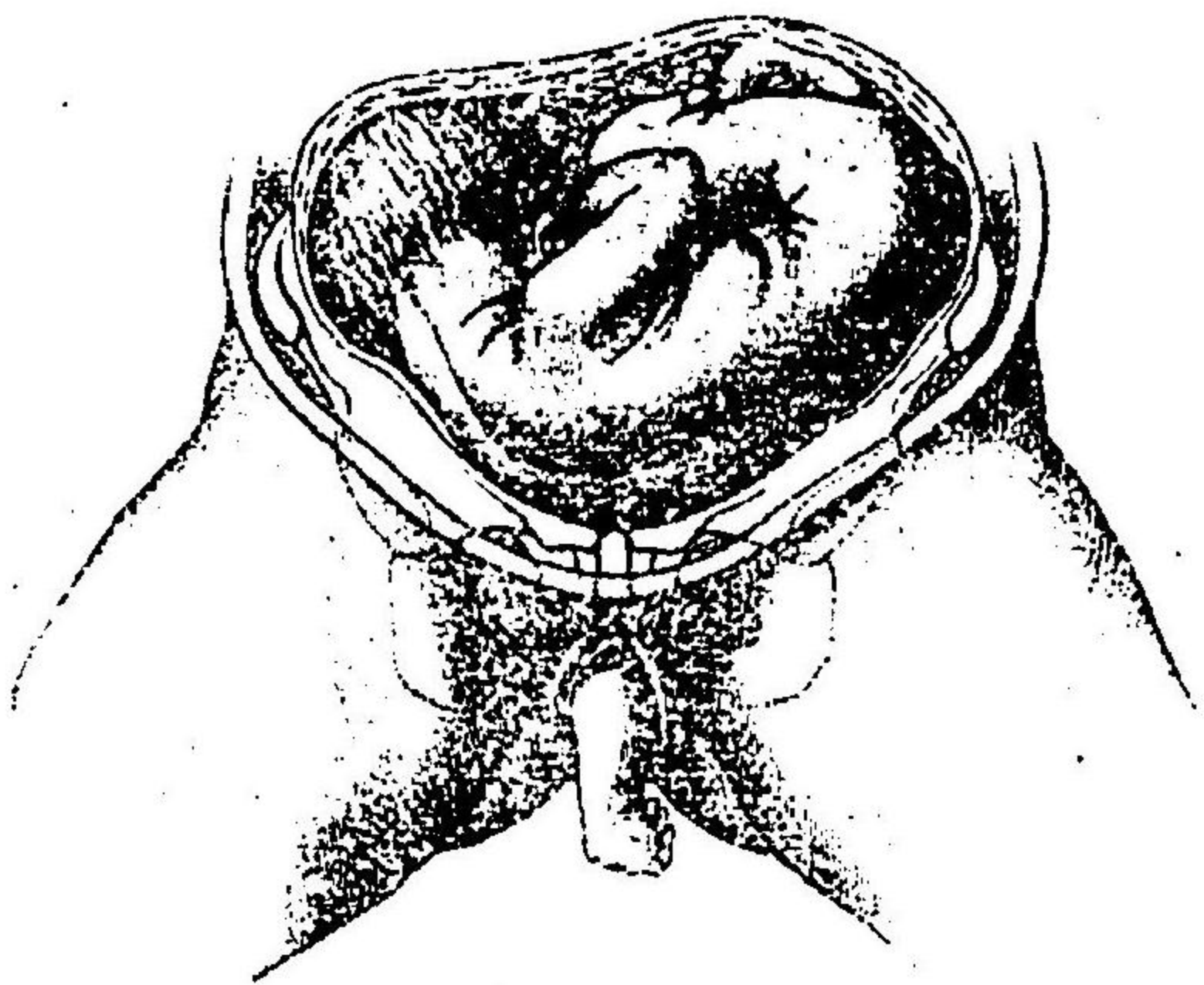
○横位ノ第一體向第一分類ニテ腔内ニ右手ヲ脱出シタル時ノ診斷如何

子宮口開大し胎胞破裂せるものに在りては肩胛部を觸知し得べし而して時として肩胛と臀部と誤まる事あるが故に注意して、肋骨を探ぐる事必要あり之れに由りて横位なる事判明せば、次で第一第二横位を區別すべし即ち先づ腋窩を檢查し腋窩母體の右方に開くときは兒頭左側に存す即ち第一横位にして腋窩左方に開くときは兒頭右側に存し即ち第二横位あるを知るべし次にS字狀の鎖骨前方にあらば第二分類にして三角形の肩胛骨前方にあらば第一分類なるを知るべし且つ又横位に於ては屢々上肢の脱出を伴ふが故にかゝるときは足位の條下に述べたると同様の手段を以て其左右を定め而して腋窩に由りて兒頭の何れにありやを定むれば兒背の方向は直ちに定まるべし(足位の左右足鑑別の條下を参照)

浸軟死胎等に在りては、先づ胎頭を屈せしめ、胎盤を折れしめて、胎頭を先づ産出せしむ。胎頭が屈せしむるに、胎盤を折れしめ、胎頭を先づ産出せしむ。胎頭が屈せしむるに、胎盤を折れしめ、胎頭を先づ産出せしむ。

分娩経過

第二横位にして左手脱出せるを示す



第二百九十圖

子宮下部は延長して非薄となり將に破裂せんす

横位に在りては、到底自然の分娩をなす事能はず。常々胎兒の少なるか(妊娠八ヶ月前の胎兒)或は死亡せる場合若くは骨盤頗る大なるごきに於ては、兒體は屈曲して自然に産出する事あれ共此の如きは非常に稀れなるを以て若し自然に放置するときは胎胞は早期に破れ、羊水は悉く漏出し、上肢臍帯の脱出を招き、肩胛部は強く骨盤内に壓入せられ、陣痛極めて増劇し

○横位分娩ニ當リ産婆自カラ處置スル場合  
○横位ニシテ已ニ破水シ且ツ臍帯脱出シタルトキハ如何ニ處置スベキヤ  
○同術ヲ要スル場合如何

遂に痙攣状態となり子宮壁は胎兒に接觸し胎兒は血行障害の爲め早く死亡し、子宮下部の壁は極めて延長して非薄となり終には陣痛發作と共に破裂し母體も出血のため死に至るべし或は又た胎兒の壓迫により軟部産道の壞死を來し胎兒は早く子宮内に於て腐敗し母體は産褥熱と同一の熱病によりて死するに至るべし

處置、横位は産婆の處置すべきものに有らざるが故に時を移さず、産科醫を招きて之れに依頼すべし而て醫師の來着前は身體を安靜ならしめ、努責を禁じ内診を避け成るべく長く胎胞を保存せん事を勉め母體を兒頭の存する側方に臥せしめ胎兒の心音に注意し上肢若し脱出せば消毒せる綿紗を以て之れを包み決して不潔ならしむべからず破水後は殊に早く手術を要す

○回轉術ノ種類ハ如何

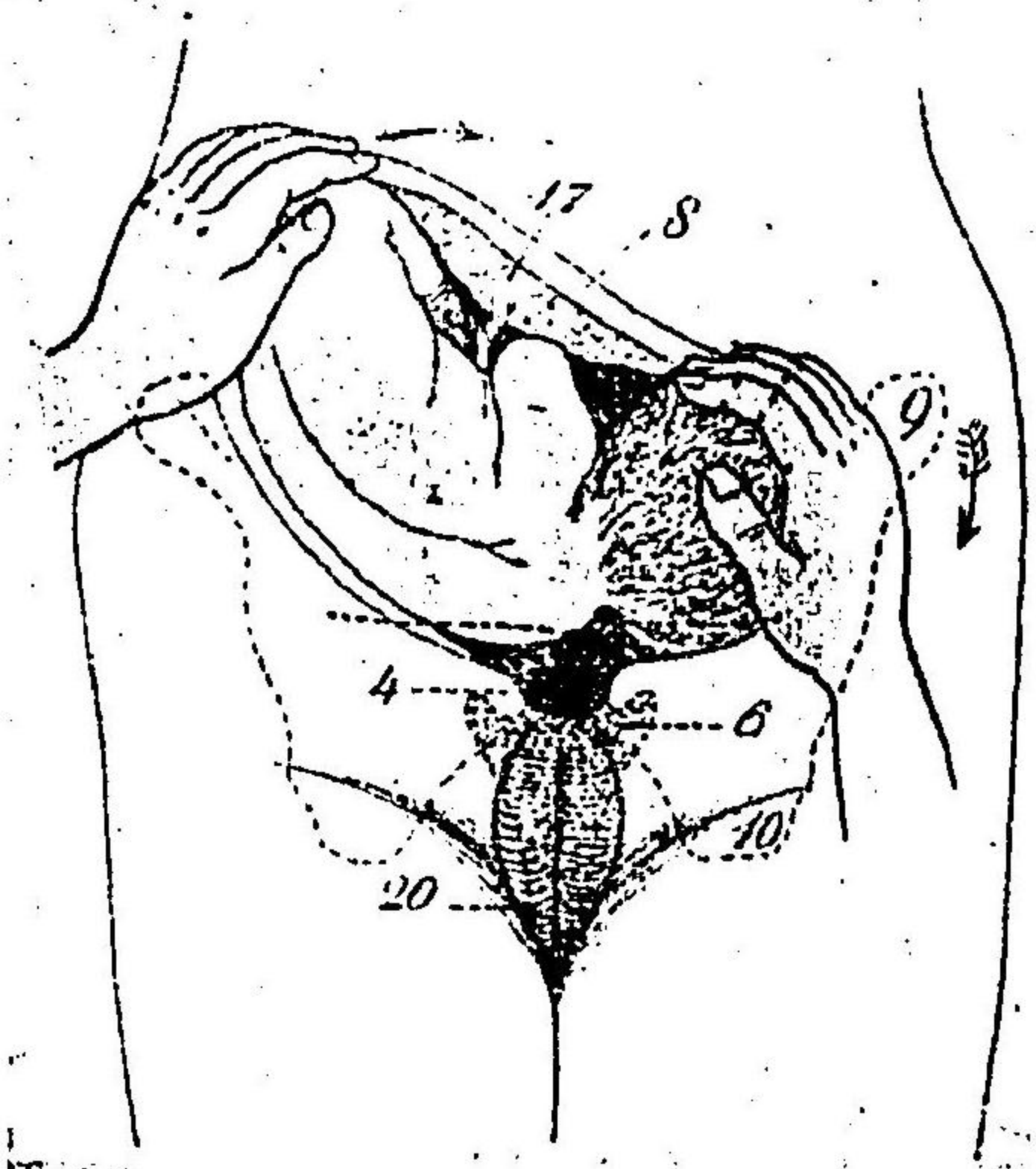
るを以て消毒液等を整へ排尿せしめ浣腸を行ひ醫師來らば直ちに手術し得る様準備し置くべし

總て胎兒は縦位に在りてのみ自然分娩を營み得るものあるが故に横位あるときは之れを縦位に變ぜざる可らず即ち此の如き場合に醫師の施すべき手術をば回轉術と云ふ此の回轉術に二種あり一を外回轉術と云ひ一を内回轉術と名附く何れも横位を頭位に變ずるものと骨盤端位に變ずるものとの二種ありて産婆の學力技術を以てしては到底此の如き産科手術を行ふ事能はざれ共外回轉術のみは醫師の來着前又は來着の遅き時に於て産婆の許されたる處置の一として行ふ事を得べし

### 外回轉術

○横位ノ發候及ビ外部  
ヨリノ回轉術  
○横位外回轉術

圖 十 二 百 二 第



横位を頭位に回轉せしめんと欲せば妊婦を仰臥若くは兒頭側に臥せしめ産婆は其の傍らに座を占め陣痛間歇時に際し一手を腹壁上より兒頭に貼じて骨盤腔に向つて押壓する際他手を

第一横位に外回轉術を行ひつゝあるを示す

腹壁上より臀部の下方に貼じて子宮底に向つて押壓し兩手相對向して兒頭を骨盤入口に臀部を子宮底に來らしむ此際陣痛發起せば胎兒の位置を固定するのみに止